淡海力

～OH！魅力～

おうみ未来塾　5期生の記録

おうみ未来塾５期生活動記録誌

淡海力

～ＯＨ！魅力～

2003年6月7日～2005年3月5日

目　次
contents

① おうみ未来塾５期生に向けて …… 1

塾　長　日髙　敏隆
運営委員　北村　裕明、岡﨑　昌之、藤井　絢子、
岸田　眞代、辻川　作男

② おうみ未来塾５期生の紹介 …… 5

③ おうみ未来塾５期生の２年間 …… 7

④ グループ研究活動

（1）シンク『環境』コミュニティG …… 23

（2）まなぶくん …… 43

（3）応援志隊 …… 65

（4）Four Leaves …… 83

⑤ 個人のページ …… 103

⑥ 事務局からメッセージ …… 123

おうみ未来塾　5期生にむけて

おうみ未来塾塾長
日　髙　敏　隆
(総合地球環境学研究所長)

卒塾を祝って

5期生の皆さん、卒塾おめでとう！

2003年の6月から2年間の間にずいぶんいろいろなことをしましたね。皆さんの熱意とエネルギーと実行力に敬服しています。

考えてみると、昔のぼくらにはこういう場はありませんでした。

その点だけでも、おうみ未来塾は皆さん一人一人にとって、大きな意味をもっていたと思います。

ぼくがやたらと忙しかったので、皆さんと会ってゆっくり話ができたのも、あの「てんしょく」のときだけでした。もっとああいう機会をもちたかったです。

でも、とにかくあのとき、じつにいろいろな人がいるんだなということがわかって、とてもうれしかったです。残念ながらあの「てんしょく」はなくなってしまったそうですが、皆さんの一人一人が持前の味をだして、元気で何かをしつづけていってほしいです。

心配だったのは、人材育成とか環境教育とかいうことばが、わりと気安く出てきすぎたような気がしたこと。ぼくの思いすごしかもしれませんが。

近ごろ読んで感銘したのは、文一総合出版から出た『持続不可能性』という本です。少々意外なタイトルですが、わかるところだけを拾って読んでも勉強になるでしょう。少々高い本なので、ネットワークセンターで買ってもらおうかと思っています。

それでは皆さん、ごくろうさまでした。これからもぜひお元気で！

おうみ未来塾運営委員長
北 村 裕 明
（滋賀大学副学長）

地域プロデューサーの時代

おうみ未来塾５期生のグループ研究の成果がまとめられ、このような冊子体で刊行されることをうれしく思います。本冊子には、皆さんが２年間この塾で学ばれた成果が凝縮されていますし、地域プロデューサーとしての活動の種がちりばめられています。

おうみ未来塾は、地域プロデューサーの養成を目指した学校です。卒塾は、皆さんが地域プロデューサーとして大きく羽ばたくための第１歩です。本塾で学ばれたこと、グループ研究で深めた知識や考え方、新たに作られたネットワークを活用して、本格的な地域プロデューサーの活動に取り組んで下さい。

21世紀に魅力ある地域社会を作り上げることができるかどうかは、地域の問題を自らの問題として考え、政策化し、解決のために行動に移す人々の数と質にかかっています。まさにこれからの時代は、地域プロデューサーの時代であるといえましょう。卒塾された皆様方の活躍を心から期待いたします。

おうみ未来塾運営委員
岡 﨑 昌 之
（法政大学教授）

地域プロデューサーとして羽ばたいて下さい。

２年間のネットワークを最大限に活用することが肝要ではないでしょうか。これからのまちづくりは、皆さん方、地域に根付いた地域プロデューサーが主役です。これまでのまちづくりはどちらかといえば、県や市町村といった行政が中心となって牽引してきました。それは均衡ある発展を国全体として目指していたからです。道路や橋、施設といったハードの整備のためには、行政のリードが必要だったのです。しかしこれからのまちづくりはテーマが変わってきます。開発から保全に、均衡ある発展から、個性ある持続的まちづくりこそが不可欠となってきたのです。

テーマは３つあります。景観や環境を重視する「美しいまちづくり」、多くの住民が対等な立場で参加できる「魅力ある暮らしの場づくり」、コミュニティ・ビジネスや活力ある地域経済が基盤となった「自己実現できる地域づくり」です。これらのテーマはいずれも、行政だけに任せておいて出来上がるものではありません。住民の主体的な参加があって初めて可能です。その先頭に立って新しいまちづくりを担うことが、地域プロデューサーに期待されるのです。

おうみ未来塾運営委員

藤　井　絢　子

（滋賀県環境生活協同組合理事長）

おうみ未来塾5期生の皆さん、卒塾おめでとうございます。塾生同士の交流や議論、フィールドワークを通じた新しい出会いなど、この2年間で得られたことは多かったでしょうか。

おうみ未来塾は「地域プロデューサー」が育つ塾と言っていますが、自ら課題を発見し、それを解決するための方法を考えて、解決に向けてチームで行動を起こすということを実践するプログラムとなっています。特にチームで合意しながら活動をすすめるグループ研究で、皆さんは苦労されたのではないか思います。

皆さんの活動はこれからです。おうみ未来塾での経験を糧に、現場に出て地域の課題を捉え、そこに関わった一人ひとりが当事者になるようなプロデュースに心配りしてください。未来塾生、淡海ネットワークセンタースタッフ、そして私たち運営委員とも、今後さまざまな場面で出会い、同じ目的に向かって一緒に活動することがきっとあるでしょう。そのときに皆さんがそれぞれ地域で取り組まれた成果を拝見できることを、楽しみにしています。

おうみ未来塾運営委員

岸　田　眞　代

（NPO法人パートナーシップ・サポートセンター代表理事・事務局長）

5期生の皆さん、ご卒塾おめでとうございます。

「おうみ未来塾」での2年間、どれだけの収穫が得られましたでしょうか？

「おうみ」を自分の地域として感じることができましたでしょうか？

「未来」が少しは見えましたでしょうか？

私自身、日々のＮＰＯ活動のなかで、躓いたり迷ったりばかりしていますので、そんなに偉そうに言えるわけでもありませんし、また簡単に自分の思うとおりにいかないことも重々承知しています。

それでも、初めて訪れた土地のフィールドワークに参加して思いも寄らない刺激を受けたり、あるいは、卒塾生を含む未来塾生たちが、わざわざ名古屋にまで来てくださってともに議論したり時に仕事に発展するチャンスがあったりすると、本当にこの「おうみ未来塾」が、私にとっても視野を広げさせてくれたり新たな方向を与えてくれるものになっているな、と心から感じることができるのです。

わざわざ遠くから（実は意外に近いのですが）私が来ることもないのでは？とか、そろそろ潮時では？と思いつつ、それでもついつい「おうみ未来塾」に通い続けてきているのは、そうした目に見えるもの見えないものを含めた、大いなる収穫（刺激？）があるからかもしれません。

おそらくみなさんも、ここでの出会いや経験を生かして、きっと「おうみ」を自分の「地域」にしていくことでしょう。そして、それぞれの「未来」をしっかりと手にしていくに違いありません。それが、もしかしたら・・・、「未来塾」がめざす、地域のさまざまな協働の担い手としての「地域プロデューサー」の誕生につながるのかもしれません。

「未来塾生」がもっともっと先につながっていくことを、心から期待しています。

おうみ未来塾運営委員
辻　川　作　男
（NPO法人 ギャラリーシティ楽座 理事）

5期生のみなさんへ

5期生のみなさん、卒塾おめでとうございます。1年目の珍しさと2年目の慌ただしさのなかで素晴らしい成果を収められたことに心から敬意を表します。

さて、少子高齢化問題が進むなか、「２００７年問題」を含め日本の将来は人口減・超高齢社会となり、労働力不足と年金破綻によりあたかも「暗黒の時代」を迎えるかのごとく悲観論が声高に話されています。

果たしてそうでしょうか。江戸時代は大事な知識を一杯頭の中に蓄えた高齢者が実に大切にされた時代です。その時代では年長者が多い町こそ人が人を「もったいない」と思い敬う地域社会でした。そうであるならこれまで日本の戦後を切り開いてきた「団塊の世代」は、知識と経験と意欲をもった高齢者であり、彼らが定年で職場を去り地域に進出したときこそ現在以上に多くの地域課題を解決するエキスパートのＮＰＯ集団となるはずです。そして、好老文化が花開く新しい地域社会が生まれることを確信します。

であるからこそ、その時に備え皆さんは「地域プロデューサー」の資質を磨いてください。焦らず、慌てず、あきらめず・・・！本気度こそが真の成功者となる唯一の道です。今後のご精進を期待します。

おうみ未来塾第５期の仲間

シンク『環境』コミュニティG

荒　川　茂　美（草津市）
井　上　春　雄（大津市）
岡　本　胤　継（奈良市）
竹　谷　利　子（草津市）

まなぶくん

川　北　泰　伸（彦根市）
斎　藤　富士夫（湖南市）
中　嶋　　　守（虎姫町）
西　澤　　　勝（大津市）
邊　見　千恵子（長岡京市）

応援志隊

伊　藤　久美子（彦根市）
小久保　　　弘（志賀町）
阪　口　博　司（大津市）
曽　根　真　紀（彦根市）
山　田　幸　子（大津市）

Four Leaves

小田島　敦　子（大津市）
竹　嵜　み　き（甲賀市）
南　井　良　彦（守山市）
吉　田　　　創（甲賀市）

おうみ未来塾５期生　活動経過

年月日	内容		場所	講師
2003年 6月7日	開講式 交流会	記念講演「地域で行動するということ」 コミュニケーション	大津市 県民交流センター	日高敏隆塾長
	ワークショップ	コミュニケーション	大津市 県民交流センター	セブンドロップス
7月5日	ワークショップ	コミュニケーション＆リーダー研修	大津市 県民交流センター	岸田眞代委員
8月9日 ～10日	宿泊研修 フィールドワーク	まちなかの歴史的商店街再生をプロデュースする	彦根市	織田直文委員 彦根市商工会議所　安達昇氏 彦根市花しょうぶ通り商店街　中濱雅士氏 彦根市登り町グリーン通り商店街　中村泰始氏
9月6日	講義	たんけん･はっけん･ほっとけん～蒲生野考現倶楽部の取り組み	日野町 鎌掛しゃくなげ学校	岡崎昌之委員 ＮＰＯ法人蒲生野考現倶楽部　森田英二氏 井阪尚司氏 小林信一氏
10月3日 ～4日	交流会	湖北まちづくり関係者との交流	長浜市	辻川作男委員
	フィールドワーク	芸術イベントによるまちづくり～アートインナガハマ		
10月26日	４期中間発表会		大津市 県民交流センター	
10月28日	サブ講義	行政と協働について（塾生企画）	草津市 まちづくりセンター	日野町　安田尚司氏 滋賀県NPO活動促進室　初宿文彦氏 ５期生　阪口博司
11月8日	フィールドワーク	環境のまちづくり～菜の花プロジェクトと循環型社会	新旭町	藤井絢子委員 新旭町役場環境課　阿部能英氏 農業　石津文雄氏
11月18日	塾生会		大津市 県民交流センター	
12月6日	ワークショップ	地域プロデューサーってなに？	草津市 まちづくりセンター	岸田眞代委員
	忘年会		草津市	
2004年 2月14日	作業	グループ分け①	大津市 県民交流センター	
2月28日	レクリエーション	そば打ち体験	栗東市 アグリの里	
	作業	グループ分け②	栗東市 さきら	
3月7日	４期卒塾式		大津市 県民交流センター	
3月12日 ～13日	合宿／作業	グループ分け③	栗東市 こんぜの里	３期生　澤九麻男氏
4月4日	座談会	デンマーク座談会	淡海ネットワークセンター	Ｐｅｔｅｒ Ｓｕｓａｎｎｅ
4月29日	作業	グループ研究活動計画書作成・発表・意見交換	草津市 まちづくりセンター	
6月6日	６期開講式	グループ研究活動計画／運営委員によるアドバイス	大津市 アヤハレークサイドＨ	北村裕明委員 藤井絢子委員
6月27日	５期６期 合同講義	地域プロデューサーの可能性	大津市 県民交流センター	北村裕明委員
7月31日	公開講座	まちづくり概論	大津市 龍谷大学瀬田学舎	岡崎昌之委員
10月10日	中間発表会		大津市 ふれあいプラザ	
12月11日 ～12日	合宿／忘年会	コミュニケーション・グループ研究	米原町 エクシブ琵琶湖	
2005年 1月15日	塾長を囲む会		草津市 てんしょく	日高敏隆塾長 ３期生　名田陽一氏
2月13日	講義	プレゼンテーション講座	大津 県民交流センター	山口洋典氏
3月5日	卒塾報告会 卒塾式 交流会		大津市 県民交流センター	

※ 幹事会　2003年　7/15　8/19　9/17　10/21　12/16　1/20　2/17　3/16
2004年　1/20　2/17　3/16　4/20　5/18　6／15　7/20　8/17　9/28　10/19　11/16　12/21
2005年　1/25　2/13

おうみ未来塾５期生　２年間の活動概要

◇ おうみ未来塾５期開講式（県民交流センター/大津市）

2003 年６月７日（土）

開 講 式　13:00～14:30

記念講演　「地域で行動するということ」

講師　日高　敏隆さん（おうみ未来塾塾長）

オリエンテーション　14:40～17:10

ワークショップ　「コミュニケーションゲーム」

指導　セブンドロップス（未来塾１期生）

これからの２年間一緒に学んでいく先生、仲間とはじめての対面式です。第５期生 21 名の紹介、さあスタート！気が引き締まる思いです。

山川淡海文化振興財団理事長からの歓迎のあいさつのあと日髙塾長の記念講演です。おうみ未来塾は地域のリーダーを育てるところではなく育つところであり、地域社会の新しい課題は探して見つかるのではなく、地域とかかわることによって見えてくるものである。したがって地域に根ざした活動が大事であると説かれました。５期生に対して期待でなく楽しみにしているとの励ましの言葉をいただきました。

開講式に続いてセブンドロップス（未来塾１期生）の指導によるワークショップです。50 年前を思い出すフラフープをつかったゲームに徐々に気分は和らいでいきます。

市民活動をしている人とこれから行動しようとする人、現役の人、リタイヤの人、学生等老若男女 21 名の新たな出会いの記念すべきスタートの日でした。

◇ ワークショップ（県民交流センター）

2003 年７月５日（土）13:30～17:30

コミュニケーション＆リーダー研修

〔講師指導〕岸田　眞代さん（未来塾運営委員）

よりよいコミュニケーションとは何か、リーダーとして求められる要件・能力とは何かについての講義でした。

自己分析によって自分の弱みを認識し、また、普段からよりよいコミュニケーションを意識して訓練することの大切さを知りました。

私たちの最初の講義での先生の第一声が今も心に強く残っています。
「約束の時間に遅れてはダメ！」

◇宿泊研修（彦根市）

2003年8月9日（土）～10日（日）

【テーマ】現場を見て、現場の問題を解く

まちなかの歴史的商店街再生をプロデュースする

全国的に衰退著しいといわれるまちなか（中心市街地）の歴史的商店街再生の方途について、彦根市をフィールドワーク地に選び、どのようにプロデュースするとよいかの実践研究です。

〔場所〕彦根商工会議所、伊勢幾、ホテルレイクランド彦根、彦根燦ぱれす

〔講師指導〕　織田　直文さん（未来塾運営委員）

8月9日（土）

13:30～　「彦根市の最近の中心市街地活性化の取り組みについて」

講話　安達昇さん（彦根商工会議所）

15:00～　現地見学（ガイド：織田さん、安達さん）

夢京橋キャスルロード→市場商店街→銀座商店街→*花しょうぶ通り商店街
→*登り町グリーン通り商店街

18:30～　夕食をはさんで夜学討論そして深夜まで夜なべ談義

8月10日（日）

9:00～　今後のまちづくりに向けての提案検討

12:00　解散

彦根市には12の商店街があり、そのうち5つの商店街を織田先生、安達さんのガイドで見て回りました。各商店街ともよく工夫されて独自の特徴ある町なみで各商店街の人々の努力、苦労、熱意を感じました。それにもかかわらず他の市街地とおなじく空き家が数多く見られ人の通りもまばらで深刻さが伝わってきます。

夜からは岸田先生（運営委員）も参加しての夜なべ談義、未来塾生に入った思いをみんなで楽しく夜の更けるのを忘れて語り明かしました。

翌日は彦根のまちづくりについてのワークショプです。商店街の皆さんが必死に努力されており、なかなか具体的ないい案が浮かんできません。

それでも最後に安達さんから私たちの提案にたいして感謝の言葉をいただきました。外部の人間の意見、評価にも謙虚に耳を傾けることの大事さを感じました。また、みんなで考えを出し合い、まとめることの難しさを思い知らされた宿泊研修でした。

◇ 研修（日野町）

2003年9月6日（土）13:30～16:30

【テーマ】たんけん・はっけん・ほっとけん

～蒲生野考現倶楽部の取り組み

廃校となった小学校を蒲生野考現倶楽部が借り受け、地元の人達や、サポーター（ボランティア）と一体となって「しゃくなげ學校」を開校しています。今回は蒲生郡日野町鎌掛をフィールドワーク地に選び、蒲生野考現倶楽部の取り組みについての研修です。

〔場所〕　しゃくなげ學校（旧日野町立鎌掛小学校跡）

13:30～　蒲生野考現倶楽部のとりくみについて

講話　井阪　尚司さん（ＮＰＯ法人蒲生野考現倶楽部）

14:10～　「自立的まちづくりと地域プロデューサー」

講話　岡﨑　昌之さん（未来塾運営委員）

15:30～　質疑・議論

16:30　解散

「しゃくなげ学校」は蒲生野の里山をフィールドにした大人と子どもの体験学習の場であり、蒲生野考現倶楽部（企画・運営・実行）と日野町教育委員会（施設管理）、鎌掛自治区（地域協力）との共同によって運営されています。

校舎ははるか昔の小学校時代（今から数十年前？）を思い出さしてくれます。

岡﨑先生からは地方、農山村の価値の再認識とまちづくりの原点を説かれてこれからのまちつくりと地域プロデユーサーの資質と役割はどうあるべきかを話されました。

◇宿泊研修（長浜市）2003年10月3日（金）～4日（土）

【テーマ】現場を見て、現場の問題を解く

芸術イベントによるまちづくり～アート・イン・ナガハマ

市民手作りの芸術イベント「アート・イン・ナガハマ」に参加して市民の知恵と情熱をまちづくりにどのように活かしたか、その手法についての研修です。

〔場所〕国民宿舎豊公荘、アート・イン・ナガハマ会場、曳山博物館
〔講師指導〕辻川作男さん（未来塾運営委員）
10月3日（金）
19:00～　懇親会（長浜まちづくり関係者、未来塾卒業生）
21:00～　夜なべ談義
懇親会では卒塾生たちの学ぶ未来塾から実践、発展する未来塾をこれから志すとの熱意ある話し合いがされました。新入生と卒業生お酒を酌み交わしながら未来塾について親しく語り合いました。
10月4日（土）
8:30～　「芸術イベントによるまちづくり～アート･イン･ナガハマ」　講師　辻川作男氏
10:00～　アート・イン・ナガハマ会場見学（長浜市中心市街地）
13:00　解散

未来塾の先輩でもある辻川さんから長浜のまちづくりの歴史、現況について聞きました。
株式会社黒壁は歴史的な建築物の保存をと市民有志の働きと市民世論の盛り上がりにより長浜市、信用金庫を加えた第３セクターとして設立され、その後、ガラス工房として年間 210 万人の来街者を迎えています。
一方のアート・イン・ナガハマはまちづくりグループの市民によって芸術とまちの歴史を融合させた長浜ならではのイベントが生まれました。そこでは全国から集まったアーティストが、年に一度、青空の下で作品の展示、販売、実演を行い、アートを通じて作家や市民が自由なコミュニュケーションを楽しんでいます。
私たちはそのイベントに参加しました。会場は黒壁ガラス館からスタートして「長浜の御坊さん」として湖北の人に親しまれている大通寺までの中心市街地の路上に、全国から集まった数多くの作家(250 人)の作品が展示されています。大勢の行き交うひとたち(来街者）が芸術談義？とか、お買い物を心ゆくまで楽しんでいます。
今回の研修は成功したまちづくりの好例として強く印象に残りました。

◇ ４期生中間発表会（県民交流センター）
2003 年 10 月 26 日（日）13：30～16：30
５期生も来年になるとグループに分かれての新たな活動が始まります。４期生４グループの中間発表をわが身に置き換えて注意深く聞き入りました。

◇ サブ講義（草津市まちづくりセンター）

2003年10月28日（日）　19：00～21：00

【テーマ】行政と協働について

塾生企画として実際にＮＰＯにかかわっておられる公務員の方からの行政サイドからみた「ＮＰＯと行政について」の研修です。

1．ほんのちょっとアカデミックに官僚論一前例踏襲は悪か

県政策調整部経営改革支援室　　阪口博司（おうみ未来塾５期生）

2．ＮＰＯと行政の協働について

県民文化生活部ＮＰＯ活動促進室　初宿　文彦さん

3．ＮＰＯと行政：現場からの最前線報告

蒲生・日野まちづくり協議会　安田尚司さん

実際にＮＰＯとかかわりのある公務員の方から行政とＮＰＯの現状と課題、そして今後のＮＰＯとの協働のあり方について行政サイドの立場からの本音の話が聞けました。「公務員は職務に忠実であればあるほど『訓練された無能力』になるおそれがある」から始まりまして、一般市民として興味そそる内容でした。

◇研修（新旭）2003年11月8日（土）

【テーマ】現場を見て、現場の問題を解く

環境のまちづくり～菜の花プロジェクトと循環型社会

〔場所〕新旭町公民館、社会就労センターアイリスほか

〔講師指導〕藤井　絢子さん(未来塾運営委員)

環境に配慮したまちづくりに取り組む新旭町のまちづくり手法についての研修です。

10:15～　「菜の花で循環型社会を」

講師　藤井　絢子さん

11:15～　現地見学ガイド

阿部能英さん（新旭町環境課）

○ 社会就労センターアイリス

職員・利用者を中心にした地域住民が「菜の花エコライフネットワーク」を結成して廃食油回収し、ＢＤＦおよび粉石鹸を生産しています。

○ 大師山さくら園

ＯＭソーラー、太陽熱温水器、太陽光パネル、ペレットストーブ、クールチューブを設置したエコ幼児園であり、建設に際しては地域おこしとして地元の建材、業者を使っています。

○ 町営住宅

これも地元の建材、省エネルギー構造であり、太陽熱温水器を装備したエコ住宅と地域おこし

○ 高島地場産業フェスティバル

地域通貨アーロ（地域経済の活性化策の一環）による決済、地元中学生も「商い体験」で催しに参加しています。

15:00～　菜の花の作付けについて

新旭町針江　作付け農家　石津　文雄さん

話すのが苦手という石津さんですが「石津さんはお上手（になった）。頭で考えてもだめ！やらないことには問題の解決も出来ないし前にも進みようがない！」藤井さんは強調されます。

17:00　解散

町長を先頭に行政、町民が環境に配慮した町づくり、地域おこしに熱心に取り組でおられます。

◇ ワークショップ（草津市まちづくりセンター）

2003年12月6日（土）　10：30～17：00

【テーマ】「地域プロデューサーってなに？」

〔講師指導〕岸田　眞代さん（未来塾運営委員）

未来塾生の目指す「地域プロデューサー」について事前の塾生会（11月18日）で話し合いました。それを踏まえて「各自が思い描く地域プロデューサー像と自分が現在持っているスキルとのギャップを埋めるため、今後どのようなことを求めていけばよいか」についてのワークショップです。

10:30～　個人の考え、思いを発表（一人3～5分）

11:45～　グループ分け

具体的な課題別（任意）3班に

13:00～　グループ討議

「地域プロデューサーになるために」

14:15～　グループ発表（持ち時間15分）

15:00～　全体討議

18:00～　忘年会

未来塾5期生の参加者には

A　何もわからないが何かやってみたいところからスタートしている人

B　ある程度したいことがある人、また実際に活動していてスキルを高めたい人

との差がありAの人はまだまだ地域プロデューサー像も漠然としているし、Bの人は自分のフィールドやベースとなるものがあり、ある程度の今の自分に必要なものを感じていると思われる。AとBの思いの差がある中で、個々の思いを聞いたうえで３つのグループに分かれて討議しました。

話を聴いて、話していくうちに、地域プロデューサーとしての課題が整理できたと思います。

夜は草津の酒場で忘年会です。新しい出会いに感謝して Cheers!

◇「グループ分け」から「グループ研究合宿」

年が改まり今年からはグループ研究に入ります。各自の研究テーマを求めるべく５期生専用メールでお互いの想い、意見を交わしました。そして第１回のグループ分け作業（2月14日)から始まり､3月12日の研究合宿でようやく４つのグループが決まりました。

◇グループ分け作業①（県民交流センター3階和室）

20004年2月14日（土）　13:30～17:00

メール上で思い思いに流していたテーマについて話し合いました。一人でいくつも提案しているひと、提案のないひと、お互いのテーマの思いを話しあって共有化し、グループ分けをしてゆく最初のステップ作業です。

◇グループ分け作業②（栗東市　さきら）

20004年2月28日（土）　13:00～17:00

これまで出てきたテーマ候補から共通するテーマもあり、それを整理してまとめて提案者の多い生涯学習、環境とその他の３つのグループに分かれて話し合いました。

同じテーマであっても物の見方、興味の持ち方など各人の思いも違ってテーマを絞り込むのも容易でありませんでした。

この日はグループ分け作業会合前の午前にレクレーションとして栗東市のアグリの里でそば打ち体験をしました。

◇グループ研究合宿

2004年3月12日（金）18:30～翌日13日（土）15:00

【テーマ】　グループ研究の研究テーマと活動グループのメンバーの決定

〔場所〕こんぜの里森遊館（栗東町立森林体験交流センター）

3月12日（金）

18:30～　夕食・懇親会

20:30～　夜なべ談義

ゲスト：澤九麻男さん（おうみ未来塾３期生・こんぜ桃源郷代表）

未来塾の先輩の澤さんからは手品、腹話術、南京玉すだれを披露していただきました。

鉄の輪はずしの手品は天下一品の大道芸人さんです。

３月13日（土）

8:00～　朝食

9:30～　グループ分け作業

12:00～　昼食

13:00～　グループ分け作業（最終）

15:00　解散

これまでテーマとしてあがっていた19のテーマのうちから７テーマに絞り込みそれに絞って討議をしました。今日中にそのなかから自分のテーマを決めねばならず、真剣な討議になりました。自分のやりたいことを話し、また他人の話を聴いて現状で自分がもっとも研究してみたいテーマを投票しました。

その結果、投票の多かった上位の４つのグループ①ＮＰＯ中間支援、②生涯学習、③子供の育成、④環境と決まりました。ただし、最終的に決めかねている人、欠席の人もあるので決まった４つのグループ内に限ってメンバーの変更はよしとしました。

その後、４つのグループに分かれて今後の方針、進め方について話し合いました。

◇４期生　活動成果発表会、卒塾式（県民交流センター）

2004年３月７日（日）　13:30～18:00）

４期生各グループの発表にそれぞれ特色がでていておもしろい。しかし、一方ではグループがまとまって活動することの難しさをも知らされました。来年は自分たちの番だと思うと一挙一動に注目して見守ります。

大丈夫かな、なんか心配になってきます。いつもながら運営委員の先生方の講評には学ぶことが多いです。

◇グループ研究テーマ発表（草津市まちづくりセンター）

2004年４月29日（木）13:30～17:00

【テーマ】研究計画書作成・発表・意見交換

各グループの研究計画書の作成と発表会です。

13:30～　グループ研究計画書作成

16:00～　各グループの計画書発表と意見交換

17:00　　解散

今回で４つのグループとメンバーの確定です。活動費として各グループに５万円支給され本格的なグループ活動の始まりです。

各グループの活動状況を５期生のメールで情報交換をし、グループ分けのあとも出来るだけ全体で顔を合わせる機会を持とうと申し合わせしました。

◇5期６期生合同講義（県民交流センター）

2004年６月27日（土）14:30〜16:30

【テーマ】地域プロデューサーの時代

講師　北村裕明さん（おうみ未来塾運営委員長）

おうみ未来塾が養成することを目的とする地域プロデューサーはなぜ必要なのか、どのような資質、能力をかねそなえねばならないのか。県下で活動されている方の例を挙げてのお話でした。未来塾で学ぶものにとって使命の重さを再認識いたしました。

先生の講義はいつも簡潔に分かりやすく話されて楽しく聴講できます。

◇公開講座（龍谷大学瀬田学舎/大津市）

2004年７月31日（土）13:00〜15:00

【テーマ】まちづくり概論　〜全国の取り組み例から〜」

講師　岡崎昌之さん（おうみ未来塾運営委員）

６期生の講義に私たち５期生も参加しました。全国各地でのまちづくりに携わっておられる岡崎先生から数多くの取り組み事例の紹介があり、まちづくりを担う新しい自治、自治体のあり方についてのお話でした。

◇グループ研究　中間発表会（大津市ふれあいプラザ）

2004年10月10日（日）13:20〜16:40

各グループ発表25分で質問10分の持ち時間です。

- 13:40〜　おうみ未来塾第５期生のグループ研究発表
  - 13:40〜14:15　①まなぶくん「生涯学習を通じたこれからのまちづくり」
  - 14:15〜14:50　②応援志隊　「ＮＰＯに対する中間支援と地域活性化」
  - 14:50〜15:00　休憩
  - 15:00〜15:35　③Four Leaves「引きこもり·不登校と人間の多様性の探索」
  - 15:35〜16:10　④ｼﾝｸ『環境』コミュニティＧ「新エネルギーと環境学習」
- 16:10〜　おうみ未来塾運営委員による講評
- 16:40　　　　閉会

発表会に向けて各グループ懸命にがんばって準備して本日を迎えた。熱のこもった発表

であったと思うが力及ばずの感がした。運営委員の先生からはかなり高い水準の成果にあるとは言われましたが。最終発表会に向けてがんばろう！

●17:30～　　交流会

　　　　　　会場：大津シャンピアホテル

　発表という重圧から開放されて楽しい交流会になりました

◇合宿・忘年会（米原町）

　　　2004年12月11日（土）18:00～12日（日）朝まで

　　　【テーマ】コミュニケーション·グループ研究

〔場所〕エクシブ琵琶湖

　温泉につかってゆったりした気分で忘年会です。グループ研究の打ち合わせのあとはみんなで調達した豪勢な、しかも安上がりな料理と飲物を食べて飲んでの歓談です。

◇日高塾長を囲む会（草津市）

　　　2004年1月15日（土）12:30～17:00

　　　【場所】おくどさんの御飯屋　てんしょく

　日高塾長を囲んで親しくお話ができました。「"抽象のはしご" を昇ってはいけない」のお話をされました。人と話をするときに、説明として一段階抽象的な方向に進めては、結局内容が相手に伝わらない。

「赤ってなんですか？」、「それは色です。」

「色ってなんですか？」、「それは光の屈折によって、起こる・・・」

これではどんどん抽象的になり、何も伝わらない。伝わらなければ、何もはじまらない。

「赤ってなんです？」

「ほら、信号機の止まれのサインですよ。」

人に説明する時はこの方向で、"抽象のはしごを昇ってはいけない"。

てんしょくの名田陽一さん（3 期生）から未来塾グループ研究からてんしょく開業に至るまで事業化の過程についてお聞きし、グループ研究を今後の実践活動につなげるのに参考となる話しでした。

それと、おくどさんで炊いたご飯、卵焼き、それと地酒みんなおいしかったです。有難うございました。

◇プレゼンテーション講座

日時：2004 年 2 月 13 日(日)13:30～17:00

【テーマ】プレゼンテーション指南

「あなたのプレゼンにひとひねり」

場所：県民交流センター会議室（ピアザ淡海）

講師：山口洋典さん（大学コンソーシアム京都）

卒業報告発表を間近に控えていいタイミングでのプレゼンテーション講座です。今回は 6 期生との合同講座でした。私たち 5 期生は卒塾発表のグループ研究テーマについてのプレデンテーション、6 期生はこれからのグループ研究のテーマの選定についての発表です。私たちの一年前のなかなか決まらなかったことを思い出します。同じ思いをもった塾生たちとの交流の機会を持てることはいいことです。講師は発表に対しては従来の5W1Hに誰と・誰に（for whom)、どんなお金で（How much)、どこまで（How far）の 1W2H を加えた6W3H が必要であると説かれていました。

毎度のことながら発表能力の未熟さを実感し、地域プロデューサーとして必要な情報発信力の向上のためにはプレゼンテーション技術とその訓練の必要性を今回も強く自覚いたしました。

卒塾発表会まで泣いても笑ってもあと 3 週間、待ったなしです！

◇おうみ未来塾　第 5 期生卒塾式

2005年3月5日（土）

卒塾報告会　13:30～17:00

卒　塾　式　17:00～18:15

交　流　会　18:15～20:15

会場：滋賀県立県民交流センター　２０７会議室（ピアザ淡海２階）

プログラム：

13:00～　　　受付

13:30～13:40　開会

主催者（安藤よし子理事長）あいさつ

13:40～14:00　おうみ未来塾第６期生の活動報告

～グループ研究に向けて～

14:00～16:15　おうみ未来塾第５期生のグループ研究発表

14:00～14:30　①シンク『環境』コミュニティG「新エネルギーと環境学習」

14:30～15:00　②Four Leaves「不登校・引きこもり―支援のあり方―」

15:00～15:15　休　憩

15:15～15:45　③応援志隊「ＮＰＯに対する中間支援と地域活性化」

15:45～16:15　④まなぶくん「生涯学習を通じたこれからのまちづくり」

16:15～17:00　おうみ未来塾塾長、運営委員による講評

17:00～18:15　卒塾式

18:15～20:15　交流会　（ホテルピアザびわ湖）

○卒塾報告会

私たち卒塾生は会場の準備、グループの最終打合せをするため１０時に集合しました。会場の設定、各人の持場の確認、資料の確認に余念がありません。まなぶくんグループは昼食を取る時間をおしんでの発表資料づくりに追われています。瞬く間に報告会の時間が迫ってきました。

・「シンク『環境』コミュニティG」グループの発表
「自然エネルギーと環境学習」について
井上さんの奮闘ぶり、荒川さんの美声が印象的でした。

・Four Leaves グループの発表
「不登校・引きこもり一支援のあり方一」
パネルデスカッション方式による発表でした。
この報告発表のさいに国松知事の飛び入り参加がありました。

・応援志隊グループ発表
「NPOに対する中間支援と地域活性化」
IT を駆使しての発表でした。

・まなぶくんグループ発表
「生涯学習を通じたこれからのまちづくり」
発表者は最年少の大学生の川北くんでユニークなプレゼン手法での発表でした。

各グループの報告のあと塾長、運営委員の先生方からの講評をいただく。いつものことながら先生方の講評に感銘を受ける。鋭い指摘に驚きさえ感じます。安易な言葉使いを強く戒められ、またテーマの取り組みに対する認識の甘さを指摘される。やっと終わりホッ

とする間もなく先生方からの厳しい評価であった。

まだまだ私たちの考えは甘いぞ、モットモット自助努力せよ、何を学んできたのかと叱咤激励さる。が、なんか報われない切ない思いが湧き上がってくる。

○卒塾式 17:00〜18:15

安藤よし子理事長からは祝辞と記念品の授与、日髙塾長から卒塾生 19 名（入塾時 21 名）各人に修了証が手渡された。

○交流会　（ホテルピアザびわ湖）

18:15〜20:15

長くて短かった２年間でした。各自の思いを秘めてまたの再会と活躍を祈願して「乾杯」！！

記念品

滋賀県指定伝統工芸品「下田焼」

下田焼の手になじむ丸みは手作りの証

心に残る藍色は伝統の呉須（ごす）の色

ひとつひとつ丁寧に心をこめて仕上げられています。

今後５期生が、淡海の各地で活躍するプロデューサーとなることを誓って、カップ底に「淡海力」の文字を入れました。

（文／５期生　西澤　勝）

「シンク『環境』コミュニティ」

自然エネルギーと環境教育

井上春雄
竹谷利子
岡本胤継
荒川茂美

グループ活動の概況紹介

■研究テーマ

自然エネルギーと環境教育

■問題意識

２１世紀は環境の時代であり、次世代に引き継いでいく責任が我々に課せられた大きな問題である。まず、身近な地域の環境改善をどのように図るのか考えてみる。

■メンバーの役割

○井上春雄……太陽光発電・風力発電・バイオマス発電など様々な新エネルギーを学習。菜の花環境学習では、草津市立山田小学校で子どもたちとともに実習。

○岡本胤継……環境学習の手法をいろいろ学び、屋台村で環境ワークショップ（プロジェクトワイルドから）の進行をする。

○竹谷利子……草津市子ども環境学習推進事業（エコミュージアム）、エコ・キッズくさつ支援隊（サポーター）、草津市立山田小学校の菜の花活動など草津市の子どもを対象にした環境活動に参加。

○荒川茂美……エコ・キッズくさつに支援隊（サポーター）として１年間活動。

■エピソード

年齢差（約３０才）や地域差（滋賀と奈良）、仕事の忙しさなどで個性あふれる面々とのコミュニケーションはム・ム・ム・・・むずかしい。もっといろいろ話す時間があったらなぁ。ミーティングの調整がいちばんの課題だったのかも。

研究課題

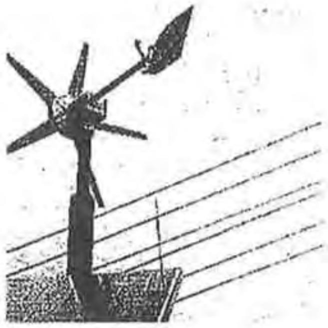
21世紀は「環境」の時代であり、次世代に引き継いで行く責任がわれわれに課せられた大きな問題である。まず、身近な地域の環境改善をどのように図るのか考えてみる。

活動記録

5月17日　京エコロジーセンター見学

きょうとグリーンファンド大西啓子さんの話を聞く

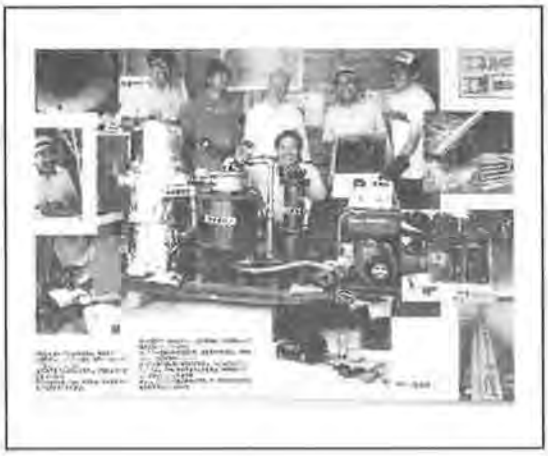
京エコロジーセンター

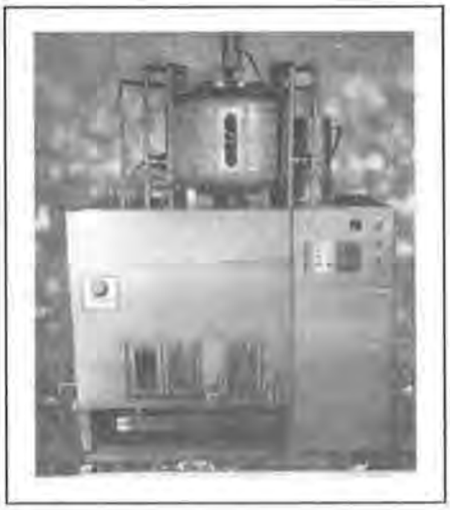


（左）雨水利用桶見本

（上）風力・太陽光発電小型タイプ

7月12日　高取山ふれあい公園で森林発電プロジェクト・木質バイオマスの利用（木質ガス自動車）・ＢＤＦの説明を受ける。愛東マーガレットステーションにて廃食油燃料製造装置「エルフＡ３型」を見学。





新エネルギー（ＢＤＦ）について

（１）新エネルギーとＢＤＦについて

①　新エネルギーの主な分類

自然エネルギー

太陽光発電　風力発電　地熱発電　海洋エネルギー（波力・潮力）

・リサイクルエネルギー

未使用エネルギー（大気と河川水などの温度差・工場などの廃熱）

廃棄物燃料製造（燃えるゴミ）

バイオマスエネルギー（家畜糞尿・木材・廃食油→ＢＤＦ）

・高効率熱利用

燃料電池（酸素・水素）

コージェネレーション（天然ガス・灯油など）

従来型エネルギーの新利用形態

② ＢＤＦについて

> ＢＤＦとは？：バイオ・ディーゼル・フューエル
>
> 廃食油にメタノールと触媒を加えて精製した軽油の替わりになる環境にやさしい燃料のこと。
>
> 化石燃料と違い、植物油を原料としているため、排出する二酸化炭素は、地球温暖化の原因にはならない。

＜何故、排出する二酸化炭素は、地球温暖化の原因にはならないのか？＞

ＢＤＦが燃焼する時も二酸化炭素を排出するが、その二酸化炭素は、その植物が生長する過程で吸収されたものであるので、差し引き０とみなされる。

● もし台所の流しに油を流したら？

約５００ＣＣの廃食油を流しに流すと、浴槽約３３０杯分の水が必要とされている。

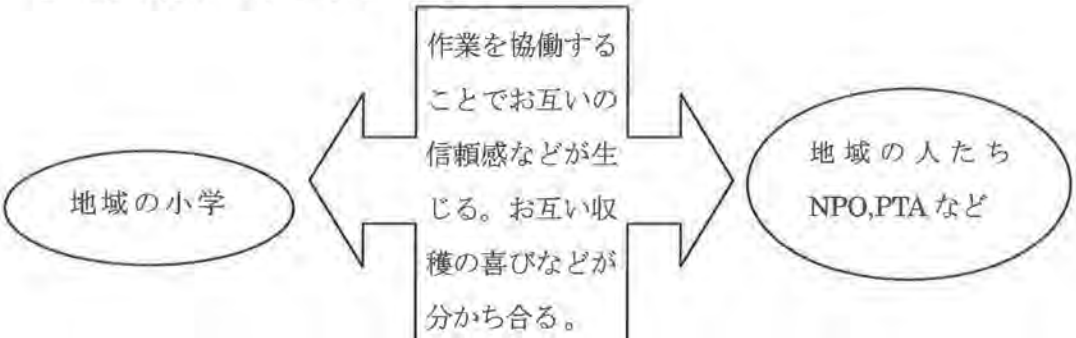
（２）「循環型社会」「持続可能な社会」にむけて

① 菜の花プロジェクトの取り組み

ナタネ栽培→搾油→ナタネ油の地域内利用→廃食油回収→ＢＤＦ→ＢＤＦの地域内利用

（例） 休耕田で小学生とともに菜の花の種まき→搾油→学校給食で油を使用→ＢＤＦ→学校給食用の運搬車などに使用

② 菜の花プロジェクトの利点



農業体験を通じ環境について学習できる

農業体験を通じ、地域のこどもを見守ることができる

（３）　ＢＤＦの精製の流れについて

<はじめに>　廃食油を回収する。

第1タンク	廃食油とメタノールと水酸化ナトリウムの混合液を混ぜる。 ↓ メチルエステル反応 ↓ 廃食油のドロドロの成分であるグリセリンを取り除く ↓
第2タンク	アルカリ性になった油を中和し、油の中に残った石鹸を取り除く ↓
第3タンク	精製された油をお湯荒いし、石鹸分や汚れなどをきれいに取り除く ↓
ＢＤＦタンク	中継し、次のろ過タンクへ
ろ過タンク	ろ過されたＢＤＦはドラム缶や ポリ容器に移し替えられ、 それぞれ活用される。

第一タンクでできたグリセリンの活用法は、まだ模索中であるようだ。

※この廃食油制精製プラントは、現在、１台　５００～８００万円である。

（４） 課題と地域プロデューサーとしての関わりについて

① 「なぜ、ＢＤＦなのか」の説明

<ＢＤＦの利点を説明>

・ 化石燃料と違い、植物油を原料としているため、排出する二酸化炭素は、地球温暖化の原因にはならない。
・ 資源の少ない日本に適している。

<ＢＤＦの問題点も十分に説明>

・ ディーゼルエンジンを使用するということで、ディーゼルエンジンについて触れなければならない。日本・アメリカでは、ディーゼルエンジンが環境に対して悪役扱いにされているが、ＥＵではディーゼルエンジン車に着目をしている。
・ ディーゼルエンジン車は、植物油を燃料にすることが可能。例：大豆油（カナダ）

② 廃食油の回収を実施

・ 子どもたちとともに学校へ廃食油を集める。
・ 地域の会館にステーションを設ける。

③ 廃食油精製プラントの購入の協力

・ ファンド制を提唱、高価なプラント購入のため、市民・行政・企業などと連携をとり購入。

④ 地域・学校を巻き込んだ動き

・ （２）のことを踏まえ地域を巻き込んだ大きなうねりにする

（５） 課題

・ ステーションや学校に集まった廃食油を精製プラントに回収するまでの工程。人手が必要。
・ ５００～８００万円の廃食油を購入しても、車１台や２台分にしか精製できなければ、かなりの割高。
・ 日本では、ディーゼルエンジンは悪者扱い。

【参考資料】

・ 「菜の花　エコ革命」（藤井絢子・菜の花プロジェクトネットワーク編著）
・ フェニックス株式会社ＨＰ
・ あいとう菜の花エコプロジェクトパンフ

（資料　新エネルギーマップ）

滋賀県内の主な新エネルギー導入マップ

（平成15年度までの導入実績）

ビジョンの目標・具体的な取り組み

≪基本理念≫
エネルギーと仲良し
「小」エネルギーのまち"くさつ"

目標

学ぶ	減らす	広げ
エネルギーと暮らしのかかわりふるまい方を学びます。	楽しく省エネルギーを進め、エネルギー消費を減らします。	身近にある新エネルギーの利用を広げます。

取り組みの方向

学ぶ	減らす	広げ
●暮らしの中、身の回りからエネルギーをみつけます。 ●こどもの気づきと大人の受け止めを重視します。	●人の活動とまちの仕組みをエネルギー消費の小さなものにします。 ●面倒な省エネルギーではなく、楽しくやりがいがある省エネルギーを進めます。	●草津らしい、身近な新エネルギーを発掘し利用します。 ●家庭から地域までのあらゆる場で、誰でもが導入に参加できるようにします。

具体的な取り組み

《取り組み1》	《取り組み2》	《取り組み3》	《取り組み4》	《取り組み5》
市民の取り組みを育てるエネルギー学習の推進 ○エネルギー学習プログラム ○エネルギー情報の提供 ○エネルギーにふれる機会づくり ○エネルギー学習の拠点づくり	家庭から地域までの省エネルギー ○分かりやすい取り組み方法の普及 ○省エネルギーが得になる仕組み ○取り組み結果の交流と共有 ○エネルギーの使い方をマネジメントする仕組み	エネルギーにやさしい交通・都市づくりの推進 ○クリーンエネルギー自動車の普及 ○自転車と公共交通のベストミックスのまちづくり ○都市づくりへのエネルギー配慮	太陽光・太陽熱などの新エネルギー導入促進 ○公共施設への先導的導入 ○小規模機器のPR的な導入 ○市民共同発電所の普及の支援 ○家庭事業所への導入支援	暮らしの中のごみ・バイオマス循環 ○ごみの排出抑制 ○菜の花プロジェクト ○生ごみリサイクル ○木質バイオマス利用

市内での取り組み事例

くさつジュニアボード（平成12年から）では、こどもと大人のサポーターとが共に環境まちづくりの学習や体験をしています。平成14年度はエネルギーをテーマに、エネルギーに気づき、自分たちでつくりだす取り組みをしました。

環境家族（家庭版ISO）へ305家族（市民176家族、市役所職員129家族）が参加しました。うち環境家族として認定された家族は282家族でした。

（平成14年度実績）

草津市では公用車に天然ガス自動車を導入しており、平成14年度末で合計9台となっています。
今後も順次転換していく予定です。

草津市内で太陽光発電施設を設置している家庭は約120件です。

（平成14年度末現在）

12の小学校で菜の花を栽培しています。将来はBDF※にして県の学習船「湖の子」の燃料に利用する予定です。
※バイオディーゼル燃料（Bio Diesel Fuel）の略

菜の花プロジェクト　を実践している草津市立山田小学校と市民活動団体草津塾協働による活動に参加。（写真は草津塾ＨＰより）

種まき

種を採る

油を絞る

種を収穫

菜の花の種まき→菜の花収穫→乾燥→油搾り→学校給食のてんぷら油→廃食油ＢＤＦ化→うみのこや学校給食車の燃料の一部。

今後の課題としては、廃食油のステーションや学校に集まった廃食油を廃食油精製プラントに回収するまでに人手が必要。また一機５００～８００万のプラントを購入しても、車１～２台分にしか精製できなければかなりの割高になる。ディーゼルエンジンを使用するということだが、日本ではディーゼルエンジンは悪役扱いとなっているということです。

環境教育が目指すもの
環境問題の本質を理解して、現代社会に山積みする課題を解決し、積極的に適切な行動を取れる人材を広く輩出して、社会を持続可能なものに変えていくこと

草津市のエコキッズくさつの支援隊に参加

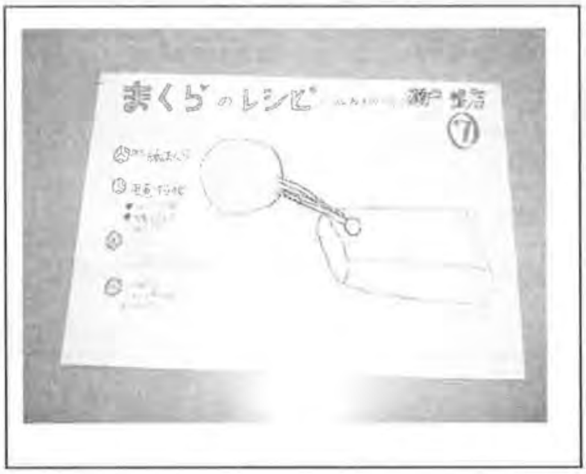
エコ・キッズくさつ　活動プログラム　全6回

	開催月日	活動内容
第1回	7月17日（土）	アイスブレイク リサイクルとは？　どんなものがリサイクルできるの？
第2･3回	8月24・25（火・水）	実際に、リサイクルしてみよう①　宿泊研修
第4回	10月16日（土）	実際に、リサイクルしてみよう②
第5回	11月20日（土）	みんなのリサイクル作品を発表しよう！
第6回	12月18日（土）	ふりかえり。まとめ。第４回草津市こども環境会議にむけて。

対象　小学４年生から中学３年生
運営　エコ・キッズくさつ支援隊（大人のサポーター）、草津市環境課
支援　草津ロータリークラブ
方針　次代を担う子どもの育成を中心とし、これに大人が関わり学んでいく
子どもの活動を支援するサポーター・コーディネーターの育成をはかる
現場での体験、具体的な環境づくりの実践を通じた学びとする。
様々な人・世代・団体・地域等との交流とパートナーシップを目指す。

１泊２日の研修
間伐竹で皿・コップ・箸づくり体験

リサイクルについて
ワークショップ



リサイクルレシピづくり
シュレッダーゴミで枕を作ろう

リサイクルデーをつくろう
草津近鉄百貨店でアンケート調査

GO GO エコキッズ隊　壁新聞づくり

県代表　全国エコフェスティバルへ

草津市　子どもエコミュージアム事業

「自然素材での遊びと学習」に参加

主　催　　環境文化推進会議

日　時　　平成１７年1月２２日

場　所　　ロクハ荘

参加者　　９５名

内　容　　木製伝統玩具の展示・遊び　紙芝居（森と生命）　たこづくりとたこあげ

（資料　写真）

子どもエコミュージアム事業

自然素材での遊びと学習

日時：平成１７年1月２２日（土）

場所：ロクハ荘

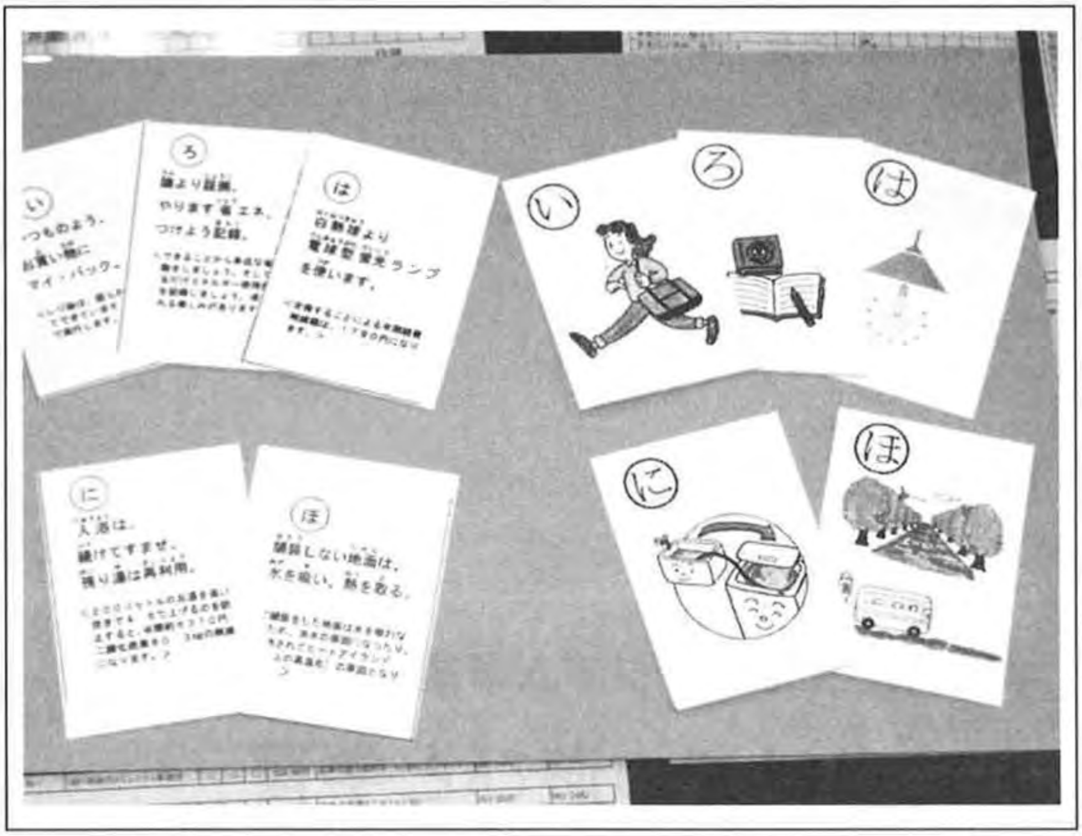
参加者：９５名

内容：木製伝統玩具の展示・遊び

紙芝居（森と生命）

凧づくり／凧揚げ

ｅｋｏカルタの作成



エコカルタ

	読み札の文言	解説の文言
い	いつものよう、お買い物にはマイ・バック	レジ袋は、限られた資源を使ってできています。省資源を自分で実行します。
ろ	論より証拠、やります省エネ、つけよう記録	できることから身近な省エネ活動をしましょう。そして、できるだけエネルギー使用量を記録しましょう。成果が見られる楽しみがあります。
は	白熱球より電球型蛍光ランプを使いましょう。	交換することによる年間経費削減額は1790円になります。
に	入浴は、続けてすませ。残り湯は再利用。	200ℓのお湯を追い炊きで4．5℃あげるのを防止すると、年間5370円、二酸化炭素約80．3kgの削減になる。
ほ	舗装しない地面は、水を吸い、熱を取る。	舗装した地面は水を吸わないため、洪水の原因になったり、加熱されてヒートアイランドの原因になります。
へ	返却します。牛乳パックやトレーを回収箱へ。	スーパーで、回収箱を設置して回収しているところがあります。牛乳パック30本でトイレットペーパー1個分です。
と	トンボの育つビオトープづくり。	滋賀県は、トンボの種類・数では全国のトップクラスです。生き物を育てるビオトープづくりに挑戦し、普段から川や草原など自然を大切にします。
ち	ちょっと外出、バスや電車を使います。	一人を1km運ぶの際の二酸化炭素排出量は、鉄道は自家用車の約11分の1、バスは自家用車の約半分です。
り	料理自慢、適量作ってゴミ減らし。	料理の作りすぎは、食べ残しによるゴミの増加や、食べすぎによる肥満の原因となります。また、エコクッキングにもつとめます。
ぬ	沼や田んぼ・干潟は生き物のオアシスです。	国際的には田んぼ・干潟を守るため「ラムサール条約」があり、みんなで生き物の生存の場を保全するよう努めています。
る	留守にする前、やろう消灯、とじまり、火の用心。	ついでに使用しない電気製品のコンセントも抜きます。
わ	割り箸をすかわず自分の箸で「いただきます」。	割り箸は日本で一日に約230億膳も遣われています。森林保護のため、使わない習慣をつけましょう。
か	買う前にラベルを見よう、エコ・省エネ。	エコ・省エネマークの表示のある商品は安心して使えます。
よ	容器再利用、詰め替え商品使います。	省資源の第一歩は、容器などの使えるものは使いきることです。
た	食べ残ししません、元気な子。	食べ残したものはゴミになります。ゴミの削減は身近なことでできます。
れ	冷蔵庫の開閉は少なく、すばやく。	年間約1230円の節減、開閉時間が長いと冷蔵効果も悪くなります。
そ	ソーラーハウスに済みたいなあ。	太陽の光や熱は無限です。限りある資源に代わって利用するのが賢明です。
つ	使わない、コンセント抜いてムダ省き。	待機電力の削減費用は、年間約3800円になります。
ね	根を張った樹木を育て、大切に。	樹木は生き物の生育、空気の浄化、木陰、水のろ過など多くの働きがあります。
な	慣れましょう。暖房20℃、冷房28℃。	電力の削減費用は、年間約2020円。工夫すれば快適に暮らせます。
ら	ラップは、害の少ないポリエチレン製を。	市販のラップ剤は燃やすと有害ガスを出すものがあります。注意します。
む	無害の石けん、洗濯上手。	合成ではなく、天然素材でできた石けんは適量なら自然浄化します。
う	うっかり、川や琵琶湖や海にゴミを捨てません。生き物のために	ビニール袋などのゴミをエサと間違えて飲み込んだり、有害物でなくなる水生生物があります。自然とともにくらします。
の	農薬減らした野菜で健康家族。	滋賀県認証のこだわり農産物（化学合成農薬および化学肥料の使用量を通常の50%以下に削減し、かつ、琵琶湖および周辺環境への負荷を削減する技術で栽培された農産物）を使うと安全です。
お	温暖化防ぐ省エネ、環境習慣。	私たち家庭生活から発生させている二酸化炭素の量は全排出量の20%におよびます。地球温暖化防止に私たちでできるをやります。
く	草むらは昆虫の住みか、除草剤は使いません。	除草剤には、生態に危険な環境ホルモンを含む物がありまあす。除草は手作業で。

（エコカルタ　エクセル資料２）

や	薬剤はよく知り、正しく使いましょう。	殺虫剤、除草剤、農薬、殺菌剤には、人間の遺伝子や免疫性などに影響を及ぼす「環境ホルモン」を含むものがあります。常に知識の吸収につとめ、正しく使いましょう。
ま	マツタケは、大事に管理された山に育つという。	マキや柴を燃料にしていた時代は、山林を大切にしていました。現在は、荒れているところが目立ちます。森林の効果は、水の蓄積・浄化や生き物の住みかとして重要な役割をしています。ゴミを捨てたりしないようにします。
け	健康のもと。自転車に乗ってお買い物。	自転車利用、箒での掃除など、できるだけ自分のエネルギーを使います。
ふ	拭いて洗います。食器の油汚れ。	油は水を汚します。またきれいにするには洗剤を多く使います。
こ	米のとぎ汁、庭木の水やりに。	花には必要により、リン酸、カリ肥料を忘れずに。
え	エダマメは夏の味、季節の物がおいしいね。	果物や野菜は自然に捕れる季節が決まっています。季節はずれのものはハウス栽培で化石燃料をたくさん使います。
て	テレビの番組は選んで、離れて観よう。	28インチテレビを1日1時間観る時間を減らすと、年間約940円、二酸化炭素約14．7kgの削減になります。
あ	ｱｲﾄﾞﾘﾝｸﾞｽﾄｯﾌﾟ、ﾀｲﾔの点検、父さんの習慣。	1日5分のアイドリングストップをすると年間約1710円、二酸化炭素約37．4kgの削減になります。
さ	散歩中のペットのフンは持ち帰ろう。	マナーを守り、環境を良くすることは動物愛護につながります。
き	規定の日、正しく分別。ゴミ出しを。	草津市では10種類に分別しています。
ゆ	湯の温度38℃以下で洗い物。	設定温度を2℃下げると、年間約1910円の削減になります。
め	目にやさしい「緑」は地球に大切なもの。	植物の緑は、太陽光線の光合成の賜物、植物なくては生活ができません。
み	水は、流しっぱなしにせず貯めて使おう。	自分で目標をたてて、貯めた水を使う習慣を身につけたいものです。
し	シャワーの使い過ぎに気をつけよう。	1日1分間シャワーの使用時間を減らすと、年間約2110円の削減になります。
ひ	必要以上に紙も物も使いません。	資源の節約は、まず、必要以上の消費をしないことから始めます。
も	もう一度、使えるものはリサイクル。	捨てる前、購入前にリサイクルについて考えます。
せ	洗濯をまとめてしているお母さん。	定格容量の4割を入れて洗う場合と、8割の場合を比較すると、8割の場合が年間で約3220円、二酸化炭素約11．9kgの削減になります。
す	捨てる前、ルールとマナーを考えて。	タバコや空き缶などのポイ捨ては、ルールとマナーの違反です。

【参考情報】
- 草津市・家庭版ISO参加者募集パンフレット
- 滋賀県・ISOエコ家族（パンフレット）
- 地球を守るくらし方環境事典（国土社、鈴木善次・原田智代著）など

第６回おうみ市民活動屋台村に参加

プログラム式環境教育（プロジェクト・ワイルド）を実施しました。

日　時　　平成１６年１１月２７日

場　所　　守山市民交流センター

参加者　　１２名

内　容　　以下の通りです。

①２グループに分かれて模造紙に湖と川を書く。

②池に周りに自分の家を書く。

③なぜ、そこに住みたいのか理由をグループ単位で確認する。

④生活に必要な施設を図に記入する。

⑤記入後に環境負荷がどのように掛かるのかを考える。

普通、川の上流部に宅地を選ぶ人が多いです。それは、下流が汚染されているという印象が強いからです。作成した図を繋げて参加者に「環境」は連続していることを確認していただきます。つまり自分たちの書いた図に他の図が繋がれた場合、上流は下流となるという実感を知ることになります。

次に

⑥生息していそうな動物を粘土で作り生息場所に置く。

⑦お互いのグループの作成物を見て意見を述べる。

⑧好きな動物を選びなぜその動物を選んだかを聞く。

⑨動物間の関連性をロープで繋いで行く。

これは、生き物が互いに関連して存在していることに気付いていただくワークです。ぴんと張ったロープ、そこで１種類の生き物が居なくなり、又、１種が居なくなる。という事が続くをロープの状態はどうなるか。食物連鎖を視覚的に味わいます。

時間の都合でこの２つのワークをして終了しましたが、ほとんどの方がプログラム式環境教育を体験するのが始めてで非常に興味を持っていただけました。

新エネルギーの考察からグループ活動を始めた私たちです。それが、省エネルギー⇒創エネルギーと思考が進む中で、この考えや実践活動を普及するには、物事の本質をきっちりと理解し行動できる核となる人の存在が必要だと改めて気付きました。要は、「環境」リーダーの養成活動が必要だと言う事です。このための手段として、プログラム式環境教育は有効な手段のひとつであると感じました。

「だんぼの耳と蟻のフットワーク」、色んな情報を収集して軽やかに行動を行える環境学習リーダーが今後要請されてきます。しかし、リーダーばかりでは行動を持続、発展してゆくことが難しい場合があります。活動の維持には、複数のリーダーよりも着実に実務をこなす人の存在が欠かせません。従って、こういう人材を得ることも課題です。

環境を核としたまちづくりを推進していく必要を感じます。

（環境ワークショップ　　チラシ）

（環境ワークショップ　チラシ）

あ！発見市民の底力　　　第6回おうみ市民活動屋台村

環境ワークショップ ～プロジェクト・ワイルド～

「僕らのトンボ池」「ハンプティダンプティ」「食物連鎖」

プロジェクト・ワイルドって？

アメリカで開発された幼稚園から高校生までの生徒を指導する教育者向けに開発された環境教育プログラムです。生き物を題材として、参加者の気づきや理解から始まり、段階的に生態系の原理や文化などの知識、管理や保全などへの人間の役割、価値観の多様性や環境問題の構造を認識した上で、野生動物と自然資源に対して責任ある行動や建設的な活動を身に付けていくことを目的としています。

日 時　平成16年11月27日(土)　10:30～12:00

会 場　守山市民交流センター(さんさん守山)1F 交流室

講 師　おうみ未来塾5期生　岡本　儀継　氏(総合教育研究所)

申込み　当日10時20分までに1F 交流室の受付に申し込んでください

主 催　おうみ未来塾5期生　グループ・シンク「環境」コミュニティ

おうみ未来塾って？

淡海ネットワークセンターが、地域の問題を発見し、解決するための方策を考え、そのための活動を実践する人や事業ができる人、いわば問題発見力と政策形成力を兼ね備えた新しいリーダーを「地域プロデュサー」として位置付け、「地域プロデュサー」の育成・養成を目指すために開講した塾です。現在４期約１００名の卒塾生が、県内各地域で活発に活動をしています。

参加券

まなぶくん

「生涯学習を通したこれからの町づくり」

～市民講師による学びの提供～

斎藤富士夫　川北泰伸　邊見千恵子　西澤勝　中嶋守

１．はじめに
２．グループ研究活動の歩み
３．活動の成果
４．これから未来に向けて
５．あとがき
６．活動の記録《まなぶくん通信》

グループ活動の概況紹介

■研究テーマ

「生涯学習を通したこれからの町づくり」　～市民講師による学びの提供～

■問題意識

わが国においては急速に少子高齢化が進んでいます。地域が継続的に成長し、活性化していくためには地域住民、とりわけ女性、高齢者が生きがいを持って元気に暮らせる地域社会を築くことが大事であり、「生涯にわたって楽しく学びあう生涯学習社会」の実現が必要と考えます。

■メンバーの役割

○西澤　勝（大津市）

大手ゼネコンOB。グループの経費処理担当。塾生期間中に生涯学習インストラクター養成講座を受講し理論面での学習を行った。淡海生涯学習カレッジでは「自然環境と河川づくり」の学習活動報告を行い、環境学習・教育の面での実践活動を計画中。

○川北　泰伸（彦根市）

同志社大学法学部４回生。湖南市民塾でのファシリテーター役を行い、独自の明るいキャラでグループ初講演がうまく行われた。卒塾と同時に新社会人。

○邊見千恵子（長岡京市）

商社勤務４０年ＯＧ。塾生期間中に自然大学を受講し、学ぶ楽しさを体験。これからは学びを活かすために、私有地でもある里山保全の実践を計画。

○斎藤富士夫（湖南市）

会社勤務。連絡係り。各地の視察内容を「まなぶくん通信」として5期生メールへ配信。まなぶくんＨＰの作成と更新担当。活動の成果を湖南市の生涯学習ボランティアの会「湖南まなびすと」へ展開。

○中嶋　守（虎姫町）

虎姫町議員。湖北地域の生涯学習の取り組みの情報収集を行い、長浜生涯学習課との連絡役を行った。湖北地区での生涯学習の推進活動。

■エピソード

おうみ市民活動屋台村へ参加、おそろいのハッピを着て昔あそびの指導「竹がえし」を披露しました。竹べら６本を使っての遊びですが、参加者からは高齢者に無理なくできるので、手先の運動と脳への刺激に大変よいと評判でした。竹ひごから色を塗ってメンバーで自作した竹バラ・セット100組は当日完売となりました。

１．　はじめに

「生涯学習」とは文字通り、人間は一生涯通じて学習、学ぶものである。分かっているようでよく分からない、なにかつかみどころがない言葉であるが学ぶことが大好きな５人がそれぞれの思いを抱いて「生涯学習を通したまちづくり」をテーマにあつまりました。「まなぶくん」グループの誕生です。

２．　グループ研究活動の歩み

２－１研究活動経緯

グループ活動計画にそって現場主義に徹して調査することからはじめました。滋賀県、新旭町、草津市、長浜市の生涯学習課を訪れて行政の「生涯学習」の取り組みの現状の調査です。行政の「生涯学習」、「生涯学習社会」についての認識、現状、問題点を知ることができたこと、また、私たちも「生涯学習社会」の必要性を共有できたと思います。

また新旭町、草津市、愛知県でのセミナーに参加しました。「生涯学習とまちづくり」、「生涯学習と NPO」等の講義、シンポジウム、ワークショップを通じて多くのことを学ぶことができました。特に初めての人との出会いで素直な気持ちで話し合えるのは素晴らしいことです。

そのほか、メンバー各自は淡海生涯カレッジ、NPO 自然大学（大阪）ほか各地で催される学習講座に参加して互いに話題提起してスキルアップに努めました。

次に、生涯学習をサポートしている団体の現状を知るために実際に活動しているグループの訪問です。草津市の市民講師による「ゆうゆうびと講座」をささえる「ゆうネットくさつサポーターの会」と、生涯学習インストラクターの会としては全国的にもはじめてのＮＰＯ法人で全国からも注目されている「NPO 法人滋賀県生涯学習インストラクターの会」の２つの活動グループと意見交換をしました。両グループとも共通の悩みは学習を受ける人が少ないことと、NPO としては有料の講座では人が集まらないこと、行政側のガードが固く地域外の NPO が入り込めないなどの意見が印象に残っています。

グループ活動後半からイベントに企画参加しています。草津市の市制 50 周年のイベント及び、おうみ市民活動屋台村に参加しての昔遊びの「竹かえし」の実演と指導です。ここにおいてもイベントに参加してくる人は少ないです。初めてイベントに参画して企画サイドに立ってみると来てくれる人が少ないのが残念で寂しい思いがいたします。しかし、イベントに参画されている多くの人たちに接していますと今まで違った世界に入っていく思いがいたします。

次のイベントは新生都市湖南市での市民塾での講演です。各地で取り組んでいる生涯学習の事例と現況について訪問して得た資料を基にして発表しました。そのあとは「地域資源を生かした生涯学習」についてのワークショップです。甲西町、石部町のひとたちが一緒になってのまちづくりに少しでもお役に立てればいいなあとの思いでした。

活動経緯一覧

1．報告会		
月　日	活　動　内　容	場　所（主催者）
4月 29日	「まなぶくん」活動計画発表	草津市まちセンター
10月 10日	グループ研究　中間発表会	大津市・ふれあい広場
3月 5日	グループ研究　卒塾報告会	県民交流センター
2．行政機関の生涯学習取組み実態聞き取り調査		
5月 21日	滋賀県生涯学習課懇談	滋賀県県庁
6月 23日	新旭町生涯学習課懇談	新旭町・公民館
7月 14日	草津市生涯学習課懇談	草津アミカホール
8月　6日	長浜市生涯学習課懇談	長浜市役所別館
3．セミナー参加（講座とワークショップ）		
6月 9日	地域アニメーター養成講座（福留強氏講師）	新旭町・生涯学習課
7月 10日	地域アニメーター養成講座（ワークショップ）	新旭町・生涯学習課
7月 14日	ボランティア養成講座（ゆうネットサポーター）	草津市・生涯学習課
1月 27日	生涯学習とNPOについて(講演とシンポジウム)	あいち生涯学習ＮＰＯ
4．生涯学習ＮＰＯ法人との意見交換		
7月 14日	草津ゆうネットサポーターの会	草津アミカホール
9月 25日	NPO 生涯学習インストラクターの会	近江八幡 GNET しが
5．イベント・発表会・協議会参加		
9月 24日	滋賀の生涯学習社会づくり推進協議会	守山市・淡海センター
10月 17日	草津市制 50 周年イベント・昔遊び「竹かえし」	草津アミカホール
11月 27日	G-NET しがフェスタ 2004 での講演	近江八幡 GNET しが
11月 27日	おうみ市民活動屋台村・昔遊び「竹かえし」	守山市民センター
1月 14日	湖南市民塾での講演（湖南市）	石部文化総合センター
6．勉強会・ミーティング		
9月 11日	生涯学習(教材)・まちづくり実例（成田氏講師）	県民交流センター
10月 3日	ハッピ作り・中間発表ミーティング	グループ宅
11月 7日	竹べラ手作り作業	グループ宅
12月 11日	湖南市民塾での講演ミーティング	米原・エクシブ琵琶湖
1月 9日	湖南市民塾での講演ミーティング	淡海ﾈｯﾄﾜｰｸ・ｾﾝﾀｰ
2月 13日	成果発表会に向けたミーティング	淡海ﾈｯﾄﾜｰｸ・ｾﾝﾀｰ
2月 22日	成果発表会に向けたミーティング	草津市まちづくりｾﾝﾀｰ
3月 1日	成果発表会に向けたミーティング	草津市まちづくりｾﾝﾀｰ

2－2生涯学習とまちづくりについてのまとめ

「生涯学習」につて参考文献、講義から学んだことを整理してみました。

生涯学習とは「生涯を通じて人間的、社会的、職業的発達のために行われる学習」です。

世界の生涯学習の捉え方も国によって違います。

生活の質の向上、精神的豊かさ、生きがいのため（日本）

労働者の継続、教育訓練の推進、経済的利益のため（西欧）

基礎教育の普及、修了率の低さを補うため（途上国）

その国の生活状況によって生涯学習の目的が違うことが分かります。

生涯学習の範囲とは日本ではあらゆる「学習」が生涯学習にふくまれています。ただし、「学習活動」としての生涯学習をさす場合は「学習活動における意図的な学習」であり、「日常生活における偶発的な学習」たとえば、食事、散歩、カラオケ、宴会など個々の活動は除外されます。

生涯学習社会とは「人々が、生涯のいつでも自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価されるような社会」であり、「今日、変化の激しい社会にあって、人々は、自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これを自ら選んで、生涯を通じて行うもの」であります。

生涯学習の振興理由

「生涯学習体系への移行」のさいの臨時教育審議会の答申は、必要な理由として３つあげています。

①「学歴社会」の弊害の是正

②「社会の成熟化」に伴う学習需要の増大への対応

③「社会・経済の変化」に対応するための学習の必要

日本以外の先進諸国では③の社会・経済の変化」という理由（特に「経済のための手段」という側面）のみが生涯学習の振興理由とされています。

もう少し整理してみます。

今回の調査をとおして大人、子ども、地域のひとの３つの視点から生涯学習に何を求めているのか。

子供の視点

・ 大人との接点　・人生のモデル　・選択肢を広げる　・地域を知る

・ カッコイイ大人　・地域の先生　・学校で習ったことの実践

・ 学校で学べないことを学ぶ　・・・・・・

大人の視点

・ 生きがい　・時間的余裕　・社会貢献　・自己実現・・・・・

地域の視点

・ すみやすさ　・活気　・愛着歴史　・伝統の継承　・環境保全

・ 福祉増進　・青少年育成　・住民主役　・経済活性化　・・・・

地域衰退の原因は次のことが考えられます。

地域衰退の原因

社会情勢の変化

・少子高齢化・不景気・犯罪、安全性の衰退・取り残され・

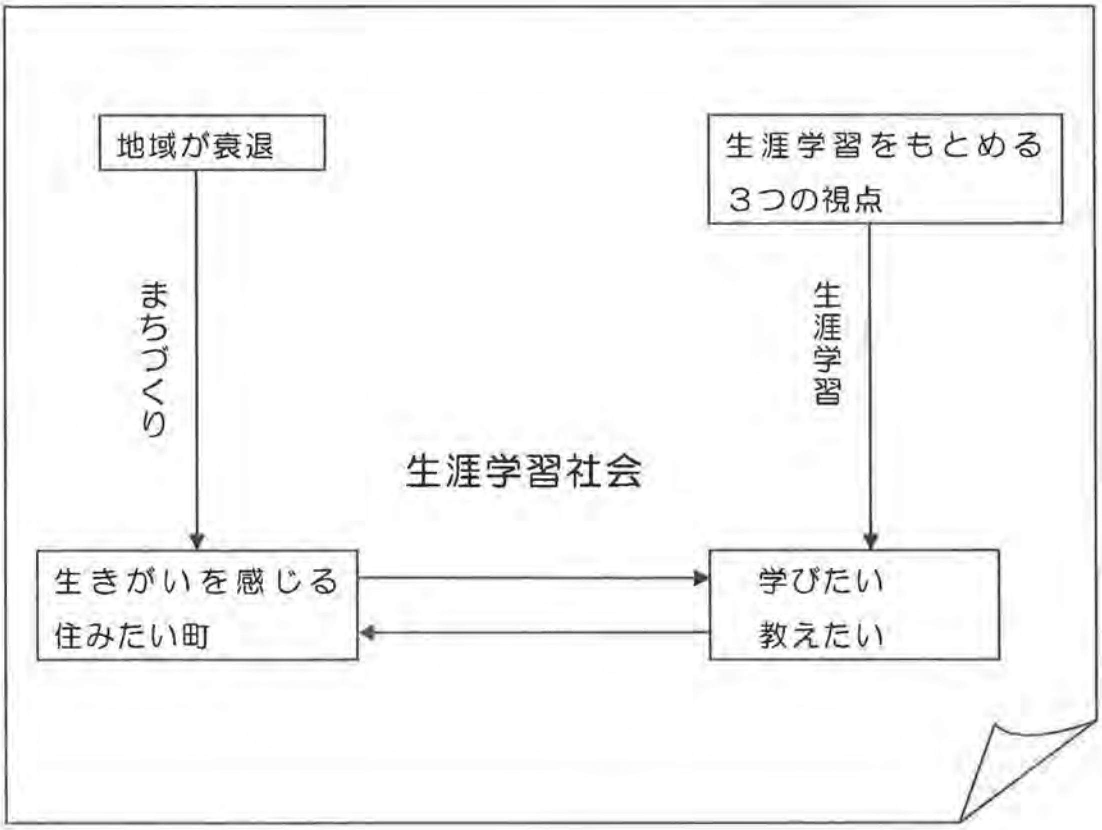
環境破壊、

・ 公害・自然破壊、

その他

・文化衰退・伝統・歴史など資源がない

・



いろいろの世代、立場の人がそれぞれ違った目的で多くの人たちが生涯学習を学び、教えることを望んでいます。まちづくりとは住みたい気持ちをおこさせる魅力ある町をつくることです。職業上の学習にしろ、教養的・趣味的なものの学習であれ、それらを学習した人たちが、その学習成果を他の人や社会のために役立ていく。そこには、好ましい人間関係のネットワークが構築される。そしてそこから強いては生活の質の向上、精神的豊かさ、生きがいが図られてまちづくりにつながっていく。そのような仕組みを生涯学習社会と考えます。
生涯学習とは学び、そして学んだことを活かすことであり、それが自己実現とよりよい社会を目指すことにつながる。強いては社会に役立ち自分の生きがいとなって地域のまちづくりとなる。
「活かす」ということの中の代表格がＮＰＯ（ボランティア）活動です。

生涯学習とＮＰＯ（ボランティア活動）について
①ＮＰＯ活動そのものが自己開発、自己実現につながる。すなわち生涯学習である。
②ＮＰＯ活動を行うために必要な知識、技能を修得するための学習として生涯学習があり、学習の成果を活かし深める実践の場としてＮＰＯ活動がある。
③人々の生涯学習を支援するＮＰＯ活動によって生涯学習の振興が一層図られる。

生涯学習とまちづくりについて
① まちづくり活動そのものが自己開発、自己実現につながる生涯学習となる。
②まちづくり活動を行うために必要な知識、技能を修得するための学習として生涯学習があり、学習の成果を活かし深める実践の場としてまちづくり活動がある。
③ まちづくりの「要素」としての生涯学習、人々の「幸せ」は物質的な豊かさから精神的な豊かさを求めている。

３．　活動の成果
県下市町村のいくつかの生涯学習活動を視察し、行政職員の方や住民の方と接し貴重な体験をすることができました。市町村が行っているいくつかの養成講座へも参加することができ、そこへ参加している地域の方からも貴重な意見を伺うことができました。最初は行政主導型で人材育成の養成講座が開かれ、その人材が行政との関わりで学校支援や地域活動を行いはじめているところもあります。
新旭町では独自の子供が主役のまちづくりを展開していて、子供地域アニメーター養成講座を開催し、学習成果を地域で活用するシステムとして、修了者には認定書を発行して地域の大人と子供のかかわりの支援を推進しています。新旭町へは 5 期生全体での研修を含めると 4 回の訪問となり、生涯学習課の方や地域の方との接点ができたことは各

メンバーの財産となりました。

草津市では単位制生涯学習プログラムを採用した生涯学習大学があり、12 年目を迎えています。100 単位を習得すると「奨励賞」の資格を得られます。学習内容は草津市だけでなく滋賀県内の地方自治体等が実施するものも含まれており、行政が行う学級・講座・教室だけでなく、民間・学校・グループの事業も含まれています。単位の認定は参加型学習のほかに企画に参画、出品、応募による参画型学習、応募型学習も含まれています。その学習のなかのひとつに草津市ゆうゆうびと講座があります。

草津市ではゆうゆうびとバンク（学習ボランティア登録情報）を整備して市民の学びを生かす仕くみを作っています。特に資格は要らなく、教えたい人が登録でき、自主企画による講座を開いています。教えたい人が講座企画を作り、ゆうネットサポーターが講座開設のサポート、行政が広報、場所の手配をしています。教えたい人と学びたい人をつなぐサポート体制が市民と行政の間でうまく運営されています。行政の資源（公民館や行政による広報など）を利用し学んだことを生かす場が提供されています。

湖南市で開催された生涯学習ボランティア講座（湖南市民塾）でまなぶくんグループによるワークショップ（テーマ：地域資源を生かした生涯学習）を行いました。その中から参加者の声として、多くの文化財や巧みの人が市内には住んでいるが、そのような財産をうまく生かす場所がない。行政がすべて出来ることではなく、学びたい人と地域の資源をうまくつなげる市民活動が必要ではないかという提案がだされました。

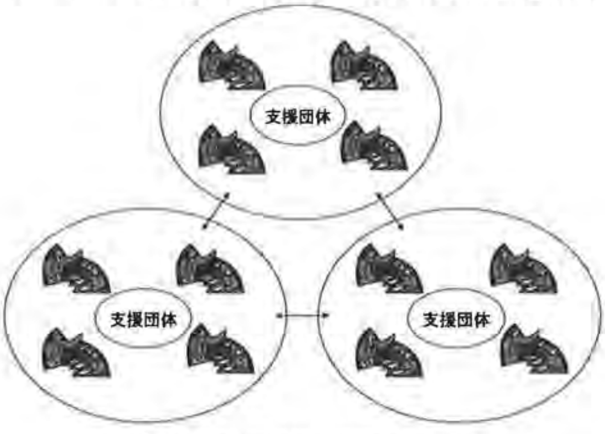
学んだこと（学習成果）を生かすことは、自己実現であり、心理学者マズロー博士の欲求の５段階説（生理→安全→所属・愛情→承認→自己実現）による最上に位置します。自分の能力、可能性を発揮し、創造的活動や自己の成長を追求することであり、その結果、人が元気になり、地域が活性していく社会ができるといわれます。市民講師による学びの提供、支援団体による機会と場の提供があって、そこに学び合う地域社会ができ地域が元気になるといえます。

４、これから未来へ向けて

これからの生涯学習社会では、従来型のカルチャースクールのような自己満足だけの学習ではなく、生涯学習を通して学んだ内容を自らが地域に還元するような、循環型である住民参加の生涯学習が期待されています。これを実現させるためには、学んだ内容を地域に還元する為の機会や場の提供が必要であり、学びたい人と教えたい人をつなぐ、それをサポートするためには行政と民間支援団体の連携が必要です。

今回の報告に先立ち草津市の生涯学習課から生涯学習大学にかんする回答をいただきました。県下で最も活気のある草津市で市民の生涯学習にたいする意欲が非常に高まりつつあるにもかかわらず入学者が減少しており苦慮されています。そのために民間企業などとの

情報交流や連携を視野に入れ、多様な市民のニーズに対応していくことがさらなる振興、普及につながると認識されています。
地域レベルで既に教えたい人（市民講師）の登録制度をもち、市民講師による学びを提供しているところもあります。このような制度を発展して、地域の中で学びたい人と教えたい人をつなぐことから、地域を超えて学びたい人と教えたい人をつなげるネットワークが必要であり、これからの学び合う生涯学習社会には大切であると考えます。まなぶくんメンバーはこれから、各地域で自らの学びを生かす活動を展開します。
メンバーの斎藤は「滋賀の生涯学習社会づくり推進協議会委員」としてこれからの滋賀の生涯学習社会づくりに、この研究活動の中で得た経験を活かし参画する意向です。



学びたい人と教えたい人を結ぶ、顔が見えるネットワーク

5．あとがき

中間発表での運営委員の先生方からはどういうことをしたいのかわからない、どういう方向でまとめるのか、具体的な活動がどういう方向でやっていくのか、特定の地域と個別のテーマに絞ってやったらどうかと多くの指摘をいただきました。
中間発表以後は NPO 訪問、イベント、講習会の参加、昔遊びの竹がしの実演、湖南市での市民講師としてグループとして活動してきました。その間、指摘されたことについては念頭においてきましたが満足な結論には最後まで到達することが出来ませんでした。
活動を通したグループの共通認識はなんだったろうか。
学びたい、教えたいと思っている人が大勢いること。また習ったことを活かしたいとおもっている人も大勢いる。学び合う生涯学習社会がこれからのあたらしいまちづくりには大切であることも実感として知ることが出来ました。そしてそのためには地域を超えて学びたい人と教えたい人をつなげるネットワークが一番大事であると考えました。そしてグループ活動の成果は卒塾後にそのネットワークつくりを実現させることであります。
「生涯学習で飯が食えるか？」の当初のサブテーマは生涯学習で飯を食うのが本来の目的ではなくて生涯学習を振興すること、そしてそれを通して社会に役立てることが第一儀であるとの立場から時期尚早と考えて省きました。しかし、今後の堅固な生涯学習社会を築くには収益性を確保し、飯の食える、生涯学習社会の到来は必要と考えています。
グループ研究活動でお世話になりました、県教育委員会、新旭町生涯学習課、長浜生涯学

習課、草津生涯学習課、湖南市生涯学習課、ＮＰＯ法人滋賀生涯学習インストラクターの会の皆様にお礼を申し上げます。そして2年間5期生のお世話をしていただきました淡海ネットワークセンターの笹山さん、そして事務局の皆様へも厚くお礼申し上げます。
これからが私たちのスタートです・・・・・・・・・

6.　活動の記録《 まなぶくん通信 》

まなぶくん通信　2004年5月21日　滋賀県生涯学習課訪問

県庁生涯学習課訪問の要約です。笹山さんから事前の訪問目的を伝えていただいたので、いろいろと中身のある訪問でした。

参加者：県庁生涯学習課：板倉様、森野様
　　　　まなぶくん：邊見、西澤、斎藤　＋　小久保さん
　　　　事務局：笹山さん

川北君は就職活動で東京、中嶋さんは所要で秋田の為に不参加。小久保さんが今回飛び入り参加。これからもいろいろな所へ訪問しますので、飛び入り参加歓迎です。いろいろな視点で学び会えればと思います。山田さんは都合で残念ながら今回は不参加でした。

■事前に中央教育審議会の（生涯学習の振興方策についての審議経過の報告書 H16・3月）をまなぶくんメンバーで熟読、この方策に関する滋賀県の取り組みをお聞きした。「滋賀の生涯学習社会づくり基本構想」として進めていて H10年に制定され H22年までの基本構想の枠組み。今年度と来年度で基本構想の見直しを行う計画。県民の声の反映として：

＊県民意識調査の実施（今年）
＊推進協議会委員の公募（2名で任期は2年）

　まなぶくんメンバーの活動研究成果が反映できるチャンスかも、応募の検討中。締め切りは6月30日。

■各市町村の基本構想の資料と社会教育関係の学級・教室・講座の実施状況の資料も頂いた。各市町村で取り組み内容に差があるように見えるが、もう少し分析をする必要がありそう。

■しが子どもの世紀3ヵ年プロジェクトの取り組みで、学校、地域、家庭の連携・協働が大切であり、住民参加の必要性について話しがあり、地域コミュニティーコーディネーターの育成が推進されている。

■「成人教育の充実活性化方策」についての資料を頂いた。2007年問題（多くの退職者、地域への溶け込み問題等）に関して、大人の社会参加促進の学びの課題が提起された。

■その他
＊地域にあった持ち味を生かした地域づくり
＊情報発信の重要さ、広報の大切さ

＊生涯学習分野での IT 活用の事業計画は具体的にない、そこが行政以外が入り込める可能性大。

＊図書館事業について、永源寺町ではユニークな事業をしている。

＊生涯学習インストラクターの NPO 組織が滋賀県（近江八幡）にできた。

まなぶくん通信　2004 年 6 月 9 日　地域アニメーター養成講座　新旭町

6 月 9 日新旭町で「生涯学習でまちが変わる」聖徳大学生涯学習研究所所長　福留 強氏の講演に参加しましたのでキーワードをお伝えします。生涯学習で飯が食えるか！から講演がはじまり、各地の事例を入れての講演でした。

◆生涯学習時代の課題

　やり直しのきく社会

　何処で学んでもその成果が正当に評価されること

◆地域の活性化に役立つ自己を生かす活動

　地域の活性化とは、一人一人の活性化（生涯学習が基本）

　　生活の向上

　　生涯学習で飯が食えるか

　　　リタイアメントビジネス/コミュニティービジネス

　　一人一人の活性化、生きがいのある個人

　市民が主役、地域が創る学習機会

　　市民が７割、役場が３割

　　市民大学などの市民講師による有料講座

まなぶくん通信　2004 年 6 月 23 日　新旭町 生涯学習課訪問

【日時】6 月 23 日（水）10：00-12：00

【場所】新旭町公民館４F 会議室

【出席者】新旭町生涯学習課：井上課長補佐、横井川主査、岸本さん、川島さん、

　　　　　　　　　　まなぶくん：邊見、西澤、斎藤、

　　　　（川北はカゼで欠席、中嶋は都合つかず）

　　　　淡海ネットワークセンター：笹山さん、竹岡さん

【内容の要旨】

・生涯学習課は公民館内に設置されていて、公民館主軸に生涯学習時事業を展開している。

・特に青少年の支援事業には財政支援も含めて力をいれている。土曜日の午前　中に青少年を対象にした講座を２０講座以上行っている。青少年の健全育成が　町としての方針。

・総合型スポーツクラブを検討している。ひとつのスポーツ活動だけをするのではなく、1週間に1日は講師として学生が他のスポーツ活動者や地域の人に　教える側に立つような、参加型スポーツ振興を検討している。

・熊野本遺跡群の発掘により保存活動が検討されていて、地域の人的資源を活かした事業展開を考えている。伝統や昔の民具を体験できるような仕掛け。その中で高齢者の知恵を活用したい。

・公民館事業である、さつき大学が行われている。公民館講座で講師を町内・外から有償でお願いしている。合併を意識して郡内の人の受講を可能にしている。参加費用は年間費 1000 円、高校生以下は 500 円で材料費等は別。講師料は　町内講師で 5000 円/1 回程度。住民講師ではなくプロレベルの講師を格安でお願いしている。

・地域住民の参加型として、子ども支援地域アニメーター講座を行っている。

【その後の検討会の意見】

・財政的にも子ども支援に関する行政主体の事業が活発に見えた。

・行政としても、合併を考えるといつまで財政の確保ができず、行政主体の活動が継続してできるか懸念をもっている。

・住民参加を啓蒙するような、養成講座にも力を入れ始めている。子ども支援地域アニメーター養成講座など、これは全国的に珍しい講座。

・今回は行政の側からの説明だったので、7 月 10 日の養成講座に参加（西澤・斎藤）した時に住民側の想いを聞いてみたい。

新旭町生涯学習課訪問

まなぶくん通信　2004 年 7 月 10 日　地域アニメーター養成講座　新旭町

◇新旭町・生涯学習の取組み（一部先月訪問内容と重複します）

公民館運営を民間との協働を考えたい、例えば、公民館講座を民間運営にするとか。青森・十和田市の事例がある。

◇地域活性化事業

自治会住民(22自治体)の得意分野を生かし、経済活動につなげる、地域づくりの支援

ーコミュニティービジネス研修

ー地縁団体活動有効利用の研究

ー朝市グループの育成

ー自治会ホームページの開設支援

ーNPO研修

◇子育てまちづくり(青少年課を独自に作っている、県下では新旭町だけ)

ーしあわせ子育てのまち宣言　H16.4.1

ー合併前に仕組みをつくり、合併後も継続できる体制づくり

ー地域運営学校の創設

ー子育てプロジェクトR(民間事業)の設立支

◇子どもが主役のまちづくりのワークショップ

聖徳大学・生涯学習研究所長　福留　強先生による、子どもが主役のまちづくりについてグループに分かれてアイデア創出から事業計画作成を行った。

6月の訪問で町の生涯学習を通した町づくりの力の入れようを予備知識として持っていたが、今回の養成講座を受講して、新たにその力の入れようが理解できました。生涯学習課が地域活性化事業まで考えていることには驚きです。講座終了後に懇親会があり、すべて手づくりの料理がだされ、西澤さんと料理を堪能しました。当日に切り出したという、竹で作った器や、ビールジョッキもビックリです。懇親会には町長さんもお酒持参で参加され、町長と感じさせない和やかな懇談会でした。4期生の岸本さんも懇親会に参加されていて、いろいろお話を聞きました。町の取組み、財政も含めて、力をいれています。支援体制もできていて、住民参加を期待している状態。言い換えると、住民参加、住民指導型の活動がまだ少ないと関係者が言っていました。

新旭町こども地域アニメーター養成講座

まなぶくん通信　2004年7月14日　草津市生涯学習課訪問
草津ゆうネットサポーターの会訪問

草津市生涯学習課と草津ゆうネットサポーターの会を本日訪問しました。天気村の山田代表理事、全国引きこもりＫＨＪ親の会　滋賀支部の加藤さんも草津ゆうネットサポーターの会員で懇談会でいろいろとお話をしました。要旨を報告します。

【日時】7月14日（水）13：00-17：00　@草津アミカホール2階研修室

【出席者】草津市生涯学習課　木村さん、山岡さん

草津ゆうネットサポーター　鳥居代表と他8名（懇談会参加者）

淡海ネットワークセンター　竹岡さん

まなぶくん　西澤、中嶋、斎藤

【内容】学習ボランティア講座　最終日で、草津ゆうネットサポーターが講師として企画した「よりよい講座を目指して（ワークショップ）」に参加し、終了後に懇談会を行った。

【懇談会の内容】

・ゆうゆうびとバンク（学習ボランティア登録情報）を整備して市民の学びを生かす仕組みを作っている。特に資格は要らなく、教えたい人が登録できる。
・3年前から草津市ゆうゆうびと講座を開講し、教えたい人が講座を開けるよう、草津ゆうネットサポーターと生涯学習課との協働が始まった。
・教えたい人が講座企画を作り、ゆうネットサポーターが講座開設のサポート、生涯学習課が広報、場所の手配をしている。講師は無償、参加者も材料費のみの負担。応募が最低5人に達しないと講座は開催されない。
・公民館（１３箇所）でも公民館講座を独自で行っていて、講座の種類・数は多数ある。その事もあって、講座に参加する応募者が集まらないことがある。
・講座内容が趣味・娯楽だけにならないで、生活の向上、人のネットワークを広げるなど、まちづくりにつながるような内容を考えたい。
・生涯学習活動と福祉活動を分けるのではなく、一緒に連携した活動を考えてほしい。
・未来塾での活動を研究・学習だけで終わるのでなく、実際の地域活動につなげてもらいたい。
・生涯学習とまちづくりについて、生涯学習を通して、それが人づくり、そして町づくりになる。

草津ゆうネットサポーター訪問

他にいろいろ意見交換をしました。中には厳しい指摘もありました。実際の地域活動をされている市民の方と懇談会を持てて有意義な内容でした。

まなぶくん通信　2004年8月6日　長浜生涯学習課訪問

まなぶくんGで長浜市生涯学習課を訪問しました。暑い暑い日でしたが、いろいろな情報交換をさせていただきました。その内容をお知らせします。

【日時】8月6日（金）10：00-12：00　@長浜市役所別館・第5会議室

【出席者】長浜市生涯学習課　峰課長

まなぶくん：邊見、西澤、中嶋、川北、斎藤

事務局：笹山さん

【内容】

・自己紹介の後、峰課長から生涯学習課の仕事についての思いが語られた。生涯学習の仕事について3年になるが、人との係わりがあり、ロマンがあり、楽しい　仕事と思っている。反面、目に見えるような結果がすぐ出ないので、評価が難しく、財政面でも削減の対象になりやすい。

・市内に公民館は7つあり、ほぼ小学校区に一つの配置。公民館講座、サークル活動をしているが、参加者の固定化や、内容もカルチャースクール的なものが多い。自己満足だけでなく人が育つような内容を考えたい。

・土曜学び座を土曜日に小学生を対象に小学校区単位ではじめた。講師は地域の有志が材料手配から運営までをしている。講師料は￥3,000～￥5,000を市から払っている。学校-地域連携でうまくいっている。

・ながはま楽習熟はスタートして10年になる。公民館講座と同様に、講座内容の特色がないので、もっと特色を出せるような内容に来年は見直したい。応募が少なく開講できない講座もある。講師は市民講師で年1回の公募と更新をしている。講師料は無償。講座の企画は行政が行い、市民講師が講座を運営するかたちを取っている。

・生涯学習大学講座として長浜学を開催している。定員は60人で、財政面から講師は地元の方にお願いしている（有償で1～2万程度）。

・各講座を通して内容が参加者の自己満足に終わっている傾向があるので、人の係わりや、学んだ人が次の講師になるような、広がりを考えたい。

・話の中で各自治会で持っている立派な会館があまり使用されていないという話題提供がまなぶくんGからあった。一番住民に近い場所で生涯学習活動ができればいいのでは、たとえば出前講座など。

・まなぶくんGから、今まで訪問した新旭町、草津市の生涯学習の取り組み内容を説明させて頂いた。

まなぶくん通信　2004年9月11日　勉強会

全国生涯学習町づくりコーディネーター　成田さんとの懇談会

【日時】9月11日（土）10：00-17：00　＠県民交流センター・和室

【出席者】まなぶくん：邊見、西澤、川北、斎藤

事務局：笹山さん

ゲスト：全国生涯学習町づくりコーディネーター

成田賀寿代さん

【課題本】

課題本「行政関係者のための　入門・生涯学習政策」の内容について討議。行政の視点から捉えた生涯学習について学んだ。

・「生涯学習社会」とは「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価されるような社会」

・臨時教育審議会が示した3つの課題

①「学歴社会」の弊害の是正

②「社会の成熟化」に伴う学習需要の増大への対応

③「社会・経済の変化」に対応するための学習の必要

【活動後半の方向】

・今までの視察・訪問を通して見えてきた課題を整理する。

・地域活動の実践

10月31日　秦荘町　生涯学習フェスティバルで昔あそび(竹がえし)指導

11月28日　おうみ市民活動屋台村で昔あそび(竹がえし)指導

日程調整中　甲西町生涯学習ボランティア養成講座での講演

【中間発表会準備】

10月10日の中間発表会についてのグループの方針を決めた。

（内容は当日のお楽しみ！！！！）

・中間発表当日は10時集合、最終打合せを会場で行う。

【ゲスト】

昼食後、1時から全国生涯学習町づくりコーディネーターで大津市在住の成田賀寿代さんを囲んで、「生涯学習と町づくり」について話し合いを持った。話が大変盛り上がり予定の2時間を越えて3時間半の懇親会となった。元アナウンサーと云う事で、成田さんのシャベリとパワーに圧倒された。

市民活動のきっかけは、鹿児島県川内市(せんだいし)にご主人の転勤に伴い、移った時に興味のわくような公民館講座がなく、だったら自分で企画提案しようと女性だけの市民大

学講座「素敵工房」を行政に提案しスタート。その外にも「生涯学習＝町づくり」という基本理念のもとに実戦されたお話をしていただいた。滋賀県に移った後も残った女性仲間が活動を続けておられるとの事。お話のなかでポイントとなった言葉を下記します。

・まず行動、一つずつかかわっていく
・しくみが出来れば進んでいく
・行政とのパートナーシップが大事（行政の資源の利用）・手弁当で町づくり
・一品持ち寄り、夫婦で集まり、皆で楽しみながら異業種交流、町づくり
・来たい人が来るような魅力ある講座企画、いつも公民館の教室でなく、公園や市役所ロビーなどですれば、いろいろな人を呼べる、知ってもらえる。
・少し儲けることも大事、それを研修旅行などに使う
・情報発信も大切で、地元紙に載せてもらうような働きかけ。記者クラブのポスト利用、または個別に新聞記者に活動の内容を理解してもらう。

勉強会・全国生涯学習まちづくりコーディネーター成田さん

まなぶくん通信　2004年9月25日　NPO法人　滋賀県生涯学習インストラクターの会

【日時】9月25日（土）12：00-13：00　@近江八幡市　GNETしが
【出席者】まなぶくん：西澤、川北、斎藤
　　　　滋賀県生涯学習インストラクターの会
　　　　　　　　：楠亀理事長、岩田監事、石川さん、佐瀬さん、樋口さん

滋賀県生涯学習インストラクターの会の月例会の終了後、楠亀理事長を含め５名の会員の方と昼食を取りながら懇談をさせて頂いた。6月に一度飛び入りで定例会に参加させて頂いた時の内容も合わせてまとめています。

＊昨年11月にNPO法人を設立、設立まで準備委員会で6年をかけているそうです。
＊生涯学習インストラクターの会としては全国的にもはじめてのＮＰＯ法人で全国から注目されている。

＊会員は県下から４０名ほどで､特に生涯学習インストラクター資格を持っていなくても、意思のある方なら誰でも入会できる。

＊ＮＰＯ法人となることで、活動に対する会員の責任感ができた。行政からも会に対する信頼度も得られた。

＊八幡中学校へ会から講師派遣も行っておられ、会員の社会経験を生かしたテーマで企画されている。

＊近辺市町村の公民館を訪れて出前講座をＰＲし、昨年は４８講座を行っている。派遣費用は決めていなく、相手次第で無償でも有償でもかまわないとの事。

＊まず自分たちで出来ることから始めている。

＊生涯学習活動をしているのは女性が多く、男性、特に定年後の男性が少ない。高齢化社会をむかえるにあたり、この世代の社会参加を増やせればと話し合った。

＊今後ともいろいろと情報交換をさせて頂くことをお願いし散会としました。

NPO 法人　滋賀生涯学習インストラクターの会訪問

まなぶくん通信　2005 年 1 月 14 日　湖南市民塾で講演

テーマ：住民参加型の生涯学習～市民講師によるまなびの提供～

1　まなぶくん紹介　（川北）

2　新旭町の生涯学習活動紹介　（西澤）
　　さつき大学
　　わくどき放課後教室
　　こども支援地域アニメーター養成講座

3　草津市の生涯学習活動紹介　（西澤）
　　草津市生涯学習大学
　　ゆうゆうびと講座

草津市ゆうゆうびとバンク

4　長浜市の生涯学習活動紹介　（邉見）
土曜まなび座
ながはま楽習塾
長浜学（生涯学習大学講座）
5　NPO 法人 滋賀県生涯学習インストラクターの会（斎藤）
市町村公民館への出前講座
6　滋賀県生涯学習課　（斎藤）
滋賀の生涯学習社会づくり基本構想
7　テーマ：『地域資源を生かした生涯学習』

湖南市民塾

まなぶくん通信　2004 年 1 月 27 日
「ＮＰＯは生涯学習分野で何ができるか？」の特別講座に参加

名古屋で行われた「ＮＰＯは生涯学習分野で何ができるか？」の特別講座に参加しました。文部科学省委託事業として岸田先生のパートナーシップ・サポートセンターが関係しているとの事です。阪口さんお勧め味噌カツの矢場とんで昼食、小籠包のディンタイフォンで夕食、満足しての帰宅でした。

【日時】1 月 27 日（木）13：15-16：45　＠あいちＮＰＯ交流プラザ研修室
【出席者】
まなぶくん：中嶋さん、西澤さん、川北さん、斎藤（記）
事務局：笹山さん
【内容】
■講座デモンストレーション「コミュニケーショントレーニング」
ＮＰＯ法人チャイルドラインが受け手ボランティア養成講座で行っている内容の実演紹介があり、川北君も参加して他参加者の二人と傾聴・共感・受容といった内容の体験を行いました。デモをされた高橋さんは、さすがにトークがうまく慣れている様子でした。
受け手ボランティア養成講座（5回）は１８歳から５５歳までが対象で、２２歳までは６０００円、２３歳以上は１２０００円の受講料で定員６０名。受講料はもちろん参加者負担で、受け手ボランティアに認定された後はボランティアとして４年間の期限で活動するそうです。講座料金が高いのではと言う質問に、ほとんどは講師料で、助成金等の援助も受けていないそうです。受け手ボランティアの交通費すら出せない状況と言われ、デモをされた高橋さんも月２万円程度でＮＰＯ法人チャイルドラインの専務理事として仕事をさ

れている。収益性を確保する事業としては難しいとの事でした。養成講座の内容はチャイルドライン受け手の養成講座だけでなく、広く他の分野の養成講座として企業やＮＰＯや市民講座へも進出できる内容で、その方面でも収益を確保できるのではと思いました。

■基調講演

名大大学院教育学部助教授　牧野先生から「生涯学習におけるＮＰＯの役割」の講演がありました。政府行政の事業と地域活動との矛盾や学習事業は基本的に収益事業になじまいないのではと課題提起がありました。生涯学習分野におけるＮＰＯのあり方として

①新たな公共性の構築にあったて、大学など研究機関および企業など民間セクターとの媒介役

②目的志向型ＮＰＯをネットワークするネットワークＮＰＯ・コーディネートＮＰＯの可能性＝ネットワーク、コーディネートを目的とするＮＰＯ

③大学など非営利機関の事業とのジョイント・プロジェクトの企画・実施、および大学などのできない領域への展開⇒例：「中高年者のための人生・キャリア再生計画セミナー」後の事業展開・収益事業化

④目的に即して関連ＮＰＯを組織化他に大学から見たＮＰＯ組織についての意見がありました。

■パネルディスカッション「NPO は生涯学習分野で何ができるか？」

牧野　篤氏（名大大学院教育学部助教授）

高橋裕恵（NPO 法人チャイルドライン専務理事）

面高俊文（株・デンソーユニティサービス代表取締役）

松下典子（NPO 法人地域福祉サポートちた代表理事）

大学・企業・ＮＰＯの観点から討議がされた。企業としも社員を社会へ戻すための人生キャリア再設計セミナーや生き方セミナーを行い、定年後の社員が社会に戻れるような施策をしているので、NPO による支援・サポートもこの分野で企業と連携できる。大学との連携で NPO が得意とする分野で大学での講義もできる。企業もこれからは社会貢献と企業イメージの為に知名度のある NPO との連携が出てくる。川北君から地域・地縁との関係について質問、名古屋では既に地縁が成り立たなくなりつつあり自治会組織に参加しない住民が増えているという社会問題がある。他にもいろいろな話題がでた。まなぶくんから湖南市民塾でのワークショップで出た、学びたい人と教えたい人をつなぐＮＰＯができることで、循環型の

講座デモンストレーション風景

生涯学習ができるのではと提案を最後にさせていただいた。

遊びから学ぼう～昔遊び「竹がえし」～イベント参加

１０月１７日草津市制 50 周年イベント参加

草津アミカホール前広場

１１月１７日おうみ市民活動屋台村参加

大人も真剣なまなざしです。

１０　参考文献

新訂　入門・生涯学習政策　岡本薫署

滋賀の生涯学習社会づくり基本構想　滋賀県

生涯学習指導者養成講座テキスト　実務教育研究所

淡海生涯カレッジ講座

「学びを生かそう」　神部滋賀大助教授

応援志隊

～ＮＰＯに対する中間支援と地域活性化～

林龍史、小久保弘、阪口博司
山田幸子、伊藤久美子、曾根真紀

１．はじめに
２．中間支援についての調査
３．ホホコミュニティーについて
４．ホホコミュニティーへの支援
５．ＮＰＯ評価
６．おわりに

１．はじめに

おうみ未来塾５期生の中で、ＮＰＯについて研究活動を進めたいと思っていたメンバーが６名いた。市民社会の発展のためには、社会の中に市民活動を支える仕組みが必要と考え、ＮＰＯ中間支援をテーマに研究していけばよいのではないかと考え、グループ「応援志隊」を結成した。

応援志隊のメンバー各自の NPO に関するテーマやアプローチはばらばらであったが、大きな目的は、「NPO の活動状況や地域環境変化を把握したうえで支援を行う」ことである。

はじめに、いくつかの NPO 中間支援センターの活動から支援方法を調べ、一方で個々の NPO の活動状況から支援方法を考察し、地域の活性化に役立つことを目標とした。

また、活動の二本目の柱として、彦根市のＮＰＯであるホホコミュニティーへの支援を行った。これは、メンバーの一人がホホコミュニティーに属しており、事業活動の悩みに応えていくことで、中間支援の新たな役割やブレークスルーが得られるのではないかと考えたからである。コンサルティングの手法やＮＰＯ評価の手法を活用して、ホホコミュニティーの事業拡大のための協働作業を進めてきた。

以下に、応援志隊の活動報告を紹介したい。

応援志隊１年間の活動実績

		関連団体へのアプローチ	ホホコミュニティとの作業
		関連ＮＰＯの調査、研究会への参加、調査報告書、特色あるＮＰＯ、関連ＮＰＯのレビューなど	事業の不透明さの悩みや事業拡大のため協働作業など
'04	4月	市民熱人代表　阿部氏 おうみ政策ネットワーク代表　仲野氏と懇談	
	5月	ひとまち政策研究所フォーラム参加 （テーマに「ＮＰＯと評価」）	団体の現状および思い、ビジョン、事業展開、課題などを把握
		ＣＳ神戸理事長　中村氏と懇談	
	6月	わくゼミ参加 せんだい・みやぎＮＰＯセンター代表加藤氏と懇談	全体の事業マップ作成し、事業展開の検討、課題把握など
		しが協働モデル研究会参加 （参加ＮＰＯ数団体と懇談）	
	7月		団体の強み、弱みなどのレビュー
	8月	しが協働モデル研究会参加 （参加ＮＰＯ数団体と懇談）	事業活動マップを作成し、当面のアクションについて検討
	9月	滋賀県内地域支援センター意見交換会参加	多文化共生センターと協働化の討議
	10月		新規事業への支援、資金獲得の仕組みなどを検討
	11月	しが協働モデル研究会参加（参加ＮＰＯ数団体と懇談）関連グループとの懇談	不登校児のケア事業計画立案および彦根市内まちイベントでの情報収集
	12月	大阪ＮＰＯセンター　山田事務局長と懇談	新しい活動の把握および各活動センターの運営分析
'05	1月	近畿ろうきんＮＰＯフォーラム参加	ヴォーリズネットワーク準備開始 （水口、近江八幡、安土、米原、京都、彦根との連携）
	2月	いわてＮＰＯセンター　高井理事長と懇談	活動センターへの新たな取り組みについて討議
		大津市市民活動団体交流会参加	きづきシート、バランススコアカードにより全体検証
		滋賀県コミュニティビジネス モデル事業発表会参加	

２．中間支援についての調査

関連ＮＰＯとのヒアリング、研究会への参加、調査報告書のレビュー等により、中間支援の概況、課題について、以下にまとめた。

(1)中間支援ＮＰＯのヒアリング

各ＮＰＯのコメントは今後の推進に対して参考になった。

・おうみ政策ネット（中間支援のポイントは組織、機能、施設）
・ＣＳ神戸（今、ＮＰＯに求められているのは地域力、起業力）
・せんだい・みやぎＮＰＯセンター（裾野を広げることを重点化）
・大阪ＮＰＯセンター（経営コンサル強化と人材育成が最重点）
・いわてＮＰＯセンター（最大テーマは地域人材育成事業）
・東近江ＮＰＯセンター（センター機能強化。コミュニティビジネス振興）
・大津ＮＰＯセンター（地域ＮＰＯのマップ作りと人材掘り起こし）

特に、大津ＮＰＯセンターは、まだ発足して１年ほどであり、他のＮＰＯセンターに比べると、組織、財政基盤等すべてがこれからであり、中間支援機能としての課題を全て抱え込む形になっているように思える。是非、我々メンバーも何らかの支援をして行きたいと思う。

このヒアリングで、強く感じたのは、「組織マネジメントの出来る人材の育成」である。概括的なことを言えば、組織を大きくするのなら、リーダを補佐するスタッフ、マネジャーが絶対必要である。ＣＳ神戸、せんだい・みやぎＮＰＯセンターなど、事業規模１億円以上の大きな組織は、それなりのメンバーが組織的に動いている。

(2)中間支援機能について

大きくは、以下の７点となる。

・場の提供（場所、施設、機材の提供）
・情報収集と発信（自由な情報広場の構築を民間が中心に推進）
・コーディネータ機能（行政とＮＰＯ、企業とＮＰＯを結びつける。行政との懇談を含めた親密な関係作り）
・相談・コンサルタント機能（各専門家との連携と支援のネット作り）
・マネジメント支援機能（ＮＰＯの経営に関するノウハウ、スキルの提供）
・コミュニティシンクタンク機能（地域の未来像に責任を持って関り、欠けている機能やサービスを提案できる組織作り）
・地域資源の開発・仲介機能（より広範な新しい人材を育成、発掘、仲介して行く）

(3)支援センターの課題

・資金不足と支援人材（組織をマネジメント出来る）の不足

・地域資源の発掘・開発と仲介の具体的な仕組み作りの強化

滋賀県における中間支援センターの概要を表１にまとめた。県内支援センターについては、建物管理、運営が主であり、交流活動、コミュニティビジネスの推進等ソフト面の支援を強化することが必要と思われる。望まれる姿は、協働のコーディネータとして地域の事業を計画推進することである。

(4)地域ＮＰＯが必要としていること

資金支援（行政との連携、物品の提供）の強化、情報発信力と収集力の増強、マネジメントノウハウ獲得とメンバー確保、特に、指定管理者制度の実施に対応するには、組織としての評価が問われることになる。サービスを継続的に、キチンとした品質で、実施できる組織体制が必要な時期となって来ているのではないだろうか。「ミッション」主体の展開から「マネジメント」主体の事業展開への変革が求められている。

(5)今後やってみたいこと

ＮＰＯの抱える問題は様々ではあるが、共通的には、①マネジメントメンバーの不足②運営資金を稼ぐ意識、行動力の不足③横連携の不足があるのではと思われる。

このため、以下の点について、実施できればと思う。

・人材育成

特に、「コミュニティビジネス教育プログラマ」化の実施

・各ＮＰＯの組織としての知名度アップ

ＮＰＯポータルの構築。各ＨＰの更新支援

・関連情報の入手と横連携の強化

交流会の促進、活発化とＮＰＯマップ作り。止まり木的場所の確保

「本音情報」収集の仕組み作り

表１　県内の主な地域支援センターの概要

	設置形態	財源	運営主体	事業・機能
マキノ町まちづくりネットワークセンター	民設民営	職員給与:委託事業　事業費:参加費	運営委員会(月1回)	子育て事業・まちづくり交流会・町委託事業(冊子の編集)・ﾘｻｲｸﾙｼｮｯﾌﾟ・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｶﾞｲﾄﾞ・ｻﾎﾟｰﾄﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｺｰﾃﾞｨﾈｰﾄ・情報誌
東近江NPOセンター	民設民営	委託収入	運営委員会(月1回)	相談・場の提供・ﾌｫｰﾗﾑ・ｻﾛﾝ・情報提供
草津コミュニティ支援センター	公設民営	光熱費等市から事業団へ補助金	支援センター運営会	有償貸し出し会議室など
水口自主活動センター きずな	公設民営	町から	登録団体の交流会	施設の自主管理
ひこね市民活動センター	公設民営	市から光熱費(来年度からなし)	運営協議会(月1回)	場の提供・情報提供・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱのｺｰﾃﾞｨﾈｰﾄ・利用団体の催しｻﾎﾟｰﾄ
栗東ボランティア市民・活動センター	福祉協議会立	社協から	運営委員会(月1回)	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｺｰﾃﾞｨﾈｰﾄ、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ祭り、子育て・痴呆支援ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ養成講座・公民館等との共催事業
草津市まちづくりセンター	公設公営	人件・光熱・管理費:市	運営協議会	相談・情報提供・ﾒｰﾙﾎﾞｯｸｽ・場の提供(登録団体、一般用貸館)
守山市民活動センター	公設公営	人件・光熱費:市	守山市	場の提供(ﾜｰｸｺｰﾅｰ・ｻﾛﾝ)・情報発信・ｽﾎﾟｰﾂ施設・貸会議室

３．ホホコミュニティーについて

応援志隊の活動の二本目の柱はホホコミュニティーとの協働である。事業の不透明さなどで悩みのあったホホコミュニティーと事業拡大のための協働作業をはじめた。

まず、ホホコミュニティーの概要と協働の理由について説明したい。

(1)ホホコミュニティーの概要

ホホコミュニティーの概要は以下のとおりである。

名　　称　特定非営利活動法人ホホ・コミュニティー（2002 年 1 月 28 日認証）
Half for ourselves. Half for others
「時には自分以外のことについて考えて行動してみよう！！」

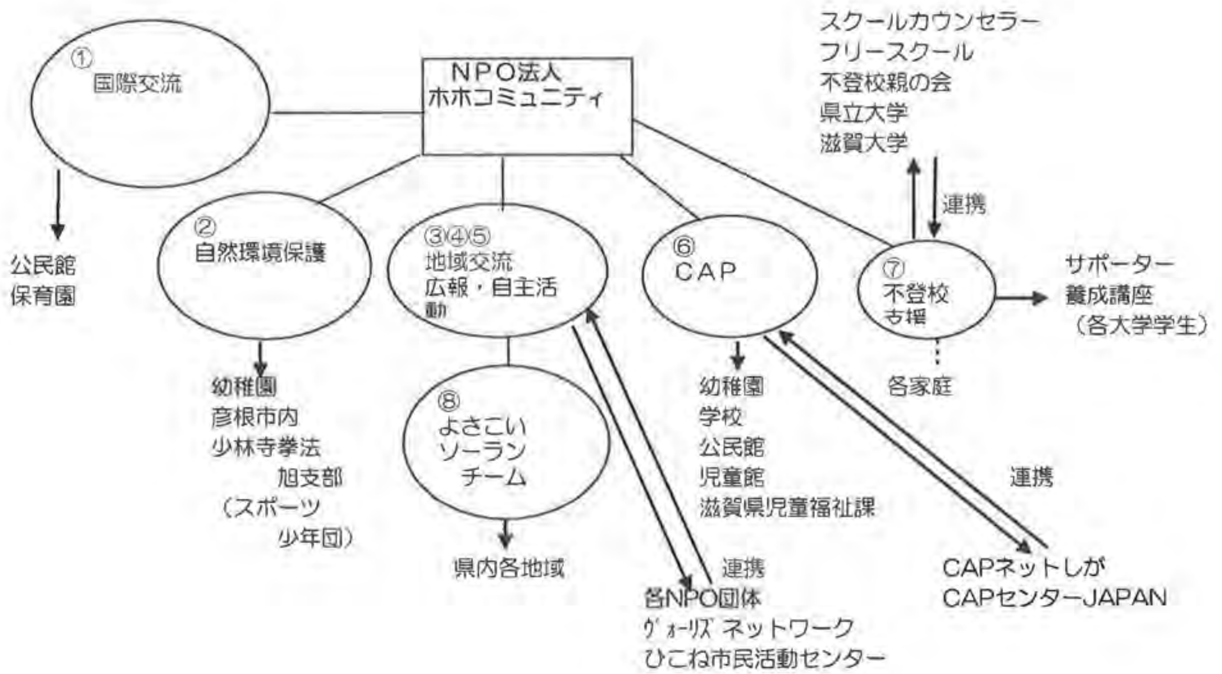
代表者名　小林　秀晴

設置目的　青少年健全育成のための活動

沿　　革　平成３年にホームステイの受け入れ（国際交流活動の前身）、少林寺拳法の生徒に対してのレクリエーション（自然保護活動）をはじめ、平成７年に英会話アンティコ開設し、以来ニュージーランド、アメリカ、カナダ、オーストラリアからのホームステイの受け入れと国際交流地域交流活動を

はじめている。平成 14 年 1 月に滋賀県から NPO 法人として認証を受け、各活動を NPO 法人ホホコミュニティーとして開始

会 員 数　現在１８１人



８つの活動の沿革

①1993 年～　89 名（国際化する社会にとって必要な事－多様性の理解と自主性を学ぶ場を提供）

②1994 年～　70 名（生きていくために必要である自然環境保護啓発）

③④⑤1998 年～　約 10 名（一団体では達成できない事を連携して可能にする）

⑥2004 年～　９名（参加者だけで解決できない子どもへの暴力防止問題を地域で解決していくために CAP 活動開始）

⑦2004 年～　５名（CAP プログラムに参加できない家族への支援と子どもに関わる大人への支援開始）

⑧2005 年～　50 名（体を使ってコミュニケーションをとる手段としてメンバーがグループ結成）

８つの活動の概要

①国際交流活動

外国人の日本文化修得プログラム提供と支援

幼稚園、学校、公民館などにおいて多様性文化との交流体験

年４回地域でのイベント（春のお楽しみ会・夏の合宿・ハロウィン、クリスマス会）

英語を用いてのエンパワメントトレーニング

＊参加者会費により運営

②自然環境保護活動

自然の大切さを森林整備、清掃活動を体験することで自覚

環境保護のための勉強会

＊少林寺拳法彦根旭支部・子ども会・彦根市と連携

③地域交流活動

ひこね市民活動センターに参加、協力

センター活用のために現在準備会開催中

④広報活動

現在は不定期に各活動について情報誌発行（公民館・学校などに配布）

⑤自主活動

会員の子どもたちが、イベントや勉強会を企画、運営（保護者がサポート参加）

⑥ＣＡＰ（子どもへの暴力防止プログラム）活動

大人プログラム

子どもが自ら身を守るために必要な事。今すぐできる子どもへの支援などを体験しながら理解していただくプログラム（教職員・保護者・地域の大人対象）

子どもプログラム

３つの劇を通して「安心して、自信を持って、人として生きる」ためにできる事を学ぶプログラム（幼稚園、小学生児童、中学生対象）

⑦ピアサポート（不登校、ひきこもり家庭支援）

学校で提供するＣＡＰプログラムに参加できない子どもが年々増えていく事から早期解決により、社会的に大きな問題にならないよう予防するための支援。現在フリースクール・県立大学・滋賀大学・不登校親の会・スクールカウンセラーとの連携によりサポーターの養成を行っている。

(2)ホホコミュニティーとの協働の理由

なぜ、ホホコミュニティーと協働したか。これについては、応援志隊のメンバーでありホホコミュニティーの幹部でもある伊藤久美子の発言があるので紹介したい。

12 年前に国際交流活動から始まり、今年度はよさこいソーランチームとして新たに活動が増えたホホコミュニティーは、各活動の担当が運営委員となり公民館や幼稚園、小学校などで活動している。

地域で必要とされればされるほどにスタッフ、時間の確保などの負担が大きくなり厳しい運営となっている現状から、今後の運営改善に向け支援の対象となった。

各活動の年数、規模、運営形態が違うため他団体への適用も可能であることも、ホホコミュニティーを協働の対象とする理由になると思う。

4．ホホコミュニティーへの支援

(1)ホホコミュニティーに対する支援コンサルの実施

ホホコミュニティーというフィールドで以下のような支援コンサルを実施した。

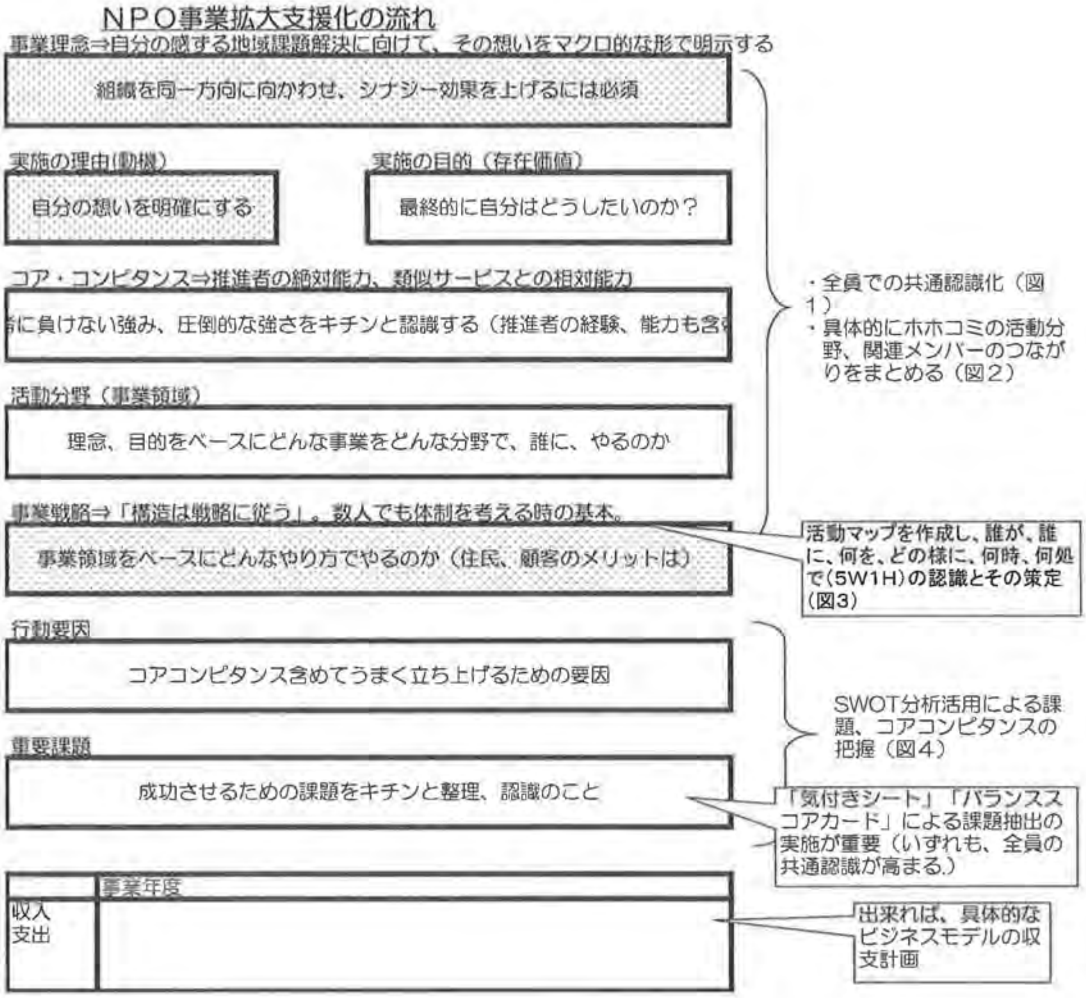
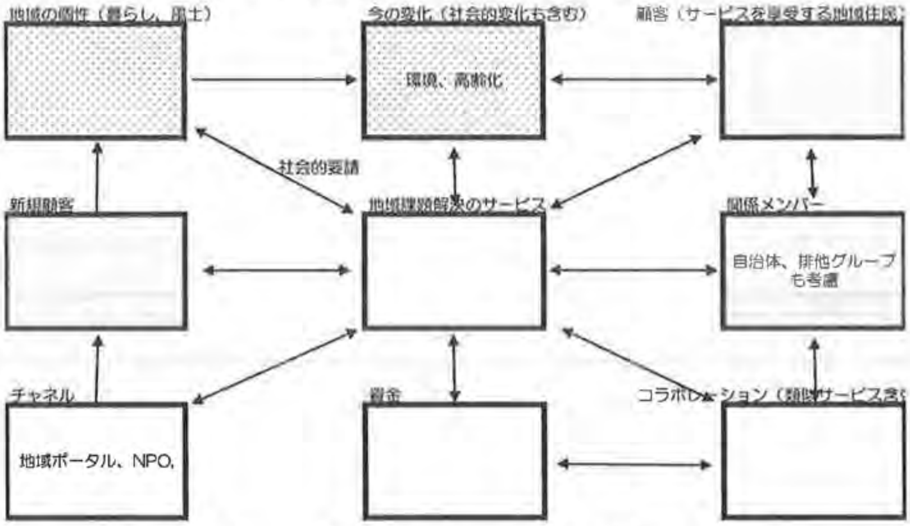


図１　事業の関係性

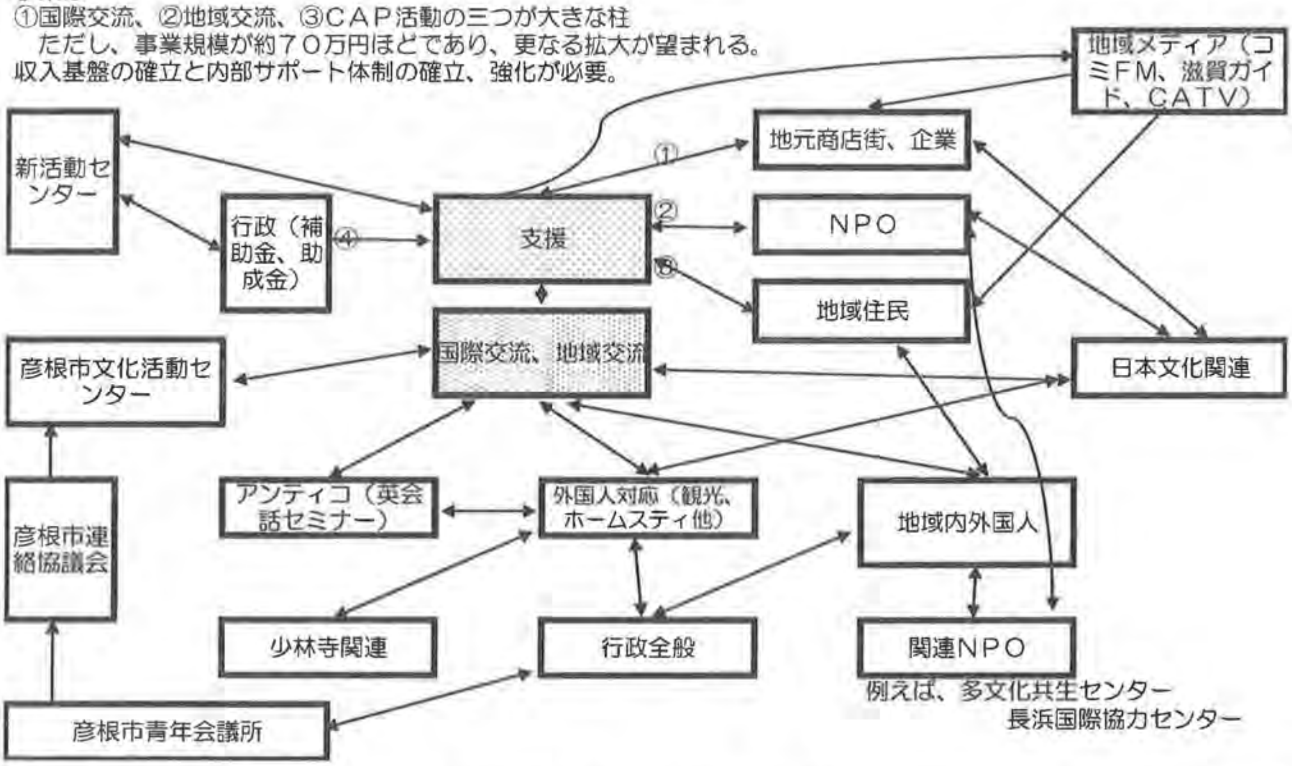
各要素の状況の把握と関係特性の整理をキチンとする



事業の具体性が描けるようになったら、関係メンバー（ステークホルダー）との相関性、
金の流れも概括した*ビジネスモデルを書く⇒図２を参考*

図２．活動分野（ホホコミュニティ事業拡大化について）

事業は
①国際交流、②地域交流、③ＣＡＰ活動の三つが大きな柱
　ただし、事業規模が約７０万円ほどであり、更なる拡大が望まれる。
収入基盤の確立と内部サポート体制の確立、強化が必要。



	具体的な支援行動	対象	当面の対応
①対応	・支援検討会（パソコン、机、事務所等 ・寄付金、賛助金獲得 ・国際交流活動の展開による商店街活性 ・企業内人材登録とマッチング	地元企業、商店街	ホホコミの信頼度向上（活動実績、業務、体制等の情報開示⇒ＨＰ作成
②対応	・共同化による補助金、助成金の獲得 ・得意分野での相互補助 ・新たなるＮＰＯの立ち上げによる仲間	彦根市内ＮＰＯ	各ＮＰＯの状況把握とその具体的な評価⇒彦根市周辺、関連ＮＰＯの個別調査と協力依頼
③対応	・アンティコ加入推進 ・地域内外国人との交流 ・寄付金、賛助金、ボランティアとして ・人材登録とマッチング	地域住民	ホホコミの認識度アップ（地域メディア、行政広報誌活用）⇒コミＦＭ番組、何かの大会開催、やる気のあるメンバーの発掘
④対応	・各申請提出の支援 ・助成金他有力案件の早期把握 ・各種補助金の行政からの獲得	彦根市、滋賀県、各団体	行政情報の入手と各担当とのチャネル化。当面９月ぐらいまである公募案件探し

今後の課題他

・「滋賀県を日本一の国際交流県にする」ビジョンを基本にホホコミとしてのコンセプトの見直し

・ホホコミの強みの再確認と人脈の拡大

・新活動センターへの提言とホホコミ中心の体制作り⇒提案力の強化

・青年会議所との密なる対応

図３　ホホコミュニティーの活動マップの作成

ホホコミのカバーエリアにより、サービスの確定を図る。対応人数、概スキル。

チャネル確保のための1次対応部門を洗い出す。

	国際交流	地域交流	アンティコ（英会話）	CAP支援	就職支援	マネジメント研修	関連チャンネル（１次対応部門）
地域住民			英会話ｽｷﾙｱｯﾌﾟ支援	受入れ対応			各自治会
商店街	活性化支援	活性化支援	イベント支援				彦根商工会議所
地元企業					資金調達支援		彦根商工会議所。支援プラザ
NPO	連携強化	ｺﾐﾋﾞｼﾞ提案、連携		連携強化		職員研修対応	淡海ネットワークセンター
自治体（市レベル）		業務受託		連携強化		職員研修対応	彦根市
自治体（町レベル）				連携強化		職員研修対応	彦根市
外国人	観光、ﾎｰﾑｽﾃｲ		ｻﾎﾟｰﾄﾒﾝﾊﾞｰ受入れ				国際交流センター
金融機関							
大学関係		産学連携提案		連携強化			滋賀大、滋賀県大
商工会関連		補助金獲得支援	イベント支援		資金調達支援	メンバー研修	彦根青年会議所
地域メディア	情報発信	情報発信				メンバー研修	

ホホコミとしての最終顧客

当面のアクション

①1 次対応部門のチャネル強化施策（何処の、誰に、何を、どのように）

⇒拡販資料による推進

②ホホコミの強みの把握と実施策（まずは、実績作り）

③最終顧客の確定（現況に合わした顧客の絞込み）

⇒次のフェーズ含めての全体整理も必要

④個別施策の策定と優先順位付け

⇒活動マップの箱毎にまとめる必要がある。

図4　組織としての SWOT 分析

	主要行動要因	事業機会	事業脅威
	①コアコンピタンスを活かしているか ②現事業機会に自組織の強みを活かす ③自組織の強みで現脅威を克服する ④他組織での脅威を自組織の強みで活かす ⑤現機会を利用して自組織の弱みを克服 ⑥脅威と自組織の弱みが組み合わされ、最悪状態となることを避ける	「機会カード」より	「脅威カード」より
強み	「強みカード」より コアコンピタンス	機会に対して強みを活かす	脅威に対して強みで克服する
弱み	「弱みカード」より	機会を利用して弱みを克服する	脅威と弱みの組み合わせで最悪状況となることを避ける。

(2)ホホコミュニティー活動マップ作成をもとにした支援に対する成果

今回の「ホホコミ活動マップ」作成をベースとした支援により、以下の成果が出てきたと思う。

①現事業とその関連する事業への展開

自分たちの活動エリアの広さの再認識とそれをベースとした事業アイデアの具体化

⇒メンタルケアをベースとする「ピアサポート」事業の開始

②拡大のための新しいアクション

⇒人脈の拡大強化。ＨＰのリニューアル化によるＰＲアップ

③課題への新たなる取り組み

⇒彦根市民活動センターのＮＰＯ化推進。これにより、中間支援センターとして拡大出来るか？

全般的には、今まで以上に、「事業全体をもう少し広く捉えて、計画的に実施していく」意識が出てきたのではないかと思う。

5　ＮＰＯ評価

今回の調査で行うＮＰＯ評価とは、採点、審判という意味合いではなく、あくまでＮＰＯ団体自身の活動を振り返ることで気づきを得てもらうことを目的としている。これは、対内的、対外的な説明責任を果たすための機会の確保と言い換えても良いう。

今回は、対話をしながら気づきを言語化していく方法（気づきシート）と、定量的に表すバランス・スコア・カードの二種類の調査を行った。バランス・スコア・カードとは、

顧客・財務・内部プロセス・学習と成長の４つの視点からホホコミの思いを定量的な目標としてメンバー間で共有するものである。

二種類の調査を行い、ＮＰＯ団体が活動の振り返りをした上で、これからのために何をすべきかメンバー間で共有できるシート作りを目指す。

(1)ＮＰＯ評価：気づきシート

ＮＰＯ法人ホホコミュニティー代表と事務局スタッフに対して、活動についてヒアリングを行った。活動に対しての概要、活動の問題点や改善点をあげてもらい、活動をふりかえってもらった。

そのヒアリング内容を以下のような表にまとめた（表２）。

表２　気づきシートの例

問題（現象・状況）	課題（原因・背景と対策）	
	原因・背景	対策
○△が実現できなかった	それはなぜか？	どう対応すべきか？
○△が不十分だった	何がどれだけ不足したからか？	今後はどう補うべきか？
○△が予想以上に実現できた	それはなぜか？	どうすれば継続できるか？
○△は実現できた	それはなぜか？	どうすれば改善できるか？

①ホホコミュニティー代表小林氏の気づき

昨年春に「ひこね市民活動センター」の事務局を担当し始めてから、ホホコミュニティー以外の団体との協議に苦労・戸惑いがあったことがあげられる。

事務局運営に労力がかかり、その分の成果は上がったが、ホホコミュニティー自体の運営まで労力がさけなかった（表３）。

表３　ホホコミュニティー代表小林氏の気づきシート

問題（現象・状況）	課題（原因・背景と対策）	
	原因・背景	対策
会員募集ができなかった	他の業務が多忙	他の業務を可能な限り他の人に任せる
ひこね市民活動センター自身の機能が不充分だった（運営協議会形式はとっているが、議事録もルールもない）	ホホコミュニティー以外のメンバーに意欲がなかった、活動を熱心にしているほど協議会から抜けていった	今までの成り行き（機能していない運営協議会方式）を清算し、JCへの不信感を取り除く
ひこね市民活動センターの現状は、運営協議会を除くと、センターとしての役割は果たせた	ホホコミュニティーの努力が実った（それまでのセンターの利用は月１回の運営協議会と各団体が利用したい時のみだった）	常時開館の為には、センターの運営を他のメンバーと共に協議する必要あり

②ホホコミュニティー事務局伊藤氏（応援志隊メンバー）の気づき

代表と同じく、昨年春に「ひこね市民活動センター」の事務局を担当し始めてから、ホホコミュニティー以外の団体との協議に苦労・戸惑いがあったことがあげられるが、事務局運営でのメリットもあげられている（表４）。

表４－１　ホホコミュニティー事務局伊藤氏の気づきシート　その１

問題（現象・状況）	課題（原因・背景と対策）	
	原因・背景	対策
センター運営の労力取られていることに対し、内部で批判がでた（センターの必要性が理解してもらえなかった）	各活動に対してお互いに干渉をしなかったため、各事業内容を知らない（毎月していた全体会議を今年度は年2回しかしていなかった）	外向けの広報活動だけではなく、メンバー内の情報交換も必要（1月から全体会議を毎月にした）
ホホコミュニティの事業をセンターで開催（自然環境：樹木の手入れ講座、コンサート）	センターの周りの樹木が弱っていることから　・　センターに訪れる人が増えてきたから	センターでイベントをすることにより、センターとホホコミュニティの広報が同時にできた、センターを通じて参加者・会員が増えた

表４－２　ホホコミュニティー事務局伊藤氏の気づきシート　その２

問題（現象・状況）	課題（原因・背景と対策）	
	原因・背景	対策
ひこね市民活動センターとしての機能作りができた（以下事例）	常時開館のため、いろんな人が訪れるようになり、事業協力できた（それまでのセンターの利用は月１回の運営協議会のみだった）	常時開館することにより、関係団体以外との交流がうまれた（常時開館の必要性を感じた）
①ひこね市民活動センターの運営費を得る事業を行った（センターのカレンダー作り １部１０００円）	センターを訪れた利用団体との協力で実現した１００部作成うち９０部売れた（6万は経費、残りの3万収入）	
②センターの加入団体と連携できた（例：クリスマスの飾りつけ・ホホ主催イベントに参加）	センターの常時開館により交流ができた	
センター機能に疑問：運営協議会を解散（会員ではあるが会議に出る人はやる気のある人が出席）	運営機能を充実させる、収益事業をセンター主催で行う	運営協議会形式から運営にかかわりたいと思う個人の参加にすることによって、協議会退会者が戻ってきた

(2) 気づきシートから得られた成果

気づきシートからアドバイスをし、実現できたことは以下の２点である。

①ヴォーリズ建築のネットワークを作成

②ホホコミュニティー・市民活動センターの活動　概要を整理

運営協議会がうまく運営できないことに対し、地域を越えたネットワークを広げてはどうかという意見に対し、ひこね市民活動センターはヴォーリズ建築の洋館だったことから、県内のヴォーリズ建築で活動されている団体とネットワークを広げることに成功した（2005 年１月)。現在、作品展の開催を県内のヴォーリズ建築で持ち回りおこなうことなど、積極的に活動を広げている。(別紙参照)

今回、市民活動センターの運営に労力を取られていることに対し、内部で批判がでた(センターの必要性が理解してもらえなかった）ことに対し、ホホコミュニティー活動内容が外部だけでなく内部にも説明必要だと感じた。対応として、メンバー内の情報交換も必要ということから、１月から全体会議を毎月行う事となった。また、ホホコミュニティー・市民活動センターの活動や概要をわかりやすく説明できる必要があることから、この資料をもとに概要の整理を行うことにした。

⑶ＮＰＯ評価：バランス・スコア・カード

前述しているが、バランス・スコア・カードとは、組織の目標（ミッション）を定め、その実現のために顧客・財務・内部プロセス・学習と成長の４つの視点から個々の目標を設定、管理、評価する目標管理、業績評価の一手法である。

ホホコミュニティーは 1991 年に活動を開始して以来、現在の会員数は 180 名を超え、活動分野も多岐にわたるようになった。しかし、最近ではメンバー間でのコミュニケーション不足もあり、組織内で目標の共有が必ずしもできていない事態が見られるようになってきた。そこで、バランス・スコア・カードの持つ４つの切り口からホホコミュニティーの活動を棚卸しし、そこからメンバー間で対話をしながら目標を作り上げて行けばメンバーの納得度の高い目標設定ができるのではないかと考えた。

また、以下の３点の効果が期待できることも考え、バランス・スコア・カードの作成に取り組んだ。

・メンバーの自らの役割に対する理解と意欲が向上する
・組織のレベル・業務に応じた目標管理が可能になる
・活動実績を納得感をもって公正に評価することが可能になる

今回作成したバランス・スコア・カードについては図５を参照されたい。

⑷バランス・スコア・カード作成による成果と今後の課題

今回は目標値の設定にまでは至らなかったが、バランス・スコア・カードの４つの視点から、それぞれの活動単位においてやるべきことが整理できただけでなく、メンバー間でも明確に共有できるようになったのではないかと思う。紙の上にやるべきことが書き落とされたことで、それぞれの活動単位が横の連携を取り、一体となって公民館へ売り込みを

してはどうかといったアイデアが早速出てきた。また、財務の視点をはっきりと意識することで、財務基盤を確立するためにはイベントでの持ち出しは厳禁としなければならないなど意識の変化も見られるようになってきた。これらは、バランス・スコア・カード作成の取り組みにチャレンジしなければ得られなかった成果であると思う。

一方で、とりあえずチャレンジしてみたが、今回はできなかった指標の数値化をはじめ越えなければならないハードルが高かったことも確かである。財務を意識させることや、目標設定の際に議論を尽くす機会となるなど、これからの経営体における定番のツールであるだけに十分に使いこなせるようになりたいと思う。

図５　ホホコミュニティーのバランス・スコア・カード

ミッション
会員相互の協力により、地域住民の交流や国際交流の推進のため、幼児・青少年・大人を含めた各地域の住民に対して語学教育に関する事業等を行うとともに、自然保護のため、自然環境の整備や食糧の重要性を啓発する事業等を行うことによって社会全体の利益の増進に寄与することを目的とする。

視点	活動分野	目標
顧客	自然環境保護	ホホコミ会員の児童・生徒が四半期毎に彦根城内の樹木の手入れを実施
	国際交流	ホホコミ、アンティコ、地域の子供を対象にイベントの開催
	地域交流	公民館職員への積極的営業
	子供の権利を守る活動	小学校の教室単位でのＣＡＰプログラムの実施
		教職員、医療関係者、行政職員向けＣＡＰプログラムの実施
	ピアサポート	不登校親の会、フリースクール、大学との連携によるサポート
財務	自然環境保護	行政からの事業受託
	国際交流	年間契約する保育園数
	地域交流	開催イベントの増加
		収益をあげることを念頭に置いたイベント開催
	子供の権利を守る活動	ＣＡＰのワーク料
内　部 プロセス	自然環境保護	季節にあった樹木の手入れ
	国際交流	外国人会員の企画立案によるイベントの開催
	地域交流	魅力的なプログラムの開発
	子供の権利を守る活動	対象を幼稚園、中学校にも拡大
	ピアサポート	不登校親の会、フリースクール、大学との連携によるサポート
学習と 成　長	自然環境保護	指導者の知識・技能の習得
		四半期毎の活動の前にホホコミ会員の大人、高校生にリーダー研修
	国際交流	外国人会員の企画力能力向上
	地域交流	地域に受け入れられやすいイベント企画能力向上
	子供の権利を守る活動	ＣＡＰスペシャリストの育成
		ＣＡＰチームスタッフの能力向上
	ピアサポート	学生スタッフの育成

6　おわりに

バックグランドの違う６名が、興味の摺り合わせ、方向性、スケジュール調整等々もがき続けた１年間であった。

卒塾報告会でも指摘を受けたが、中間支援の研究とホホコミュニティーの支援の関係は最後まで整理がつかないままであった。中間支援について新たな何かを切り開いたとは言い難い。しかし、ホホコミュニティーの支援については、私たちが関与したことにより新たな動きも生じてきた。ささやかではあるが誇りにして良いと思っている。

成熟した市民社会を築いていく主体は、他の誰でもない私たち自身である。ＮＰＯはその際の有力なプラットフォームであるが、マネジメント課題は山積している。今回はその一端を身をもって知ることができた。反省点は多々あるが、一年前にはボランティアとＮＰＯの違いも説明できなかった。そこからすれば、少しは成長したのではないかと思う。もう傍観者ではいられない。おうみ未来塾という補助輪ははずされた。これからは自力で走らなければならない。

最後に、私たちの研究活動に協力してくださった多くの方にお礼を申し上げたい。なかでもホホコミュニティーのみなさんには、例えは悪いが実験台となっていただき感謝の念に堪えない。そして、２年間お世話になりっぱなしだった淡海ネットワークセンターの事務局のみなさん、特に笹山さんには心からお礼を申し上げたい。

別紙　滋賀報知新聞　2005年3月11日

ネット結成で広がる保存活用の輪

県内外に残る近代遺産「ヴォーリズ建築」

NPO「ホホコミュニティー」（彦根市）など参加

今年はヴォーリズ来日100年

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（一八八〇―一九六四年）の来日百年を記念してひこね市民活動センター（旧彦根高等商業学校外国人教員住宅＝彦根市松原町）などヴォーリズ建築の保存活用に取り組む各団体が、「ヴォーリズネットワーク」を結成した。連携することで相互発展するとともに、より多くの人にヴォーリズ建築の良さを知ってもらうのが目的。同ネットは自由でオープンな連携を目指し、県内外に輪を広げたいとしている。

ヴォーリズ

会合では、ひこね市民活動センターの保存活用に携わるNPO「ホホコミュニティー」のほか、旧八幡郵便局の再生を進めるNPO法人「一粒の会」、安土町郷土館（旧伊庭慎吉邸）の安土町教育委員会、米原町醒井宿資料館（旧醒井郵便局）の米原町教育委員会、旧水口図書館（甲賀市）の稚木（わかぎ）の会、駒井家住宅（京都市）の日本ナショナルトラストが参加した。

確認事項としては、情報の相互交換や活動場所の提供など。また、ヴォーリズ来日百年記念の事業や「ヴォーリズ建築フォトコンテスト」（県建築士協会主催）への協力も検討した。

「ヴォーリズ建築フォトコンテスト」は、県内の美しい自然や町並みに溶け込むヴォーリズ建築を撮影した写真作品が対象。表彰は、大賞一作品（賞金十万円）、入選五作品（同一万円）、佳作十作品（同三千円）となっている。

被写体になる建物は、同コンテストの趣旨に賛同した団体が管理・運営する建物に限る。締め切りは四月十五日必着。五月に入賞作品を発表し、県内のヴォーリズ建築で巡回展を開く。詳しくは県建築士会（☎０７７―５２２―１６１５）へ。

ヴォーリズは明治四十年（一九〇五年）一月、県立八幡商業学校（現・県立八幡商業高校）の英語教師として来日した。以後、近江八幡市を拠点に教育や建築設計、伝道、福祉、企業など幅広く活躍した。

建築分野では、「建築の風格は人間の人格と同じく、その外見よりもむしろ内容にある」と唱え、関西を中心に国内外で千六百棟を超える建築を設計した。

ひこね市民活動センター（旧彦根高等商業学校外国人教員住宅）

Four Leaves

不登校・ひきこもり支援

Four Leaves グループメンバー

竹嵜　みき　　　　吉田　　　創

南井　良彦　　　　小田島　敦子

グループ活動の概況紹介

■研究テーマ

不登校・ひきこもり支援のあり方を考える

■問題意識

私達が未来塾で、とりくむべき地域課題として注目したいと考えたのは、子どもに対する地域のサポートということです。現在も子どもをとりくむ環境は厳しく、様々な問題が取り上げられています。一昔前の家庭内暴力、非行に加え、児童虐待、犯罪の低年齢化、薬物使用、路上でたむろする子ども達、不登校・ひきこもりなどです。

そうした子ども達の問題は、実は子どもたちだけの問題ではなく、我々大人の抱える問題の反映でもあるとの認識から、この分野で私達も何か出来ないかと考えました。その中で、FOUR LEAVESのメンバーの友人や周りにも、不登校・ひきこもりを抱えている人がいること、またある統計によると、滋賀の不登校児は全国でもトップクラスの多さであること、などから、不登校・ひきこもり支援に焦点を絞り活動していこうということにしました。

私達がこのテーマに取り組む活動のポイントは3つあります。まず、不登校・ひきこもりについて私たちの認識を深めること。そして、現在行われている不登校・ひきこもりの支援の実態と課題を掴むこと。最後に、フォーリーブスとして、また、長期的には個人として、このテーマに対して、何ができるのか考え、それを実行すること、です。

■メンバーの役割

	当初の役割分担	結局は？
○竹嵜みき	記録	ダイナミックなノート取り。連絡・調整役で力を発揮。
○吉田創	デジカメ撮影	一度もデジカメもってこず。当事者として強い味方。
○南井良彦	会計	毎回活動の方向性を饒舌に、熱く語ってくれた。
○小田島敦子	連絡	連絡もらう方が多かった。最後に文集でがんばる。

苦手な分野にも挑戦しようと当初はこのような役割分担になりましたが、だんだんそれぞれの個性・特長が出てきて、納まるところにおさまったようです。

■エピソード

関心が似ているという理由だけで集まった、年も性別も職業も活動歴・分野も異なる４人のグループ。さてどうなることやと思う場面も多分それぞれあったと思うが、結果的にはうまくバランスが取れて、動けたのではないかと思う。テーマ以外にも、それぞれのこれまでの活動分野や関心事について話を聞き、意見を交換する中で、そうでなかったら知り得なかった現実にも遭遇することが出来た。なによりも他の人から学ぼうという意識があったことが、無事１年を終え、相互理解を深めることが出来た理由であったように思う。今後も、それぞれの特性をさらに活かしながら、息の長い支援をしていきたい。

報告書目次

1.　活動一覧

私たちの１年の動きを時系列で一覧にしました。試行錯誤の後も見えると思います。

2.　テーマの絞込み・メンバーの思い

メンバー一人ひとりが、なぜこのテーマに関心を持ったか、を語ります。

3.　学習・フィールドワーク　－　不登校・ひきこもりってどういうもの？

自分達が、不登校・ひきこもりを正しく知らずして、このテーマは語れない。いろんなところに学習・ヒヤリングにいきました。　さて、見えてきたものは・・・

4.　中間発表

前半の活動をまとめました。書き出すということで、話しているだけではわからなかった認識のズレに気づかされました。不登校についての認識をメンバーの中で共有する良い機会でした。しかし、発表に対する運営委員のコメントは意外と厳しいものがありました。

5.　今後の展開討議　－　自分達に何ができるか？

ある程度フィールドワークを終えて壁にぶつかりました。さて、自分達は一体何がしたいのだろう。何ができるのだろう。次は、具体的にどのような支援を私たちのグループで、地域プロデューサーとして実践するかです。

6.　ウェブサイトの制作～卒業後の活動　－　「滋賀☆不登校ナビ」へ

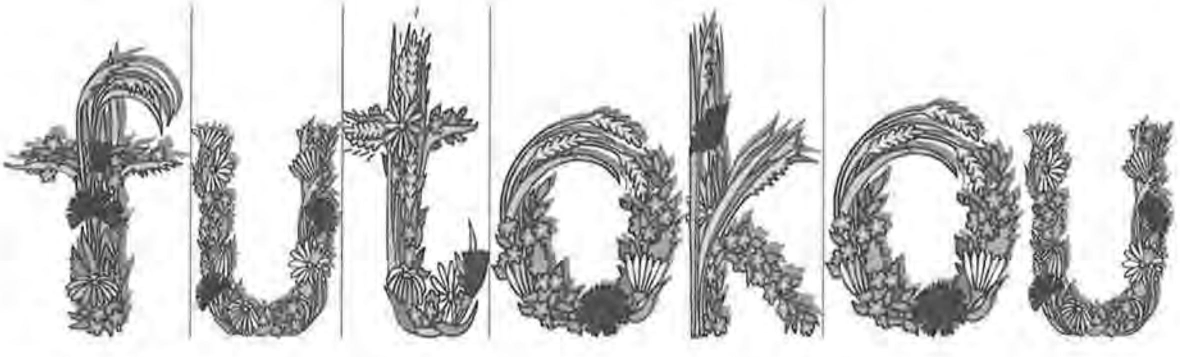
まずは、ＨＰを見てください。　http://4leaves.fc2web.com/

活動一覧

この1年こんな感じで、グループの人間関係をはかりながら、テーマについて考え、悩み、動きました。

4.11	草津まちづくりセンター	ミーティング― テーマ選定
4.16	草津まちづくりセンター	ミーティング― テーマ選定
4.25	草津まちづくりセンター	ミーティング― テーマ選定
4.29	草津まちづくりセンター	5期生全体でグループ活動計画発表
5.9	彦根	活動ヒヤリング ― サポートグループ「ホホコミュニティー」
5.22	キャンパスプラザ京都	「登校拒否・不登校を考える京都滋賀のつどい」参加
		講演『こころのサーモスタットがもし切れなかったら』&分科会
6.8	草津まちづくりセンター	ミーティング ― 『不登校』について見解討議
6.11	各自自宅	チャット会議 ― 意見交換
6.19	草津	活動ヒヤリング ― サポートグループ「Good-Heart 滋賀」
6.20	各自自宅	チャット会議 ― 意見交換
6.22	竜王	活動ヒヤリング ― サポートグループ「スペースwill」
6.29	草津まちづくりセンター	ミーティング ― 『不登校』について見解討議 サポート団体のまとめ
7.30	小田島宅	ミーティング ― 『不登校』について出版物などによる学習のまとめ
8.2	草津小学校	CAP講習会参加
8.11	県庁	行政ヒヤリング ― 県教育委員会学校教育課
9.1	石山	ミーティング ― 今後の進め方について
9.10	石山	ミーティング ― 今後の進め方について
9.22	石山	中間発表について ― 発表内容検討、担当分担
9.25	大津	「登校拒否・不登校を考える」大津・湖南研究会参加
10.4	南井事務所	中間発表について ― グループの不登校についての考え統一
10.8	南井事務所	― プレゼン資料作成、発表準備
10.9	南草津ふれあい交流プラザ	講演会参加 ― 『親子関係をみなおす』 加藤日出子さん
10.10	ピアザ淡海	中間発表
10.23	草津まちづくりセンター	ミーティング ― 今後の進め方について
11.6	栗東	スクールソーシャルワーク学習会参加
11.10	京都	活動ヒヤリング ― サポートグループ「アンダンテ」
12.1	石山	ミーティング ― 今後の進め方について
12.12	竹嵜宅	HP 作成
12.17	大津市生涯学習センター	ミーティング ― サポートグループリストアップ、取材先絞込み・分担
12.18	彦根	スクールソーシャルワーク学習会参加
12.18	大津	活動参加 ― 登校拒否・不登校問題滋賀県連絡会 親の会
12.29	京都	忘年会
1.10	石山	ミーティング ― 取材報告、担当再確認
1.15	栗東	スクールソーシャルワーク学習会参加

1.17	守山	取材　ー　親の会　サークル「ウェイブ」
1.19	石山	ミーティング　ー　取材報告、担当再確認
1.29	彦根	取材　ー　親子支援ネットワーク「ひだまり」
2.9	石山	ミーティング　ー　取材報告、担当再確認
2.16	石山	ミーティング　ー　記事のスタイル、ブログの使いかた
2.10	彦根	取材　ー　ＮＰＯメンタルリフレッシュスペース「いぶき」
2.14	大津	取材　ー　ＮＰＯ「カズン」
2.17	県庁	取材　ー　県教育委員会学校教育課
2.25	南井事務所	卒塾発表に向けて　ー　発表スタイル討議
2.26	大津	講演参加　ー　『社会的ひきこもり』　斉藤環さん
3.4	南井事務所	卒塾発表に向けて　ー　プレゼン資料作成
3.5	ピアザ淡海	卒塾発表　・　卒塾式　・　交流会



- MINORI -

テーマの絞込みに向けて～メンバーの思い

竹嵜みき

私自身が接点を持つ人の中には過去、不登校だった事があるという人も多く、その原因の所在ははっきりしていないことも多いのですが、早期に解決する必要があると感じていました。また地域の課題解決の為に活躍するプロデューサー的なテーマとしては、ニーズもあり、ぴったりだと考えました。グループ員全員が少しでも自分の活動と接点がある内容をテーマにすることで、最後まで高い興味を持って取り組めるよう、このようなテーマに設定したと思います。

吉田創

私はもともと身長が低く、こんな些細と思われる理由からもいじめを受けたりしてきました。加害者にとっては幼稚さゆえの「若気の至り」であるのかも知れませんが、私にとっては今なお心の中に住み続ける悪夢です。現代においても悩める少年は跡を絶ちません。成人した今の私にできることーそれはともに新しい思い出をつくることです。「あなたの代わりはいないんですよ。私と同様にね」

南井良彦

最近になって、複数の友人から、子どもの不登校で悩んでいるという話を聞くようになりました。私やその友人は、ちょうど子どもが小学校か中学校に通っているくらいの年齢層です。友人たちは、子どもの不登校に直面して、父親としてどのように対処していいのかわからず、まったく途方にくれている状態でした。不登校の問題で深刻な悩みをかかえている人が、私の周囲だけでもこんなにいるとすると・・・・・・。これはかなり深刻な課題となっているのかもしれません。
のかもしれません。

小田島敦子

日ごろから10代・20代前半の若者達のことですごく気になっていることがありました。それは家庭に居場所のない人たちのこと。残念ながらすべての親が責任ある態度で子どもに接しているわけではありません。不幸にして家庭の中で親の適切な愛情と庇護を受けることの出来ない子どもが、同じような境遇の子達とコミュニティーを作り、同じような人生のサイクルをまた繰返している。そんな彼らに何か出来ないかと思っていたわけです。Ｆｏｕｒ Leaves で取り組む不登校・ひきこもりは必ずしも親のせいではありませんし、事情は異なりますが、これを皮切りに、子ども達のこともっとしっかり知ろうと思っています。

学習・フィールドワーク

〜　不登校・ひきこもりってどんなもの　〜

このテーマについてのメンバー自身の認識を深めるため、また当事者支援につながる正しい認識を持つため、いろんなところにヒヤリングや講演会に行き、また出版物を読むなどの学習をしました。以下それぞれの見解をそのまま掲載(抜粋)します。

まずは、医療・教育の専門家はどのように考えているのでしょうか。

■　登校拒否・不登校を考える京都滋賀のつどい講演会＆交流会
『こころのサーモスタットがもし切れなかったら』
心療内科医師・スクールカウンセラー　明橋大二さん

不登校状態とはー

- 心身の疲れ(オーバーヒート)によっておきる。心身のオーバーヒートとは、人からどう思われているか気になる、気を使いすぎるなどによる、心身の過労、神経のつかいすぎ(不安が強い)、がまんのしすぎ等で、それはきわめて自然な、生理的な現象であり、生体の自己回復力のあらわれである。オーバーヒートが収まれば、自然と回路はつながる。
- もし、こころのサーモスタットが切れなかったら、精神疾患、自殺未遂、犯罪などにつながる可能性もある。医学的にはこちらの方が心配である。不登校さえも出来なかった、と語る子ども達もいる。
- 不登校に対する偏見：　わがまま、なまけ、甘え、逃げ、弱い。
  本当に我がままに自分を出せるのなら病気にはならない。そうではなく、ムリや背伸び、ありのままの自分が出せないから、病気になる。しんどいのに弱音を吐けなかった、がんばりすぎた強い人。

不登校への対応ー

- 犯人探しは良くないが、ある程度いきさつを把握することは大切。知ることで共感できる。でないと、学校がないときに不登校の子が元気な様子を見せると腹が立ってくることがある。今現在も悪影響を及ばしているもの(いじめなど)があれば、改善する。
- 疲れている子どもをこれ以上疲れさせない。傷ついている子どもをこれ以上傷つけない。不安な子どもをこれ以上不安にさせない。
- 非難、攻撃はしない。「お前のせいで・・・」、「お前は何も言ってもダメだ」
- 今以上を求めない。子供はこれが出来なくて困っている。それが出来ないあなたはダメといっているのと同じ。　もっと○○したら・・・　　もう少し○○したら？　　どうして○○しないの？　　いつになった○○するの？　外に出たら？　早く起きたら？　他の人は○○なのに・・・
- 肯定する。　こんなに□□の中、よく○○したね。頑張ったね。ご苦労さん。ありがとう。助かったよ。(以上、講義配布資料及び講演内容から抜粋)

■　交流会　1．明橋医師を囲んでの質疑応答　2．小・中学生の部　3．青年の部

(1 のグループでは、参加者の親や適応指導教室の講師からは次々と、個別具体的な質問が飛込んできた。2・3のグループでは、当事者や親などの切実な体験が語られた。質問者や出席者のプライバシーに触れることもあり、その内容の掲載は割愛する。)

不登校児の心理や学習面でのサポートをしている支援グループの方からお話を聞きました。

■サポートグループ「Good-Heart 滋賀」　代表　加藤日出子さん

応用心理士の加藤さんを中心に、心理カウンセリングや音楽療法
絵画療法、ゲーム、スポーツ、農作業、自然体験などを通して、
不登校・ひきこもり当事者、あるいはその親と子の関係の回復に
取り組んでいるグループです。
加藤さんは日本応用心理学会（日本で一番は早くからやっている
学会だそうです）に所属しているカウンセラーです。元々カウン
として仕事をされているのですが、滋賀の不登校支援が遅れてい
で、支援のグループを立ち上げたようです。他府県などでは不登
人が集まる場所（居場所）をつくったり、資金的に支援している
はまだまだ遅れていて、行政をプッシュする必要なのではという
もありました。
加藤さんのところで不登校の子は早くて1.5 ヶ月で元気になっ
体のメンバー数はあまり変化がない）そうです。まだまだ、医者も他の専門家も不登校の事はまだまだ理解していないので、その専門性のなさが、不登校・ひきこもりを長期化させている原因でもあるのでは、ということです。チキンと家族療法と精神療法をすれば、早く元気になってもらうことは可能、ということでした。

■スペースＷＩＬＬ　代表　松浦弘美さん

松浦さんは、もともと教師をされていましたが、退職後学習塾経営を始められ、そこに不登校に関する相談があったのがきっかけで不登校児童のサポートを始められたそうです。自分自身がこの問題に対応するためのスキルを身に付ける必要を感じ、３年間京都大学に通って心理学の勉強をされ、教育カウンセラーの資格を取られました。
現在は不登校児童数名のサポートを行っています。電話での不登校サポートについての問い合わせは多いけれども、事業所の交通アクセスが悪く、遠距離から来てもらうことは難しい状況があり、今後事業所の移転も考えられているそうです。
この問題に取り組むにあたり、滋賀県内の不登校サポートグループは自分でできる限り訪ねたそうです。サポート団体にも様々のものが存在し、なかには政治的、宗教的な背景があるものや、営利のみを目的にしているような、かなりいい加減なものもあるとの感想を述べられました。また、現状においてはサポート団体間の横の連携はほぼ無いといっていいそうです。学校、教育委員会にも何度も訪ねていき、最初はかなり否定的な扱いを受けたけれど、最近はようやく理解されるようになってきたということです。サポートグループの中には不登校における学校・行政の責任を問題にして、対立感情を煽るような活動をするところもあるけれども、松浦さんは、学校・行政といかに連携をとって活動をするかが大切だと考えているとおっしゃっていました。今後、スペース will としては、「子育て広場」の開催や、「花の苗の育成販売」等をコミュニティービジネスとして展開しながら、多角的にこの問題に取り組んでいこうと考えていらっしゃいます。

行政はどのような不登校対策を行っているのでしょうか。また、教育者は不登校をどのように見ているのでしょうか。

■県教育委員会　学校教育課　指導主任　辻　寿朗さん
指導主事　三原宏之さん

不登校児支援事業としてH１５年までモデル事業として取り組まれた、「メンタルフレンド派遣事業」と「森のオアシスセミナー事業」がある。

- メンタルフレンド派遣事業は、H１６年度からはスクーリングケアサポーター派遣事業として、県が市町村に委託している。研修を受けた大学生が不登校児の家に派遣され、彼らの話し相手となることで、不登校児の人間関係、信頼感、自信などを取り戻すことを目的としている。特に、不登校を経験し始めたばかりの小学生には有効なプログラムである。
- 森のオアシスセミナー事業も大学生が中心となって活動しているもので、子どもと親、あるいは子どもだけが泊り込みで参加し、自然体験とグループ交流などを通しながら、自らの心を開いていく、信頼醸成プログラムである。普段家から出ないでも、このプログラムを心待ちにしている子供もいる。

適応指導教室

県内２０ケ所ぐらいで（H１３年現在）、適応指導教室が設けられ、学校に行けない子供たちの相談、体験活動、学習補充を行っている。但し、その指導内容、充実度は各教室によりまちまちで、適応指導教室にもあわない子供も出ている。

別室登校

学校にはとりあえず行っているということで、親は別室登校だと安心するようである。但し、サロン的になっているところもあり、運営の仕方が肝要だ。また、別室登校用の予算があるわけではなく、授業のない先生、開いている教室でやっているのが現状である。学校としては、学級復帰が目的であるが、別室登校で卒業する生徒もいる。

不登校の原因

原因はばらばらである。たとえ原因を特定したとしても、その原因が解決しても、まだ学校に行けないケースもあったので、原因探しをするより、その子に自信・安心感を付けることの方が重要であると考えている

報告書

県では、H１４年に滋賀県公立小中学校児童生徒の不登校調査を行い、その結果を『不登校対応のために－不登校児童生徒の状況調査等の結果から－』にまとめている。

わが子が不登校になったということで、親も相当心労を負うようです。そんな親の心の支えとなっているのが親の会です。

■親の会
不登校の親の会は、自らの子どもの不登校を経験した親たち（多くの場合母親）が、その経験を活かして、現在同じような問題で悩んでいる親や、子ども本人をサポートしようと活動しているグループです。小さなグループが多く、私たちが知りえた範囲でも県内7グループ、他にもかなりの数が存在すると思われます。また、各サポート団体が、自らサポートしている子どもたちの親の会を結成しているケースもあります。子どもの不登校は親にとって、なかなか他人には相談しにくい問題です。どうしても、親の子育てや家庭環境の問題を指摘されることが多く、また親自身も自分で自分を責めていることが多いのです。その結果、親もこの問題を自分たちだけで抱え込んでしまうことが多くなります。私たちが参加させていただいた親の会の中でも、参加者が自分自身や子どもの状況を話しながら、思わず涙されるということが多くありました。親の会の中には、アドバイザーとして臨床心理士などの専門家とコンタクトを持っているところも多く、この問題で悩む親にとって、心情の共有の場であるということだけでなく、具体的なアドバイスも貰える場となっており、不登校のサポート活動の中でも、重要な位置を占めていると考えられます。

親の会の中には、その親たちがエンパワーして、外部向けの支援資料をつくるなど、活動の範囲を広げたところもあります。

■親子支援ネットワーク　あんだんて　代表　福本早穂さん

・不登校のタイプ
不安や恐怖による情緒混乱型　(この相談が最も多い)
学力の遅れ
家庭的基盤が薄い
非行や不適応行動などやんちゃな不登校
ＡＤＨＤ、自閉症など軽度発達障害をともなう不登校
・不登校理解のために・・・望ましい支援のあり方
行き渋り時期ー親子の葛藤の連続、親の自責
完全にいけなくなる時期ー親が学校に行けないことを認めるとき＝葛藤の末のあきらめ、
子供は学校に行けない自分を否定、周囲を気にして自分の存在を消す、ひきこもりの不安、周囲の目に気づく親の辛さ
外に向かう時期ー「待つ」ことの苦しさ、あんなに元気なのになぜ？　安心できる場所・人間関係
次のステップへ踏み出すエネルギーが湧いてくる時期ー巣立つ練習、学校へ戻ることがゴールではない。「ドタキャンは、自分の行動範囲を伸ばそうと努力し、図らずも限界範囲を超えたときの緊急的な帰巣行為です。」(あんだんて資料「親の立場からの支援ー不登校の理解と支援のために」抜粋)
このような不登校の認識にたつ「あんだんて」は、不登校時とその親のためのガイドブックをまとめ、相談機関や居場所、サポートグループの紹介を行っている。『京都発　不登校ガイドブック２号　ブロン・トン・トン』

心療内科や精神科の医師、心理カウンセラーによる出版物の多くは、非行や発達障害、学力不振などの要因ではなく、主に心理的要因で不登校になってしまった子どもたちに焦点をあてているようである。以下はその点を念頭に置いて、彼らが不登校をどのように見ているかをまとめたものである。

不登校児とは
逃避している子ではなく、逃避できない子であること－心のどこにも逃げ場ない苦しみと完全逃避の必要性
閉じこもるのは閉じこもれないからである－心の中に自分が落ち着ける部屋がない苦しみ
頑固ではなく、頑固になれない子どもである－影響されすぎる故の頑固さ
我がままではなく、我がままになれない子どもたちである－我慢とわがままの本当の意味を理解すること
結うことを聞かない子ではなく、聞きすぎている子であること－不安製造機と処理機について

ひきこもり
不登校全体から見て「社会的ひきこもり」までいたる例は多くないが、ひきこもりのきっかけが「不登校」であることは「ひきこもり」の6-7割にあたる。
問題がおきてから治療期間に相談に訪れるまでの期間が長い。

背景・要因
圧倒的に男性に多い。
両親とも高学歴で中流以上の家庭に多く、仕事熱心で養育に無関心な父親と、過敏で過干渉気味の母親という組み合わせが多い。周囲に優秀で勤勉な人間が多いことが、本人の負担・劣等感となっている。
家族の双方向的コミュニケーション不足。摩擦を恐れるあまり、自分を殺すような接し方をしている。その結果自分だけでなく、相手の心も殺させてしまっている。
自分という個を尊重するということは、必ず多少とも周りとの摩擦と軋轢とその調整を前提として、それが個を生きる証であるという自覚が不足している。あるいはそうまでしても「私」を生きることにどこか皆一抹の危機感を持っている。その危機感の場体はおおむね実態がはっきりしない「常識」や「人眼」とか、どうにでもかわる得体の知れないものなのである。

支援のあり方
その本人のより本来的な自分さがしの旅の道連れとなること。自分探しが感覚的にしっかりしてくると、初めて「自己決定」めいたものにまとまってくる。
心を閉じた人が話す、話せるためには、十二分に「話さなくてもいい」という安心感が伝わらないとダメ。「何か困っていることがあれば、何でも話してください」はとんでもない切り出し。のっけから困ったことを話せるのは相当健康的な人。本当に困っている人は、その相手が信用できるまで話さないのが普通。
「話すことの副作用」－今まで学校に関することをあまり話さないという形で自らの心の保存を図ってきた子が、「何でも話す」ことによってバラバラに拡散してしまう。再び自らを閉ざして、徐々に安定が得られるまで本人が得体の知れない不安を感じるのは当然。
原因探しは、子供に「わかってもらえた」という安心感が発生する限りとても援助的であるが、時として犯人探しになり、原因の持ち回り現象が起こって、結局子供にとって回復のきっかけを奪っているということもある。
不登校になるとわかっていて子どもを育てる親はいない。どの親もその子にとって良かれと思って教育している。母親が来談し、<私の教育が間違っていたのでしょうか？>と必要以上に自分を責め、それがこれからどうすればいいかという生産的発想に発展せず、逆に母親の緊張を増加させ、家中がその緊張に感染、膠着化することもある。

このようなフィールドワークや学習を重ねて、不登校に対する認識は深まってきました。しかし、一つの講演や活動を見聞きし、一つの文献を読んでも、その理解、受け止め方はメンバーの中で様々です。各フィールドワークの後に充分話し合って、共通の認識を重ねて来たつもりでしたが、実は意外にそこまで達していなかったことが、図らずも中間発表の資料作成準備のときに露呈しました。でも、これも活動のステップ！　ここでしっかり認識の溝を埋めていきましょう。完全にはムリとしても。

中間発表

■　不登校に対する認識の統一を図る

４人の話しあいの中で、主に専門家(医師、カウンセラー)の意見を反映した「不登校児」像と親・家庭のイメージをとり上げる者に対して、反対の意見が出た。県の調査や「あんだんて」の見解にもあるように、不登校の原因は実に様々で、また複数の要因が絡み合っていることもあることから、それを私達で限定的に取り扱うのは良くないのではないか、また、親や家庭に問題があったとしても、それを前面に出すことで唯でさえ傷ついている親を追い込むことになりはしないか、という危惧がメンバーから訴えられた。何か問題が生じた時、人は自然とその原因を知りたいと思う。何か事象が現われたとき、その背景を探りたいと思う。それは我々も当然の思考の動きだと思う。しかし、このテーマ、不登校・ひきこもりに関しては、それはあえて抑えなくてはならない衝動であること、それほどデリケートなテーマに取り組んでいるのだということを改めて認識した。医師やカウンセラーは、その著書・講演で、原因や背景に語ることは出来る。それは、彼らは専門家としてそれらを解明する責任があるからだ。しかし、個別具体的なケース・当事者を前にしては、彼らでさえ原因探し、親の責任追及は利益がないといっている。であるなら、当事者・親の支援を目指す、私たちはどうしたらいいのだろう。支援者としては無責任、無理解な態度は取れない。専門家のいう原因や背景についての知識は一応押さえつつも、自分達が他者に訴える時は、それらを特定するような言論は慎むべきなのだろう。話し合いでは、そんなところに落ち着いた。ですから、外部に伝えるプレゼンテーションの資料としては、説明不足と捕らえられるジレンマを抱えながらも、左のような内容になった。

我々が考える「不登校の姿」

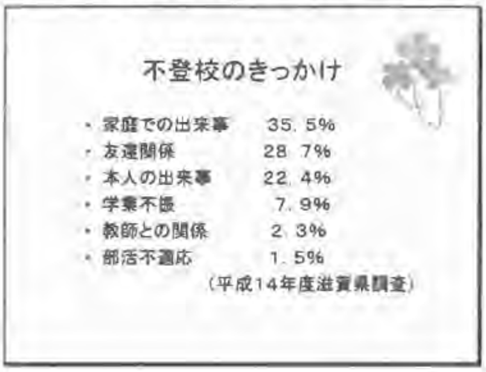
* 原因はさまざま
* 原因探し、犯人探しは意味がない
* 原因がさまざまなら解決方法もさまざま

■現状認識ー滋賀県の現状

では、不登校児とはどういう定義がなされているのかというと、文部科学省は、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくても出来ない状況にあるため、年間 30 日以上欠席した者のうち、病気や経済的理由によるものをのぞいたもの。」としている。

次に、滋賀県の現状であるが、H15 年全国調査によると都道府県別にみる不登校児の数で、滋賀県は全国ワースト 3 位の数になっている。つまり、小中合わせて 1000 人当たり 14.6 人の児童が年間 30 日以上欠席しているという現状である。不登校になるきっかけはというと、滋賀県が H14 年に行った調査では、家庭での出来事で 35.5%、次に友人関係 28.7%、本人の出来事 22.4%、学業不振 7.9%、教師との関係 2.3%、部活不適応 1.5%です。しかし、ここで注意しなければならないのは、これは学校側が取った統計であるので、どうしても学校の問題というより、家庭の問題が上位に来てしまっているということである。また、不登校が継続する理由ですが、同じく滋賀県の調査によると、不安などの情緒的混乱や無気力などが上位に上がっており、これだけで 70%ぐらいを占めている。不登校になるきっかけでは様々な理由があったが、不登校が長引く理由としては心

理的・内面的な要因が大きいことが分かる。



■不登校サポートにおける課題

県内の不登校に関するサポート活動を調査するなかで浮かび上がった不登校サポートにおける課題は次の二点である。

① 多くのサポート活動が存在し、その形態もさまざまであるが、相互の連携はほとんどみられない。
サポート団体には医療機関、カウンセリング機関、各種相談窓口、親の会、子どもの居場所、フリースクール、学習支援等様々なものが存在しているがそれぞれがバラバラに活動しており、相互の連携がほとんどない。連携をとり、それぞれの得意分野を活かした活動が行えれば、当事者にとって更に有効なサポートの展開が可能なはずである。また、不登校問題のより根本的な解決の方向性を求めるとき、サポート団体相互の情報交換を図るのは必要な行動ではないだろうか。

② 当事者が必要としている具体的な情報が当事者にとどいていない。
不登校の問題が起きてから、サポート機関等に相談するまでに長い期間が経っていることが多く、その間に問題を更にこじらせてしまっていることがよくある。確かに、昨今不登校の問題はマスコミでも多く取り上げられているし、不登校に関する書籍は数多く出版されている。しかし、当事者がサポートを必要だと考えても、実際に身近で利用することができるサポート機関が周辺地域にどのように存在しているかの情報を得ることができないでいる。その結果として、家族や自分自身の中に問題を抱え込んでしまうことが多くなっている。

■運営委員のコメント

このように、不登校理解と現状認識、さらにフィールドワークの成果を発表したところ、運営委員の方から、やはり「原因は様々だけでは分かりづらい」、「もっと議論を深めていくべきではないか」というコメントをいただいた。危惧していた通りだが、我々のジレンマをどう伝えたらいいのか、後半の課題にしよう。
もう一つ大きなコメントは、こちらも痛いところであるが、「この先何をしたいのかが良く分からない」というものだった。９月ぐらいから、何度も話し合いの場を持ってはいるが、同じことを何度もお互い話していたような気がする。具体的に次どうしたらいいかが見えず、討議ばかりしている感じ。行き詰まった原因の一つは、当事者になかなか会うことが出来ないこと。どのサポートグループでも、当事者に会わせるのは難しいらしい。デリケートな存在だから、いきなり第三者が行って不必要なことを言ったり、したりして、これまでのサポートグループの努力を無に帰すことを恐れているのだと思う。当然だと思う。他の面でもサポートグループとの連携は思ったほど簡単ではなかった。サポートグループの方でも素人が関わるのは嫌がるし、私達としても各々特色のあるグループにフルで関わるだけの勇気はない。そんなところで行きつ戻りつして数ヶ月が過ぎた。この先更なる迷いがつづくのか、方向転嫁が図れるか。一つの曲り角に達したようだ。

今後の展開討議

■まずは「動き出そう！」
中間発表後、今後のグループ活動の方向性についての議論を重ね、グループ内で最終的に確認したことは次のことである。

> 「不登校の問題に取り組もうとする私たちは、専門家のいう原因や背景についての知識は一応押さえつつも、現在悩みを抱えている当事者・親の支援のために、今私たちに何が出来るかを考え、まずはできる事から実行に移す。そして、その活動の中で私たち自身に見えてくるものを大切にする。」

■情報誌の作成
この認識を踏まえて、私たちにも展開可能な活動として浮かび上がってきたのが、「不登校に関する情報誌」の作成であった。
つまり、フィールドワークで浮かび上がってきた、滋賀県内の不登校サポート活動における課題

①多くのサポート活動が存在し、その形態もさまざまであるが、相互の連携はほとんどない。
②当事者が必要としている具体的な情報が当事者にとどいていない。

これらの解決のために、
県内で活動しているサポート機関の情報を一冊の情報誌にまとめ、それが当事者の手にとどくようにする。また、その作成の過程で、私たちが各サポート団体を取材する活動を通して、各サポート機関のネットワークの形成を図ろうということである。

親の会の活動に参加する中で、このような情報誌があれば便利であるという声は何度か聞いたことがあった。また、県内で親の会の活動をされている方々の中に、自分でこのような情報誌を作成してみたいという意欲をもった方もいらっしゃるようだ。しかし、なかなか実際の活動に一歩足を踏み出すには至らないようである。このような情報誌は京都ではすでに『京都発不登校ガイドブック』として発行されている。また先述した京都のNPO親子支援ネットワーク　「あんだんて」がそのパート2として『京都発不登校ガイドブック２号　フロン・トン・トン』を出している。

■親子支援ネットワーク「あんだんて」からのアドバイス
滋賀県で不登校の情報誌を作りたいという私たちの思いを、親子支援ネットワーク「あんだんて」のみなさんに伝え、山科の「あんだんて」の事務所で、情報誌を作るにあたってのアドバイスをいただいた。
次のようなものである。

○ 情報誌の作成のためにはある程度の編集のスキルを持っていたほうがいい
「あんだんて」のみなさんはそのための講習を受けた
○ 発行のための費用、印刷費に関しては、広告料収入でほぼまかなうことができた
○ 情報誌は一定の価格で販売しており、その収入をもって活動費用に当てることができる
○ 発行にあったって多くのマスコミが取り上げてくれた
○ 当事者のサポートの観点からすれば、取材活動は当事者の親が行い、当事者の立場からの情報を提供するのがいい

その他にも具体的で有益なアドバイスを沢山いただいた上に、今後も出来ることは協力しますという暖かいお言葉を頂戴した。不登校の問題に取り組もうとする私たちの姿勢を今一度正される、有意義な時間となった。

■路線転換　～情報誌の作成からウェブサイトの制作へ～
いよいよ、私たちも「滋賀版」不登校情報誌の発行に向けての動きを始めようとする。しかし、ここでメンバーから出た一つの指摘から、情報誌の作成という活動の方向性は新たな路線転換を迎えることとなる。
その指摘とは、「情報誌の作成と同時に、発行した情報誌の存在を当事者に伝え、当事者の手元に情報誌が届くしくみを考えておく必要がある」ということである。
そこで、子どもの不登校に直面した親が実際にどのような方法で不登校に関する情報を集めようとしているのかを考えてみた。そこに浮かび上がってきたのがインターネットの利用である。子どもが小学生、あるいは中学生になろうとしている親の年齢は３０歳代～４０歳代くらいかと考えられるが、この年齢層の場合、現在では、何かの情報を探すときに、インターネットの検索エンジンを用いるということが一般的になってきている。実際に数人の当事者からも、インターネットを用いて情報を得ようとしたという話を聞くことができた。そこで、今回発行する情報誌に関するホームページをインターネット上に制作することが望ましいということになるが、ならばいっそのこと、そのホームページを用いて不登校サポートに関する情報発信を行った方がいいのではないかと考えるようになった。このようにして、いったんは情報誌の作成に向かおうとした我々の活動は、インターネット上に「滋賀版」不登校情報ウェブサイトを制作するという方向へ若干の路線転換をすることとなる。

インターネットのウェブサイトを用いて情報発信することのメリット(デメリット)には次のようなものが考えられる
○当事者がインターネットの検索エンジンを用いて検索したときに、たとえば「滋賀」　「不登校」というキーワードで検索したリストの上位にあがれば、このウェブサイトを閲覧してもらうことが可能となり、情報をダイレクトに伝えることができる
○不登校のサポート活動の場合、特に小さなグループは活動の形態が常に変化するため、情報を常に新鮮に保つことが大切である。ウェブサイトの場合、掲載内容の更新が簡単であるため、しっかりとしたメインテナンスさえしておけば、常に新しい情報を掲載することができる。しかし、そのためには継続した取材体制の確立と更新作業が不可欠となる。
○サポート機関の中にもホームページを持つところが増えており、相互リンクをはることによって、多くの情報に当事者が容易にアクセスすることが可能となる
○制作費用があまりかからない。しかし、逆に販売による収益が見込めず、広告料収入を得るためには新しいノウハウが求められる。

ウェブサイトの制作 〜 卒業後の活動

■未来塾卒業後の活動

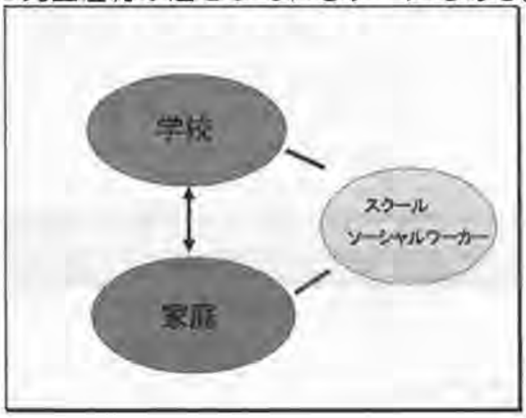
このような方向転換を経て、私たちは不登校情報のウェブサイトの制作に向けた取材活動を開始することとなった。未来塾の卒業は3月の初旬である。しかし、それまでに十分な取材活動を行い、このウェブサイトを完成させることは時間的に不可能であったし、そもそも、一度ウェブサイトを立ち上げた以上、継続して取材活動、更新作業を続けていく必要がある。その時に問われるのが、私たちフォーリーブスのメンバー一人ひとりが未来塾の塾生としての2年間が終わったあとも、継続してグループとしての活動を続けていく覚悟があるかどうかである。このことはグループのミーティングでもたびたび話題になった。その中で、メンバーの全員が今後も不登校という課題に対する取り組みは何らかの形で継続していきたいと考えていることがわかった。更に、それぞれが仕事を持ち、また学生としての立場があったとしても、熱意さえ失うことがなければ、時間の許す範囲で取材活動をしながら、協力してウェブサイトの管理運営につとめることはできるはずだし、ぜひそうしたいというお互いの意思を確認するに至った。

■現在「滋賀・不登校ナビ」制作中

このように、未来塾の卒業後も私たちはグループとしての活動を継続していくことを確認した。その結果、未来塾の卒業式、そしてそこでの研究発表はフォーリーブスにとってひとつの通過点にすぎないこととなった。実際に卒業式は3月5日であるが、取材活動は2月〜3月にまたがり、できれば4月1日をウェブサイトの正式発足日として位置づけることとして、取材活動を進めている。滋賀版不登校情報ウェブサイトの制作はまさに現在進行形である。グループでの協議の結果、このサイトの名前を「滋賀・不登校ナビ」をすることとした。私たちが制作する滋賀版不登校情報サイト「滋賀・不登校ナビ」それ自体が、グループメンバーが未来塾卒業後も互いに連絡を取り合いながら、継続して活動を続けていくための、よい意味での求心力を与えてくれる存在となることを期待している。このレポートの文末に、現在制作途中のウェブサイトの一部を紹介する。ぜひ一度実際にアクセスしていただきたい。

スクールソーシャルワーク

ウェブサイトの制作とは別に、私たちフォーリーブスが今後の活動の中で目指そうとするひとつの「かたち」として、スクールソーシャルワークの考え方がある。本来のスクールソーシャルワークの理念とは少し捉え方が違っているのかもしれないが、不登校の現場となる「家庭」と「学校」を結ぶために、なんらかの第三者機関の存在が必要ではないかと私たちは考えている。いったん子どもの不登校が起こってしまうと、「家庭」と「学校」の間に一種の緊張関係が生じることが多い。「家庭」のほうからすると、子どもが学校に行けないのには、「いじめ」などなんらかの学校内の問題があるのではないかと疑いやすいし、「学校」の側からすると家庭内に問題があるのではないかと考えやすく、実際に児童虐待が起こっているケースもある。そのために「家庭」と「学校」のあいだに不信感が生じるのである。そこで、学校（教育委員会）から独立した機関として、子どもの視点に立って「家庭」「学校」双方を見つめ、子どもの立場から家庭と学校を結び、問題解決の方法を探ろうとするスクールソーシャルワーカーの存在が求められていると考えるのである。



今後私たちフォーリーブスが「滋賀・不登校ナビ」の取材、運営を進めると同時に、自らのスキルを高め、いつかスクールソーシャルワーカーとしての役割を担えるまでに成長していくことを目指したい。

滋賀*不登校ナビ！滋賀県の不登校・ひきこもりの支援に関わる活動を応援しています。

top

滋賀県の不登校事情　相談窓口各種情報　サイト運営者

関連用語集　　　　リンク集

私たちは滋賀県下で不登校・ひきこもりの方々・その方々に
関わる方々に対する支援活動の一つとして
県下の有益な情報を発信したいと考えます。

少しずつですが、県下の支援グループ等に取材を行い
随時ＵＰしていきます。

（取材希望のグループがありましたら、メールにてお知らせ下さい。
自薦・他薦を問いません。

戻る

おことわり…
不登校・ひきこもりという言葉については、抵抗のある方もおられるかと思います。
様々な解釈や表現の仕方がきっとあるのでしょうが、ここでは一応、
一般的な表現の一つとして、不登校・ひきこもりという言葉を使っています。
ご覧下さった方ご自身の判断で解釈して下さいますよう、よろしくお願いします。

滋賀・不登校ナビのトップページです。

http://4leaves.fc2web.com/

滋賀*不登校ナビ！滋賀県の不登校・ひきこもりの支援に関わる活動を応援しています。

相談窓口各種情報

民間サポートグループ 親の会 進路・学習支援 行政窓口 心理・医療関係の相談機関 電話相談	滋賀県下には様々なサポート機関があります。 状況に応じて選択しやすいように、分類してみました。 中には不登校・ひきこもり専門のサポート機関ではない ところも含んでいますが、本人にとって有益なサポートに なると思われるところは対象機関として挙げています。

相談窓口各種情報のページです。

このページから種類別に分けられたサポート機関のリストを見ることが出来ます。

滋賀*不登校ナビ！滋賀県の不登校・ひきこもりの支援に関わる活動を応援しています。

民間サポートグループ

取材先一覧
ＮＰＯ法人カズン　メンタル・リフレッシュ・スペース「いぶき」

ＮＰＯ法人カズン 電話相談他	住所　：〒５２０－０８５４　大津市鳥居川町１６－２０　大津あいあい保育園内 ：０７７－５３７－５９２２ 代表者：谷口久美子 ＵＲＬ http://www.casn.org/ メール ：info@casn.org 会員数：７０名 ＊ご注意＊　上記事務局はスタッフが常駐している活動の拠点ではありません。お訪ね になる場合は活動場所など、詳細をお電話で確認の上お出かけ下さい。
NPO 法人 メンタルリフレッシュ スペース「いぶき」 学習支援他	住所　：〒522-0063　滋賀県彦根市中央町 4-32　最寄駅　JR[彦根駅]徒歩 ：　0749-21-2302　ＦＡＸ兼用 代表者：瀧沢　美紀 URL　：http://www8.ocn.ne.jp/~ibuki メール　：mr-ibuki@muse.ocn.ne.jp 設立年度　平成１３年５月在籍者数　１０人 ＊ご注意＊　月、火、木、金　10:00～15:00 利用時間内に、お電話でご連絡の上、お出かけ下さい。

民間サポートグループ紹介のページです。
グループ名をクリックすれば、私たちがそのグループを取材した内容を掲載したページを見ることが出来ます。
今後の取材活動の進展とともにコンテンツを充実していきます。

参考文献

パワーアッププランニング　『京都発　不登校ガイドブック』　2000.9

あんだんて　『京都発　不登校ガイドブック２号　プロン・トン・トン』　2003.4

斉藤環　『若者の心のＳＯＳ』ＮＨＫ人間講座　2003.8−9 放送

斉藤環　『社会的ひきこもり　終らない思春期』　ＰＨＰ新書　1998.12

滋賀県教育委員会　不登校児童生徒学校復帰支援対策委員会
『不登校対応のために−不登校児童生徒の状況調査等の結果から−』　2003

関口宏　『ひきこもりと不登校　心の井戸を掘るとき』　講談社＋α新書　2003.12

増井武士　『不登校児から見た世界−ともに歩む人々のために』　有斐閣選書　2002.5

森下一　『不登校児が教えてくれたもの』　グラフ社

春日井敏之・高垣忠一朗　『不登校支援ネットワーク』　かもがわ出版

冨永祐一　『不登校　親の心配、子の不安』　筑摩書房

森口秀志　他　『ひきこもり支援ガイド』　晶文社

おうみ未来塾 5期生の学びの記録
(個人のページ)

シンク『環境』コミュニティG

荒川　茂美……104P
井上　春雄……105P
岡本　胤継……106P
竹谷　利子……107P

まなぶくん

川北　泰伸…108P
斎藤富士夫…109P
中嶋　　守…110P
西澤　　勝…111P
邉見千惠子…112P

応援志隊

伊藤久美子…113P
小久保　弘…114P
阪口　博司…115P
曽根　真紀…116P
林　　龍史…117P
山田　幸子…118P

Four Leaves

小田島敦子……119P
竹奇　みき……120P
南井　良彦……121P
吉田　　創……122P

氏　　　名：荒川（あらかわ）　茂美（しげみ）

活動グループ：シンク「環境」コミュニティG

入塾時の動機

豊富な知識や高い目標、様々な考え方を持った人たちと出会い、多くのことを吸収することで、私自身もレベルアップし、現在の活動の一歩前に進むきっかけになると考えて応募しました。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

地域の問題を発見し、解決策を考え、行動を起こせる人。たくさんの人を巻き込み、一緒に汗を流しながら事業を起こしたり、連携をとりながら活動を進められる人。

Q２．この２年間でどう変わった？

さあ…？成長したかなぁ。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

フィールドワーク。織田直文先生の説明を受けながら、彦根の商店街を見て歩き、店主さんの話を聞いたことや、藤井絢子さんの講義の後、新旭のBDFの現場を見たこと。話を聞くだけでなくフィールドを見て回ると、まちの息づかいが垣間見えて街の印象が深くなる。それと、４期生の講義に出席した、大歳さんの高知県馬路村の特産品・柚子の商品開発の話はおもしろかった。人を引き込んでいく話し方に聞き惚れ、おもわず柚子のセットを通信販売で注文してしまいました。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

たくさんの人に会いましょう。たくさんの活動を知りましょう。

Q５．これからどうする？

この２年間が、すぐに反映されなくてもどこかで生きてくると思って、自分の活動（子育て支援）を続けていきます。

氏　　名：井上（いのうえ）　春雄（はるお）

活動グループ：シンク「環境」コミュニティG

入塾時の動機

未来塾１期、２期の発表が大津市生涯学習センター（膳所本丸町）でありました時から、未来塾に一種望みがありましたので、入塾の提出を致しました。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

コミュニティやコミュニティに存在する人々は、それぞれ社会的に種々経験の累積があり、多様化しています。如何に感性やネットワーク構築する必要があります。

Q２．この２年間でどう変わった？

昨今は、①「環境」に伴う「異常気象」に関する問題と、②滋賀大学教育学部に３回／週受講に行っております。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

長浜市街（辻川作男さんの講師で）散策、国民宿舎で夜交流会があり、先輩たちと知り合いになり、さらに翌朝川北くんのあしなが学生の会の話が聞けたことが大きな記憶として残っています。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

情報化時代と、犯罪の多発化、低年齢化の関係か、世情に人間的な感情が薄れつつあります。人間関係も大切だが、この辺の改革が必要ではないでしょうか！

Q５．これからどうする？

『大いなる時の流れに、流れ行く、我が足跡の覚束なさよ！』

老いて益々盛んに、「学ぶ」にチャレンジしていきたい。

氏　　　名：岡本（おかもと）　胤継（たねつぐ）

活動グループ：シンク「環境」コミュニティG』

入塾時の動機

休耕田を活用した「田圃の学校」や「森の学校」を核とした地域作り、青少年やシニアを募集し相互交流を促す学習機会創出など「環境」を視座においた「まちづくり」が可能です。地域の特性を生かした「地域活動」を構築して行きたいと思います。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

地域の人材をネットワークしコーディネーターとしての働きを兼ねた存在。

Q２．この２年間でどう変わった？

環境教育についての実践活動と社会教育（生涯学習）の実践活動を重ねる事ができた。この結果、以前よりも広い視野で物事を考えることが出来るようになれた。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

彦根や長浜でまちづくりの実践活動を見学した事が印象に残っている。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

卒塾後の研究会活動や研究会の存在があれば良いのでないか。

Q５．これからどうする？

①財団法人奈良市生涯学習財団「奈良市生涯学習センター」で地域活動指導者養成講座を開催する。
②「環境教育指導者養成講座」を（特活）総合教育研究所主催で開催する。
（特に PLT、PW、PWET、GEMS）
③「奈良県環境フォーラム自然環境分科会」「奈良環境ネットワーク」の一員として、環境改善へ向けての実践行動を積み重ねる。
④奈良市左京地域での環境講座やこどもエコクラブ活動、里山保全活動などを行う。
⑤さらに学習を積み重ねる。

氏　　　名：竹谷（たけたに）　利子（としこ）

活動グループ：シンク「環境」コミュニティG

入塾時の動機

地域の子どもたちが、「ふるさと草津」をよく知るために、子どもたち自身が自発的に企画・計画・実行できるような事業の実施や、団体の立ち上げをサポートしたい。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

よりよい地域を創るために、その地域の地域らしさ、個性などを見出すとともに、問題点・課題点も発見し、地域住民とともに解決案や方策案を練り、そのために動く人。実際立ち上がらなければ、動かなければ、動かさなければ、地域プロデューサーとは何かが分からないと思う。そして、ただ単に動くのではなく、いかに動くか、いかに動かすかのノウハウを身につけてないと、無駄な動きにとどまってしまう。未来塾ではこのノウハウを学ぶための場所だったと思う。

Q２．この２年間でどう変わった？

どう変わったというより変わりつつ（今さら何ですが）成長し続けたいと思う。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

彦根の街を歩き、「まちづくり」に触れたこと。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

事業を興すにも、団体活動を進めるにも、日々の実務をこなす人材が必要だと思う。未来塾の卒塾生は１００人ぐらいだと聞いている。なら、それに近い実務をこなす人間の養成も必要ではないか。お互いの仕事を理解してこそ、地域プロデューサーも活きるし、よりよい地域社会がうまれるのではないか。未来塾では、実務者養成も考えて欲しい。

Q５．これからどうする？

未来塾で学んだこと、新しくできた人の輪、知恵の輪を広げ、私の現在の仕事（NPO法人おうみ NPO 政策ネットワーク）の事務局長＝実務型人間をし続けたい。首になることはあり得るかも知れませんが。おうみ NPO 政策ネットワークは、中間支援型NPO です。これからもよろしくお願いいたします。

氏　　　名：川北(かわきた)　泰伸(やすのぶ)

活動グループ：まなぶくん

入塾時の動機

　滋賀県にある大学とその大学がある地域との結びつきを深めるような活動がしたい。京都に比べて滋賀県の方が地域にとって大学が遠い存在に思えたからです。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

　地域をおもしろくする仕掛け人

Q２．この２年間でどう変わった？

　「こんなんやったらおもしろいんちゃうん！」ってのが少し具体的なイメージで描けるようになったし、地域を活かすという視点で物事を見られるようになった。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

　みんなで話をしたり、作業をしたり、お酒のんだりしたこと全部が、ボクにとっては心に残っていて、みんなの大人な姿をみて、まだまだ自分は子供で未熟だなぁと、自分の幼さを突きつけられたような気がした。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　目指すべき地域プロデューサー像とか、身に着けてほしい力とか、がより明確であればいいと思う。それがはっきりしていればいるほど、勝手に中身は決まってくるのではないでしょうか。

Q５．これからどうする？

　コミュニティー本屋を開きたい（妄想　笑）。春から社会人になる（はず）予定で、新しいフィールドに行くけれど、なんらかの形で地域とつながりをもって地域に還元できないかという視点を心に留めながら、まずは学生から一社会人になろうと思います。

氏　　　名：斎藤（さいとう）　富士夫（ふじお）
活動グループ：まなぶくん

入塾時の動機
　会社人間…生きがいとは何か…それは「学びを通した自己実現」！　学んだことを生かせる生涯学習を通した住みよい町づくりを念頭に、塾生期間に私自身のステップアップができればと入塾した。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

　目標達成のための高いマネージメント能力を持った人で、事業活動ができる人。淡海ネットワークセンター木村さんの投稿から「アマチュア精神のボランティアだけでなく、事業をつなぐプロフェッショナルな経営感覚を持った社会企業家・市民企業化」……これぞ地域プロデューサー。

Q２．この２年間でどう変わった？

　人とのつながりが沢山でき、視野も広がった。特に研究活動の中で「滋賀の生涯学習社会づくり推進協議会委員」に任命され、県教育委員会との関係ができたことは、自分自身のステップ・アップとなり活動の範囲も広がった。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

　湖南市で開催された湖南市民塾で「まなぶくん」グループの研究成果を発表し、参加者と意見交換をした中で、学びたい人と教えたい人をつなぐ役割を持った団体の必要性を再認識した事。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　私のような会社勤め（会社人間）の人の参加が増えるようなＰＲをして、企業での経験やビジネスセンスを地域で活かす。これから定年退職者が急増するなか、社会参加、地域活動湖南市で開催された湖南市民塾で「まなぶくん」グループの研究成果を発表し、参加者と意見交換をした中で、学びたい人と教えたい人をつなぐ役割を持った団体の必要性を再認識した事。のコアになる人材育成には、おうみ未来塾は最適なところ。

Q５．これからどうする？

　生涯学習を通した町づくりをこれからも具体的に進める計画です。
Think globally, act locallyの教えのように、湖南市での生涯学習任意団体「湖南まなびすと（旧甲西まなびすと）」での活動を通して町づくりにかかわっていく事と、滋賀県下の生涯学習関連団体との交流、全国生涯学習まちづくり協会を通した全国の生涯学習関連団体との交流などを通して、「～生涯学習で飯が食える～」事業展開を考えたい。

氏　　　名：中嶋（なかじま）　守（まもる）

活動グループ：まなぶくん

入塾時の動機

地域課題に関心を持ち、時代が激変する中、課題は多種多様です。地域の特性をいかした、まちづくりを住民主導の自治会および各種団体等、未来塾で「地域プロデューサー」をめざして、今後地域で活動したいと思います。

Q1．あなたの思う地域プロデューサーって？

住民が自主的な学習、活動していけるような仕掛けづくり。住民が楽しい、明るい、助け合える、また、歴史文化を大切にしながらのまちづくりを推進すること。

Q2．この2年間でどう変わった？

多くの人と出会い、意見交換又講演を聞いて住民主導のまちづくりをしなければならない一方、行政が地域活動に積極的にかかわり、いかに協働してまちづくりを進めるか。行政の役割を抜本的に見直して頂きたい。

Q5．これからどうする？

自治活動を通して、乳幼児から高齢者まで地域で住みよい環境づくり、まちづくりに貢献していきたいと思います。

氏　　　名：西澤（にしざわ）　勝（まさる）
活動グループ：まなぶくん

入塾時の動機
　これからの晩節、有意義で実りある人生を送りたい。自然に恵まれた滋賀県に生まれ育ったことに感謝しています。このすばらしい滋賀を後世に引き継いでいくために少しでもお役に立ちたい。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

　地域の問題を発見し、解決のための方策を考え、そのための運動や事業をおこすことが出来る人であり、おうみ未来塾の基本理念のとおりです。
　それをすることが出来る人は、特に市民活動においては、強いミッション（使命感）を持ち合わせた人である。ミッションは意識して奮い立たせるものでなく、自然に体中からほとばしるものである。自分を省みて人間改造（人格改造）が必要だとつくづく思う。

Q２．この２年間でどう変わった？

　市民活動に無関心だった私がそれに生きがいを求めるにいたりました。
「井のなかの　かわずとおなじ　我が思い」
　これからも多くの人生経験を積んでいきたいものです。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

　塾長、運営委員の皆さんの講話、講評すべて心に残っています。特に塾長のチョウチョの話、北村先生の解りやすいお話です。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　講義、行事の塾生の出席率が低いですね。いい考えありませんかね？
　自由な身の私と違い、職に就き実践活動もされていますし、また、活動されている人ほど忙しく、そういう人こそ地域プロデューサーとして求められる人だし……。
　今後の研究テーマに期待します。後輩のみなさん、宜しくお願いします。

Q５．これからどうする？

　これからの活動分野は自分の経験を生かせる環境に決めました。水、河川、減災、景観、里山等どれもやりたいことばかりです。環境を考えるとき、去年の地震、津波の災害を見てもグローバルな展開が必要だと強く認識しますが、身近なところから「環境の保全」のために人間と自然の適度のかかわり方を求めて実践することにします。

氏　　名：邊見（へんみ）　千恵子（ちえこ）
活動グループ：まなぶくん

入塾時の動機
　大津市に本部事務所を持つＮＰＯ法人ヒマラヤン・グリーン・クラブの理事としてパキスタンで植林・教育・医療等の活動をしているが、現地の荒野を見て日本の身近な里山保全の重要性を認識し、その活動をするため。

Ｑ１．あなたの思う地域プロデューサーって？

　広い視野に立脚し、深い愛地球心で（愛国心なんて狭い心でなく、国境のない思考で）物事をとらえ、地元に地脈、人脈があり濃う努力と、人望のある人。

Ｑ２．この２年間でどう変わった？

　滋賀県の人々の一見、地味に見えるが静かな、だが深い情熱を持つ人々に出会い大変うれしかった。近畿の大切な水甕である琵琶湖を持つ滋賀を中心に発信する行動に自信と希望を持つようになった。

Ｑ３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

　藤井絢子師の菜の花プロジェクト。こんなすばらしい活動家が存在したのかと驚き、また、そのプロジェクトの目指すところと取り組む姿勢、協力者やすそ野の広がりにも感動しました。

Ｑ４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　町作りの長浜や彦根の見学、菜の花プロジェクト等の講義や現場見学をするだけでなく、それらの取り組みに参加する場面、日程を取り入れてほしい。

Ｑ５．これからどうする？

　残念ながら滋賀県在住ではないので、とりあえず自分の地元（長岡京市）で自分の持ち山（里山）をベースに、地元のウォーキング仲間、山の仲間、自然大学の仲間、友人等の集合体を作り、山の樹木の間伐等、自然を守る活動をしたいと思います。

氏　　　名：伊藤（いとう）　久美子（くみこ）
活動グループ：応援志隊

入塾時の動機
　おうみ未来塾の特徴である、課題の発見から実践に結びつけること、幅広いネットワークの形成をめざすことは自分にとって最も必要であると考えました。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

ずっと住んでいたくなるようなまちづくりの仕掛け人

Q２．この２年間でどう変わった？

理解してもらうために努力するようになった

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

岸田さんの講座

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

いつまで塾を続けるのかしら？ふと思った

Q５．これからどうする？

いろんな方からのアドバイスを自分の中で消化しながら実践していきたい

氏　　　名：小久保（こくぼ）　弘（ひろし）

活動グループ：応援志隊

入塾時の動機
　時代は変わりつつある。大企業と中央行政府主体で動いてきた旧来スキームは限界が見えてきた。私自身の周辺も、大きく変貌しつつある。職縁社会と言われる会社生活からまさに、地域への軸足変更が必要な時期、「新しい縁、つながり」をこの入塾で、創り出せることを期待したい。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

　日本が大きな縮退の時期に差し掛かってきている。従来の大企業という単細胞的集団が日本全体を押し上げていき、団塊の世代を中心の豊富で、意欲のある集団がそれを支援する姿が消えていく。その解決の一つとして、地域の活力アップが必要となっている。地域の特性を体験を通して理解し、地域の知恵を具現化し、地域の住民とともに、新たなる解決策の提示とその実施を図る。単なるボランティアでは、地域の地盤沈下は防げない。新たなる人、物、金の流れを創り出していく地域ベンチャー。「一人の人が、月１０００円ほどの新しい価値を生み出せば、日本全体で、年間１兆円以上の新たなる価値を生み出す」そのように人になりたいものです。

Q２．この２年間でどう変わった？

　応募書の内容を読み返すと現時点での意識、行動の面では、ほとんど変わっていない。この変わっていないことが、問題。知識は大分深まり、広がったようではあるが、形にまで進化していない。現状を見る限り、滋賀と京都でのＮＰＯで、少し具体的な業務展開が出来た程度であり、志賀町での、地域活性化については、１年ほど前から進めつつあるが、いまだ計画案のまま。その実行には、大いに反省すべき点が多い。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

　会社と言う組織体での３０数年とは、まったく対極にある完全民主的組織での活動は、良くも悪くも、別次元の世界。特に、資金、飯の種を意識しないような行動は、いまだ理解できず。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　ＮＰＯ法から、すでに６年経ち、また、最近の加速する日本縮退の環境は、単に、ＮＰＯ（単にボランティア的な集まりであっても）を作り出す時代から、「地域力を生み出すＮＰＯとなるべく行動する」時代へとＮＰＯ自身が変り目に来ているのではないだろうか？　その点からも、もう少し時代の要請にあったやり方、手法も必要なのでは？　また、今回のテーマは皆、大きな課題であり、その真剣さは理解してもらったようだが、以前までの、やや趣味的なテーマを、１年間グループでやることには、未だ疑問が残る。
　例えば、ＮＰＯｓＮＰＯとして活動しているＣＳ神戸、みやぎ・せんだいＮＰＯセンターグループで、インターシップするのも１つでは。（滋賀県内のどちらかと言えば身内の中で、実践するのでは、新たな地域課題を見出す眼は養われないのでは？また、マネジメント力を養う点でもある程度組織のしっかりしたグループでの体験も重要）また、コミュニティビジネス講座を少し体系的に、体験コースとは別に、継続的に実施出来ないのか？単に、現地視察、概念的講義では、メンバーのスキルアップにはつながらない。

Q５．これからどうする？

　まずは、形に。うだうだ、理屈をこねても、結果が出なければ意味が無い。これは、ビジネスの世界でも一緒、今までも、何回と無く、若いメンバーに言ってきた事か？？？　それなのに、それなのに…。未来塾生は、口ばかりのが多いと、良く聞かされました。実際、そうかも…。そうならないように、頑張ります。

氏　　名：阪口（さかぐち）　博司（ひろし）

活動グループ：応援志隊

入塾時の動機
　私の社会人生活は、「空白の１０年」とだぶっている。いままでの仕組みが通用しなくなっているのに変わろうとしない社会にいらだっていた。でも、いらだっているだけで何もしていない自分に気づいた。自分の身の回りで起こっていることを何も知らないことにも気づいた。何からはじめればよいのか。そんなときに、未来塾の存在を知った。志を同じくする人と切磋琢磨し、自分の中に化学反応を起こしたい。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

　現場に立ち、問題を発見し「こういう事ができたらいいな」とイメージできる能力を持つ人。その実現のためにキーマンを探したり、育てたり、人をけしかけたり、いっしょに汗をかける人。嗅覚に優れ、想像力豊で、

Q２．この２年間でどう変わった？

　世代や背景の違う多くの仲間と知り合うことができ、どんな人に対しても敬意を持って接することができるようになったことは成果だと思う。しかし、成長したかと問われれば、ほとんど変わっていない。頭でっかちは前から変わらないし、実行力は相変わらず足りない。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

　自分で企画したサブ講義は参加者は少なかったがとてもエキサイティングだった。この成功体験がきっかけで、わりと気軽に講演会を企画するようになった。
　グループ研究では、グループ活動の難しさを思い知らされた。ベクトル合わせを早いうちにやっておかないとチームが一つにならない。一番の教訓。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　地域プロデューサーとなるために必要な要素をパラメーター化し、そのレベルをあげることでレーダーチャートの面積が拡がる＝地域プロデューサーに近づく、といった演繹的アプローチも考えてみてはどうか。

Q５．これからどうする？

　自分のホームグランドである行政の活性化の必要性を感じている。行政の世界で地域プロデューサーの役回りをしていきたい。

氏　　　名：曽根（そね）　真紀（まき）
活動グループ：応援志隊

入塾時の動機
　入塾の動機は職場がＴＭＯの担当だったのですが、行政主導まちづくりにとても違和感を感じていました。そんな時に行政などに政策提言されている市民団体の方にお会いする機会を持ちたいと思ったのがきっかけです。

Ｑ１．あなたの思う地域プロデューサーって？

一般市民の共感を引き出す人

Ｑ２．この２年間でどう変わった？

人のつながりを感じるようになった。
（県内で活動に関わっている人に出会うと必ず誰かの知り合いだったりすることが多いです）

Ｑ３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

ＣＳ神戸の国枝さん

Ｑ４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

具体的な講座をする（ファシリテーターのスキルアップなど）

Ｑ５．これからどうする？

　中間支援を勉強していたのですが、テーマを絞って団体に参加するのもいいなと思うようになりました。そこからでもいろんな広がりがあるので。

氏　　　名：林（はやし）　龍史（たつふみ）

活動グループ：応援志隊

入塾時の動機

　地域の問題を解決するためには、まず自分を変えなければならない。さまざまな人と一緒に研修することは自分自身を見つめ直す良い機会だと考えて入塾しました。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

　個人的にはみんなを引っ張っていくリーダーってガラじゃないので、縁の下の力持ちをイメージしています。

Q２．この２年間でどう変わった？

　知識も増えたし、ネットワークが広がったのは確かですが、そのことでどう自分が変わったか、正直よくわかりません。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

　泊りがけの研修で、明け方まで話したこと。皆さんタフで、ついていくのがやっとでした。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　塾生だけがわかる合言葉をつくったら面白いんじゃないでしょうか。初めて話す人に会話の中で、その言葉を言って反応したら塾生とわかるし、そこからの会話が弾みます。

Q５．これからどうする？

　ひっそりこっそり活動します。あまり意識せずに活動できればよいのではと考えています。「あら、やってたの」って感じで。

氏　　名：山田（やまだ）　幸子（ゆきこ）

活動グループ：応援志隊

入塾時の動機

今、この時代、人との絆をどのように築いていけばいいのか考えてみたい。

Q１．あなたの思う地域プロデューサーって？

地域のニーズをくみ取り、それを実践する行動力を持つ人

Q２．この２年間でどう変わった？

あまり変わりませんが、自分の問題点はわかりました。

Q３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

皆それぞれ思い出深いですが、続けていくことの難しさを感じました。

Q４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

塾生それぞれ今までの活動の場があるなら、それに焦点をあて、個人の能力向上に特化してもいいのでは？

Q５．これからどうする？

活動の中で鮮明になった自分の利点・問題点に取り組みたい。

氏　　名：小田島（おだじま）　敦子（あつこ）
活動グループ：Ｆｏｕｒ　Ｌｅａｖｅｓ

入塾時の動機
　性別役割分業がなく、男女共に個々の可能性を存分に発揮できるようなジェンダーフリーの社会作りに向けて、サービス提供型のNPOを将来立ち上げたい。第一の目標は(男女の)精神的自立と(特に女性の)経済的自立支援である。

Ｑ１．あなたの思う地域プロデューサーって？

　地域が抱えている社会的な問題について、一住民として考え、改善・解決の方法を模索していく人。そしてそのやり方（活動の内容）について他の賛同者を得て、一緒にやっていく人。未来塾の講義では、環境や街づくりに関するものが多かったように思うが、地域の抱えている問題・課題は実に様々である。私はどちらかと言うと、目に見えない心のサポートとか相談・支援を地域で展開していきたい。価値観が多様化している現代であるからこそ、お互いが住みよい地域を築くためには、自分とは違った体験を持つ者の心情に触れるという体験がなおいっそう必要になってきているのではないか。地域プロデューサーとして、そのような推進力になりたいと思う。

Ｑ２．この２年間でどう変わった？

　仲間が増えたのが一番の財産。あと、様々な考えの人と触れ合うことで、自分の他者に対する認識、寛容性も少し膨らんだのではないか。選択したテーマについてはもちろん多くのことを学んだ。

Ｑ３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

　参加した講義・活動はそれぞれ特色のあるもので良かった。コミュニケーションスキルの講義などスキル面に関するものも、もう少し時間を設けて内容を深めてほしかった。

Ｑ４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　未来塾は街づくりの講義が多く、テーマがすごく限定されている。紹介していただいたグループはどれも真剣に取り組んでおられ、学ぶところは大きく良かったが、塾ではより幅広く地域プロデューサーを捉える必要があるのでないか。それと、塾生はそれぞれの問題意識を既にもって入塾している人が多いので、講義はスキル的なもの（これを求めている人も多かったのでは、私もその一人）に絞って、それぞれのテーマにもっと早くから取り組めるようにしたほうがいい。

Ｑ５．これからどうする？

　Four Leavesとしての活動を継続していきます。個人的には昨年立ち上げたジェンダー関連の啓発グループをより、イベント方ではなく、より息の長い当事者支援やサービス提供型の団体へと発展させていきたい。

氏　　　名：竹嵜（たけざき）　みき

活動グループ：Ｆｏｕｒ　Ｌｅａｖｅｓ

入塾時の動機

　医療機関や余暇生活に、心理療法や生涯学習的な要素を取り入れ、患者さんや、ストレスを抱える現代人の心の部分のケアを導入していけるような活動がしたい。又そういう心のケアを専門とする活動家の地位を確立していきたいと思う。

Ｑ１．あなたの思う地域プロデューサーって？

人と人をつなぎ、自分で主体的に動き、一つの仕組みを作ること。

Ｑ２．この２年間でどう変わった？

ステキな人々と出会え、自分自身の物の見方が少し変わった。

Ｑ３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

一番最初の入塾時の日高塾長の環境関連の講義（不確かですが…）。

Ｑ４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　毎年同じところへフィールドワークに出かけるのはどうかなぁ…。又まちづくりばかり学んだ気がするが、もう少し広く様々なことを企画していった方が良いと思う。

　最初の頃の交流会は卒塾生がメインで、いまいち同期生の交流がはかれていないと思うので、もう少し各期の安定をはかってから、他期生との交流を深めても良いのでは？

Ｑ５．これからどうする？

研究＆活動を続けます。

氏　　　名：南井　良彦（みない　よしひこ）

活動グループ：Ｆｏｕｒ　Ｌｅａｖｅｓ

入塾時の動機

　地域の抱える課題が複雑化している現在、地域社会における各分野のエキスパートを市民セクターの中に生み出していく必要がある。この点におけるＮＰＯの役割に対して、私は大きな期待を寄せている。

Ｑ１．あなたの思う地域プロデューサーって？

なんなんでしょうね？

Ｑ２．この２年間でどう変わった？

少し歳をとったかな・・・。白髪が増えた。髪の毛が減った？

Ｑ３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

個性的なグループメンバーとの活動。とても楽しかったです。

Ｑ４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

前向きに。常に前向きに。

Ｑ５．これからどうする？

フォーリーブスとして末永く活動したいなぁ。

氏　　名：吉田（よしだ）　創（はじめ）

活動グループ：Ｆｏｕｒ　Ｌｅａｖｅｓ

入塾時の動機

　ボランティアという非定型なものを通じて人はどこまで関わっていけるのだろうか。とりわけ、地縁団体における地域の自然治癒能力の存在を仮定して地域住民は地域に対していかなる関係性を持ち、（能動的・否定的に）行動するのかについて研究したい。

Ｑ１．あなたの思う地域プロデューサーって？

　地域をハードな面からだけでなくソフトな面からも概観し、豊富な地域資源（ヒト・モノ・情報）を開拓していく人間。

Ｑ２．この２年間でどう変わった？

　世の中には沢山の人が生きており、異なった地域で多くのしがらみを抱いている。それでも人のつながりって素晴らしい！！と思えるようになったこと。

Ｑ３．未来塾での２年間。心に残った講義、活動は？

　彦根での研修。あんなに町屋風に整備しても結局、若者・学生は京阪神に流れて行くのかなぁ……。滋賀県の学生はどこで飲んでるの？？

Ｑ４．おうみ未来塾、こうしたらもっと良くなる！

　ダラダラしててもいいじゃない！！事務所に女の子がいればそれで世の中は素晴らしい！あと、駐車料金かなぁ・・・。

Ｑ５．これからどうする？

　研究研究研究。何の研究かは教えないけど（笑）。当分の間はライフワークである「少年・少女の非行・不登校・引きこもり」について見聞を広める予定。

おうみ未来塾５期生の皆さんへ

ご卒塾おめでとうございます。

５期生は、年齢も20代から70代までと幅広く、職業やこれまでの経歴もさまざまで、市民活動についてもいくつもの団体を掛け持ちして活躍している人もいれば、入塾を機にボランティア活動でも始めてみようか、という若葉マークの人もいるといった状況で、さまざまな人が集まったと思います。これだけ多彩な人たちが対等に意見を出し合い、一つものを作り上げるという経験は、あまりなかったのではないでしょうか。
「可塑性のあるカリキュラム」を特色としている「おうみ未来塾」でしたので、皆さんと話し合いながら、時にはまわり道をしながら、２年間かけて徐々に進んできた塾でありました。私たち事務局も、運営に悩むこともしばしばで、塾生の皆さんに多々ご迷惑をおかけしたと思います。一緒に育ててもらった、そう思っています。

このおうみ未来塾が「地域プロデューサーが育つ塾」として認知されるかどうかは、今後の皆さんの活動次第でしょう。すでに１期から４期までの100名の先輩が、地域で活躍しておられます。おうみ未来塾での経験とここで出会った多くの人たちとのつながりを大切に、ますますご活躍されますことを楽しみにしています。

淡海ネットワークセンタースタッフ
理事長　安藤よし子
事務局　山田光二・竹岡久雄・木村光一
天川隆男・川勝六四・笹山衣理

淡　海　力

－おうみ未来塾５期活動報告書－

2006年　4月

編集：おうみ未来塾５期生

発行：㈶淡海文化振興財団

〒520-0801　大津市におの浜1-1-20

TEL　077－524－8440

FAX　077－524－8442

印刷：㈱スマイ印刷工業

禁無断転載

～OH！魅力～